The Twelve Men of Letters.

拾貳文豪

第四巻

ヲルヅヲルス

宮崎八百吉 著

東京 民友社出版

十二文豪

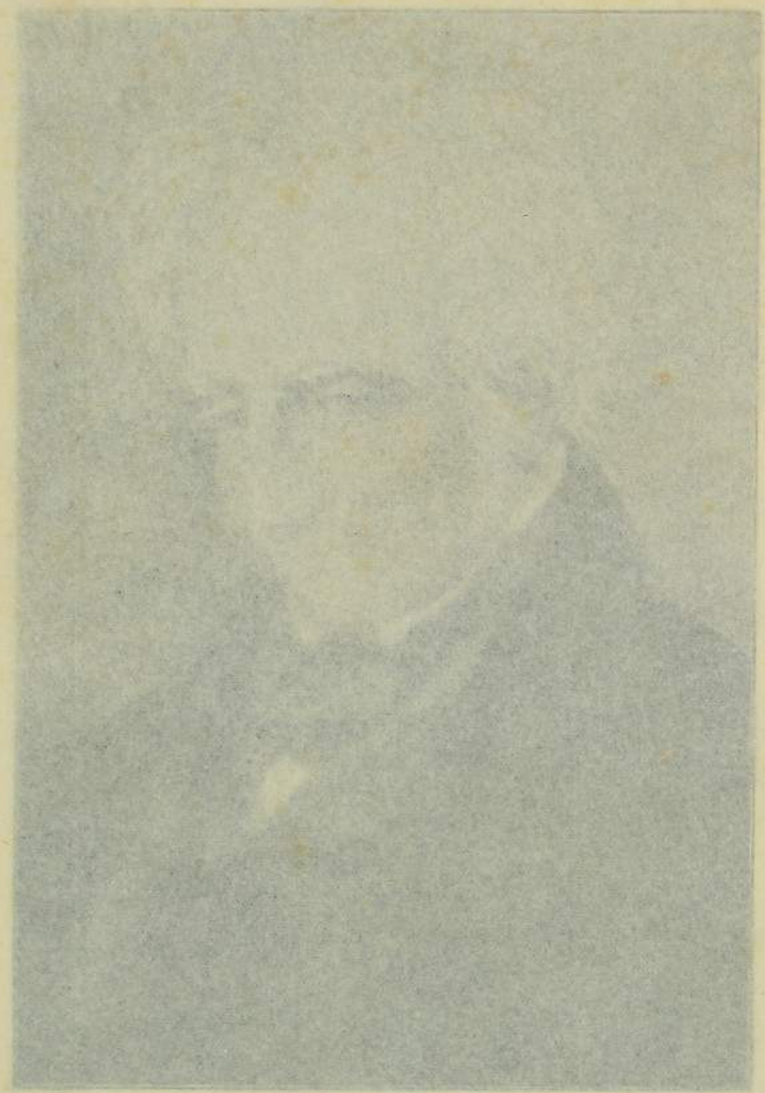
ゲーテ伝

チルソフ著

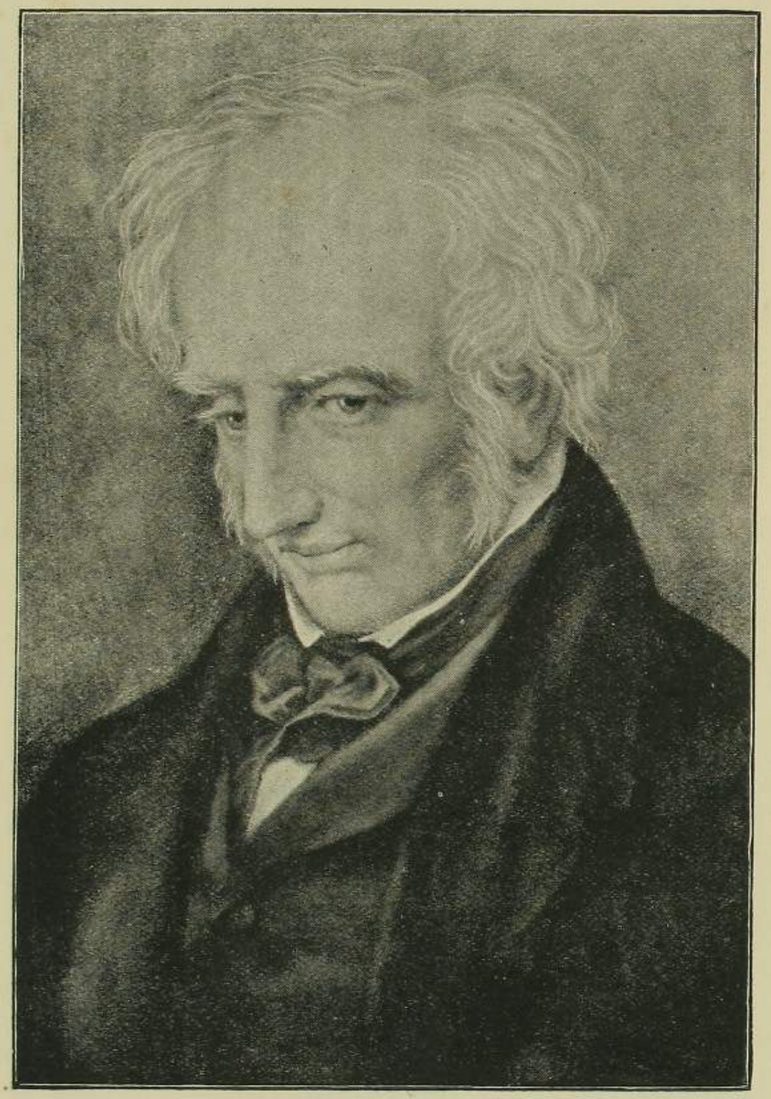
東京

民友社發行

岑山
藏書



ヌルタダルチ



ヌルヲヅルヲ

十版

歸省

定價　金十五錢　郵税　二錢

是れ此ヲルヅヲルスの記者が、四年以前に著したる眇然たる一冊子なり。渠が之を著はすや、大經營あるにあらず、大希望あるにあらず、唯其の經過し見聞せし所を敍して、以て江湖に質したるに過ぎず。然して其の一たび出て、我が讀詩社會の之を寵するに十版を以てし、其一萬部以上を歡迎して猶ほ盡きざる所以のものは、聊か田園趣味の眞を傳ふるに由らずんばあらず。今日以後、苟も田園生涯を愛するの讀者あらば、歸省は永く其の好伴侶たるべきも。

ヲルヅヲルス年譜

一七七〇年(一歲)四月七日カムバーランド州のコツカーマウス村に生る。

一七七七年(八歲)母を喪ふ。

一七七八年(九歲)ランカシヤイア州ホークスヘッド學校に送らる。

一七八三年(一四)父を喪ふ。

一七八七年(一八)カムブリッヂ大學に入る。

一七九〇年(二一)瑞西、佛蘭西に旅行す。

一七九一年(二二)大學を卒業して再ひ佛蘭西に遊ふ。○革命軍に投せんとす。

一七九二年(二三)佛國より歸國す。

一七九三年(二四)「晩歩」「粉本」の兩篇を出版す。

一七九五年(二六)朋友カルヴートより詩人たるへき遺言及ひ九百磅の遺産を受く。○妹ドロセアとドーセットシヤイア州のレイスダウン村に住し

詩人の天職を執る。○コレリッヂ來訪す。

一七九六年(二七)「邊民」の悲曲「荒屋」の作。

一七九七年(二八)ソーマーセット州アルフホックストン村に移居す。

一七九八年(二九)コレリッヂと叙情詩集第一卷を公行す。○獨逸に遊ふ。

一七九九年(三〇)歸國○グラスミールの山中に閑居す。

一八〇〇年(三一)兄弟デヨン海より來る○叙情詩集第二卷を公行す。

一八〇二年(三三)ロンスデール伯ヲルヅヲルス家に負債を返却す、○三たひ佛國に遊ふ○メリーハッチンソンを娶る。○「逍遙遊」「自由絶句」の稿を起す。

一八〇三年(三四)第一回蘇格蘭漫遊。○スコットと及ひ畫家ビウモントとの交誼。

一八〇五年(三六)兄弟デヨンの死。○スコット來遊。

一八〇七年(三八)叙情詩集第三卷を出す。

一八一一年(四二)シントラ會議論を著す。

一八一三年(四四)グラスミール谷を出て、ライダル山に入る。○印紙配付の職を得る。

一八一四年(四五)第二回蘇國漫遊。○「逍遙遊」成る。

一八一五年(四六)「ライルストンの白鹿」を出す。

一八一九年(五〇)「ピーター、ベル」出つ。

一八三一年(六二)第三回蘇國漫遊。○スコットを永訣す。

一八三九年(七〇)オックスフォルドより民法博士の學位を受く。

一八四二年(七三)三百磅の年金を受く。

一八四三年(七四)詩職に隆る。

一八四七年(七五)愛嬢ドラに先たつる。

一八五〇年(八〇)四月廿三日死す。○グラスミール谷に葬る。

ヲルヅヲルス目錄

詩人前記

第一章　自然の兒及ひ其故鄕……一
第二章　田舍漢及ひカムブリッチ大學……十一
第三章　生活の撰擇及ひ佛國革命……二十二

詩人正記

第一章　天生の詩人及ひ其妹孃……三十九
第二章　革新詩人ヲルヅヲルス及ひ舊派詩人コレリッヂ……五十五

第三章　湖畔詩人及ひ其閑居……七十一
第四章　湖畔詩人及ひ其家庭……九十九
第五章　湖畔詩人及ひ其詩……百二十八
第六章　ヲルヅヲルス及ひ讀詩社會……百六十三
詩人後記
ヲルヅヲルス及ひ陶淵明……百八十一

詩人前記

宮崎八百吉著

第一章　自然の兒及ひ其故鄉

井リヤム、ヲルヅヲルス

英國詩界あつてより以來四百年、嘗て湖國の美を歌ふ一人の詩人なき乎。四百年の間、湖國の美も亦嘗て一人の詩人を生せさりし乎。物質的破壞の力、到る處を破壞し來れり。地の中、天の如く安き人と自然の栖遲したる古村落も亦遂に顯はれすして消滅すへき乎。天一人の詩人を湖國に下す、正にゴールドスミスの「荒村行」、世に出つる一ヶ月前に當れり。

井リヤム、ヲルヅヲルス

賦命問はすして知る

へきのみ。

ヲルヅヲルス家の系圖

二百五十年前より、渠か家に傳ふる樫木筐に刻する系圖に由りて觀る時は、ヲルヅヲルス家は殆とノルマン勝王以前に溯る舊家にして、家は世々ヨークシヤアーのベニストンに住し、渠か祖父に至り、始めて湖國の一州エストモアランドに來り、こゝに若干の田園を求め、始めてヲルヅヲルスの姓を名乘れり。頭腦健なりと稱せられたる、

渠か父母

渠か父ヂヨン、ヲルヅヲルスは、狀師として伯爵ロンスデール家の代人に指定せられしより、エストモアランドを去りてカムバーランドに來り、コッカーマウス村に居り、ペンリスの呉服商の女、アン、カークソンを娶れり。妻の家も亦エドワード三世以來、世々エストモアランドに住する舊家なりき。一千七百七十年四月七日、井リヤムはとの夫妻の第二子として、コッカーマウス村に生れぬ。渠か兄をリチヤ

渠か兄弟

ードと呼び、弟をヂヨン、次の弟をクリストフハーと云ひ、然して一人の季妹ドロセアは即ち渠か後年唯一の侶伴其人なりけり。

母の故郷に往く

渠は其幼年を半は其故郷に、半は其母の故郷に暮らしぬ。母は嚮に倫敦の知友を訪ひ、寒を得て歸り、病をその實家に養ひしより、渠も亦弟妹等と共に、母に從ひてペンリスに往き、處の學校にて初科の教育を受けたり。渠は多くの幼なき友の中最もメリーハッチンソンと呼ひ做す小女と睦ましかりき。

メリーハッチンソンと睦しかりき八歳にして母を喪へり

渠か八歳の時、母は遂に世を去れり。渠の母を記念する場合少なかりき。然れとも救主復活祭の前、常例に從ひて、寺院に開かれたる小兒學校に渠を遣るへく、親しく花束を渠か胸に縫ひつけやりし母の慈顔は、如何に深く渠か眼に彫られたる乎。然して五兒の中、母か生前最も憂慮したりしも亦此兒なりけり。彼(女性の代名詞として)

母の記念

井リヤム

善にも惡にも強ければ

渠自殺せんとせり

渠獨樂を擊てり

は常に其友に語りて曰ひき、「井リヤムは善にも惡にも強ければ前途甚だ氣遣はし」と。蓋し渠は極めて強情過激の腕白兒なりき。渠は母の實家にありし間、ある惡戲の爲めに叱責せられしを憤激し、自殺してくれむとの念を以て、家の二階に駈け登り、其處に藏めある擬刀を握り、忽ち自から驚きて止みしとありき、ある日また渠は其兄リチヤードを誘ひ來り、恒には敷かれぬ絨壇の上にて、獨樂を擊ち、其の壁に懸れる世家の畫像を見つけて、リチアードに勸めて曰く、「御身其老媼の下衣の處に擊つて見すや」と。リチヤードの應ぜざりしかば、渠自身獨樂を執りて其下衣を擊ち貫けり。之か爲め渠は痛く折檻せられたるも、他の腕白兒童の如く、「何かあらん」、「何かあらん」と意地張り通せり。

母死して兄妹盡く故鄉に歸れり。渠は村の小學校に在ると一年許、

ホークスヘッドの文典學校に於ける渠

初めての詩作

九歲の時、兄に隨ひて湖國の一州ランカシヤアの一舊府ホークスヘッドの文典學校に遣られたり。茲處には一老媼の能く兒童の世話を爲すものありて、渠等兄弟も亦其の手に委ねられたり。此學校に於て、渠はいと無事に幸福なりき。渠は詩文集を讀むの自由を得ければ、茲に始めてフヰールヂング全集、スヰフトの過半、「ドンキホーテ」、「ギル、ブラス」、及ひ殊に「カリバル紀行」、「鹽物語」を愛讀したり。然して渠か詩作は此學校に於て「夏暇」てふ科題に對して試みたるが最初なりき。渠は猶ほ自個の好によりて「歸校」の題を併せ賦したり。渠は自ら惡詩を作れりと思ひき。然れども渠は教師等より、同級の中第一等の詩人と指目せられ、猶ほ監督より喚ひ出されて、當學校二百年祭の祝辭を宣べよと命ぜられたり。渠は謹むでポープの詩躰を摸倣して祝辭を綴り、分に過きたる名譽を博しぬ。

渠を薫陶したるものは自然なりき

湖畔の晩歩渠が心の樂しき種まきの時

然れども詩人として渠を素養したるものは、書籍にあらず、學校にあらず、名譽にもあらず、ポープにもあらず、渠を薫陶したるは自然なりき。渠は既に目を開けば景色を觀る湖國の一村に生れ、スキッドー山、デルエント湖と共に生長せり。其のホークスヘッドに來るや、是處も亦湖國の一隅にして、近くエスウエイト湖の渠かために其懷を開けるありき。試みに此の自然の兒か、如何に其の懷に養なはれしかを觀せしめよ。

渠は日科を了る毎に、飄然として友を離れ、一人出てゝ湖畔の山村に晩歩するを例とせり。渠が往くは概ね日の西山に落ちんとして、雲影猶ほ山背にある頃なりき。渠は山下の柵中より、首を出して泉流を凝視し、渠を認めて水を叫ふ牧馬に對し、馬語を以て應答しつつ、其の泉流の幽かに涵ふる深林の中に往き、山影、雲影、樹影、

空影等、大凡仰き視るへきものを、水面に俯し觀ると久くして後。溪流と共に林中を出て、遙に湖水に向ふ下流に懸りて、葛累のみ匍匐ひ渡れる古橋の上に、時々去來する牧夫を見たり。日の入らむとして猶ほ山に在り、日光宛然光粉となりて山上に散し、隱れたるものを盡く顯はし、顯はれたるものを盡く紫嵐の裡に藏さんとするに當り、渠はその最も遠く最も高き山頂に於て、往々一二介立せる牧夫の天の靈光に沐浴して、宛然光明の裡に相語る、キリスト、モーセ、エリヤの如きを見。人の中、威儀形容斯の如く高尚莊嚴なるものあることを思ひ、恍惚として心往くもの屢なりき。見ること久うして暫く冥く、見る所なきに至りて首を回し、山陰の湖水一碧鏡の如きを見き。

忽ちにして鐘聲響き、忽ちにして牧笛起り、忽ちにして山鷄遠近相

呼び應へ、日入つて天地青く、牧父牧童前後の山路より還り來り、時に帽子を振りて後れし犬を呼び、人は路と共に湖邊に合ひ、湖邊より分れ、其兩岸を沿ふて歸れる夕、渠は獨り佇立して、處々の素屋より上る烟を見るなり。日光久しく既に天に歸し、天上の星漸く輝やき、四方の山遠近相合して一帶の黑壁を成し、面背物を辨せざるに到るも、渠は猶ほ歸らんとせず、渠は山と山との間に、一道の微光を認めて雀躍し、出て來る月を待ちにき。月出て〻萬物を一振し、山村再ひ明かなるに當りては、覺えず林中の烏と共に快呼して天上の明光に對しき。

渠は時の甚た過きたるを思ひ、朋友の久しく既に渠を覓めつゝあるを思ふと雖も、遠山は月明の裡に隱れ、近山は積翠の間に遠かり、然して處々畫間聞えさりし溪水聞え、燈火の見ゆる方角よりは、温か

學校を去るに臨みて告別の詩を賦す

なる家庭の聲耳を誘ふ時に、渠は云ふへからさる平和を感し、歸らんとして猶ほ幾度か徘徊顧望しつ、その眠れる舟夫を呼ひ起して、舟に乘り、漸やく書の如き山村を遠かり、靜かに湖上の月影を分ち、始めて寓居に歸れる時、渠は唯夢の醒めたる如くなりけり。

嗚呼是れ「渠が心の樂しき種まき時」にてありき。渠が初めて登りしニストン邱上に淹留する夕陽を見るや、感懷自ら禁ずる能はす、學校を去るに臨み、告別の詩を賦して深く相期する所ありき。

懷かしき故鄉よ、我は誓ふ、
此訣別の際感する所によりて誓ふ、
よし我の歩は何處に向くとも、
よし我か道は何時盡くとも、
我か心必ずや後ふりむきて、

爾の邊を顧望すべきことを。

恰も休せんと欲する日の
西山の頂上に着く時、
その漸次に沈みゆく影の、
よし其麓を照す能はずとも、
餘光猶ほ好く
其初めて出たる邱の上に留まる如くに。

十四歳にして父を喪ふ

詩人前記

第二章　湖國の田舍漢及びカムブリッチ大學

渠か母の、四男一女を其夫の手に遺して逝きしより、決して健康の衰弱と世の煩累に堪ふる能はざりし渠か父の、妻に後るゝこと僅かに六年、亦五個の兒女を置きて往きしは、恰も井リヤムが十四歳の時なりき、渠等兄弟父の喪によりて、ホークスヘッドより歸り來れり。ヲルヅヲルス家の資産は、素と甚だ豊かならざりき。渠か父の代に到りて、僅かに五千磅を餘せるのみにして。父は之を唯一の遺物として、ある堅固なる銀行に預け置きしに、渠か主人ロンスデール伯は之を偵知し、代人たる渠か父の強項を抑へんとの目的を以て、強ひ借りて返さゞりしかば、渠か父の死後、遺す所は幾何もなかりき。

孤兒一轉して貧兒となる叔父に養はる

然して其の幾何もなき遺産すらも、空しく貸金督促の爲に消費し盡され、五個の孤兒、一轉して貧兒となり、親切なる二人の叔父、即ち父の兄弟なるリチャード、ヲルヅヲルス、母の兄弟なるクリストフ、ー、クラッカンソープの分ち養ふ所となれり。嗚呼是れ後年一家分散して、リチャードは家を嗣き、井リヤムは妹と共にクラスミールの山中に退き、ヂョンは去りて海に往き、クリストフヘーは僧となり、兄弟再び相見る事少なる人生別離の初めなりけり。

十四歲より十八歲まで

井リヤムは父死するの日、ホークスヘッドを退きしより、兩叔父の庇蔭によりてカムブリッヂ大學に遣られし十八歲の時に到るまで、如何して四年の星霜を經過せし乎、何人も告ぐるものなし。渠か「逍遙遊」(エキスカーション)の中、自個を記せりと云ふ周遊者の傳中に於て、周遊者其人か、十八歲まて其清貧を維持せんか爲め、村落の學舍に敎へむと試みたるとあるとを告げ、然して他の叙情詩中亦、屢ホークスヘッドの敎師たりし、マシユーと稱する鄉先生を歌ふものあり。殊に渠が傑作の一なる「泉」(フハウンテイン)に於て、七十二歲の老翁マシユーと、十八歲の渠との會話、及び其平生の交情を叙するを觀る時は、渠も亦或は自個か育ちし學校に於て、敎師仲間となりしにあらずや。縱令敎師仲間とならざりしとするも、或は渠が猶ほ生徒として乎、若くは時々の訪問者として乎、渠が少かりし時、甚だホークスヘッドに疎遠ならざりしを知る。

カムブリッヂ大學に於ける渠

千七百八十七年、渠はカムブリッヂに於けるヂョン大學に上れり、是は云ふまでもなく古來大名の搖籃なり。詩界の曉星チョーサーの後を承けたるスペンサーを初として、セキスピアーの師マルローも茲處より出で、セキスピアーの競爭者、ベン、ヂョンソンも茲處より出で、失樂園のミルトンも、ポープの先輩トライデンも、グレイも亦

渠は湖國の人なればはなり

茲處より出でたり。渠今來りて是等先人の足跡を追躡す、豈に多少の感慨あらすとせん哉。千年不斷の鐘聲を聞き、變遷の外に立てる古建築を觀、其の幽奥なる講堂に入り、到る處人心を邃からしむべき寺院的靜寂を感し、歴史的古色を見、到る處の深林を見、到る處の蔭影を見るは、宛然齡を以て崇嚴なる人物に對すると一般、渠が如き默思の人に取りて、最も適當なる默思場なりしとは明かなり。然り渠が斯の如く舊き智識園に入つて、木石の如く無感覺なるとは、到底思惟すべきにあらず。然れども渠が初めカムブリッヂ大學に對して、最も深く感じたるは、他なし、他鄉の感なりき。渠は湖國の人なればなり。

渠は多くの先輩の如く、ミルトンが「欝思の人」を賦したる深林を步き、無聊なる春の夕、遙かに響く晩鐘を聞き、或は鶯歌ふ林間の幽處を訪ひ、或は爽快なる夏の曉、長廊より菩提樹の馨香を追ひ、或は秋闌にして楡栗を亘る風を聽きしかとも、腹藏なく渠が心を云へば、渠は寧ろ追躡すべき自個過去の足跡なきに窮するものゝ樣なりき。

田舍漢の書生

時ありては四望天と際して、些少の變化も景色もなき平野すら、渠をして太古樂園の形影を想像せしむるに足るありしと雖、其實渠は始めて東京に出で來れる邊地の書生の、茫々たる武藏野に對して、四顧山なきを嘆ずるが如く、心常に寂寞に堪へざりしなり。且つ渠は自然の兒、換言すれば田舍漢にして、然も馴すに難き我儘者なりき。渠は敎場にあつて偶々顏を出せば笑はれ、偶々語を出せば弄ばるゝ方の人物にして、夫の時の權門に緣あるを誇り、某々の夜會に招待せらるゝを榮とする少年紳士、流行を競ひて、文具房の少女若くは咖啡店の家婢に諛らふ情人等に對しては、冷然として面

を背くる方なりき。渠も亦一日も友なき能はざりしと雖、漫然名刺を配りて得意とする交際家の亞流にあらず、必らずや意氣相投し、肝膽相披くの友誼に非ずんば滿足せず、隨て渠が他を棄て去つて省せざるが如く、他も亦渠を棄て去つて省せざりしが故に、渠は久しうして唯一人のミスター、ヂョンより外、殆と他の知己を得ることなかりき。

「晩歩」の詩を作る

渠は無聊に苦みたり、加ふるに渠が最初の一年は、其の修養の不十分にして、他の書生と競ふと能はさりしが爲め、大學は殆と不愉快となり、渠をして轉た故鄉の追懷の裡に退縮せしめぬ、然して夫のエスヱイト湖畔の自然の記憶、今や眞如の景色の如く心眼に活如し來るに及ひ、渠は前日の晩歩（イーブニング、トー）を叙して長篇の詩を作り、之を少妹ドロセアに贈りて、只管夏暇の來るを待ちにき。

第一回夏暇ホクスヘッドを訪ふ

第二回夏暇情婦と相親しむ

第一年の夏暇來れり。渠か喜知るべきのみ。渠は疾風の如くホークスヘッドに走り、其懷かしき學校を訪ひ、殘したりし老友マシユーを弔ひ、寓居の老媼を音つれ、其率き留むるまゝに留まり、渠か不在の間に起りし珍事を語る老媼に耳を傾け、近處の村民の慶弔に對しては深く父老に同情を表し、心易き少女等に歡迎せられては、村落の舞踏會に於て共に一夕の歡樂を偕にし、然して其間日夕悠々湖畔を歩しつゝ、月を亘る夏暇をは二三日の如く消費し盡せり。

第二年の夏暇に於て、渠は母の故鄉ペンリスに歸り、叔父の家に養はるゝ小妹ドロセアを見舞ひて、爰に是迄折々忘れて折々懷ひ出せし、メリーハッチンソンと相見、互ひに其大きくなれるに驚きたりき。斯くして渠等は人生最も愉快なる交際の裡に游びつゝ、此間遂に大膽なる約束をなしたるものゝ樣なりき。

第三回夏暇大陸を漫遊す

渠未た自由革命に

最後の夏暇に於て、渠は其の血氣を、變れる方角に向けたり。渠は其親友ミスターヂョンと共に、大學に先例なき大陸漫遊を思ひ立てり。渠等は直ちに同意し、僅々二十磅の旅費と、小き衣兜に入れたるものゝ外、携ふる所負ふ所なく、笻一本を振り回して、第一に佛蘭西に渡り、佛蘭西より瑞西に入り、元氣に任かせ足を擧けてアルプスの高峰を凌き、終古老ひつゝ老ひ盡さゝる其綠林を蹈み破り、地にあつて、最も天に近き處に立ち、俯瞰すれば地は盆の如く、一たび蹈めば世界を轉ずべく、一たび呼べば天下を震はしむべき絶巓を踰へて、伊太利の北地に出て、歸り來りて大陸漫遊の率先者たる名譽を誇り、大學生活の蠢爾たるを憫笑したり。渠が集中、晩歩の次にあつて、「粉本」（デスクリプチーブスケッチ）と題する長篇の作は、此行の紀念なりけり。」

然して此行渠は、猶ほ一層珍らしき土産を得べかりき。何となれば

感せさりき

渠は猶ほ故郷の人自然の兒なりき

此時青年詩人バイロン、コレリッヂ、サウゼー等を鼓舞雀躍せしめし人間の氣焔、自由革命の現象、歐洲大陸到る處に見るべくして、渠も眼前之を見き。然れども渠は之に對して想ふが如くは感激せず、却て白眼看過せしものゝ如くなりき。渠が當時の述懷に由りて觀れば、渠は猶ほ故郷の人、自然の兒なりき。

猶ほ未た世のものならで、家庭のものなる
青年の我、是等の事物を遠方より、
且つ見且つ聞き、深く感し動かされたり、
然れども自身親ら關係せさりき。
我が其裡を經過せしは、恰も空飛ふ鳥の如し、
若くは魚の水中に泅き樂しみ、
餌に養はるゝ樣にも似たりき。

斯の如きの快樂、斯の如き扶助は、
我が須つ所ならざりき。長生の宇宙は、
我が回頭する處に其榮光を顯はし、
然して我が無垢少年の自在の心も亦、
時に隨ひて新なる娯樂を曳き出し、
綠野を照す日影の如く我が足を展へにき。

渠廿二歳の夏大學得業生の學位を得たり

チルズチルスは故郷に歸れり

詩人前記

第三章　生活の撰擇及び佛國革命

千七百九十一年、渠はその廿二歳の夏、大學得業生(バチエラーオフアーツ)の學位を得てカムブリッチを去れり。渠は暫時倫敦に滯留したる後、其友ヂョンをエールスに於ける其父の家に訪ひ、渠と共に北エールスの山地に遊べり。ヂョンは寺院に入らむの望あり、ヲルヅヲルスにも亦僧たらんことを勸めぬ、渠は未た答へざりき。

ヲルヅヲルスは故郷に歸れり。渠か四年の學成りて目出度故郷に歸り來るや、二人の叔父は渠を養ひしとの徒爾ならざりしを喜び、涕もろき父老等は渠を誇るべき父母なきを嘆し、兄弟等は、其裡既にヲルツヲルス家の面目を大ならしむべきもの一人を得たるを喜び、

其妹も亦父の死後依る所を得たるを喜び、然してメリーハッチンソンも亦幸福の日漸く近つけるとを喜べり。この祝賀群中にありて渠獨り安からず思へり。

渠は生活せざるべからず、然れども如何にして生活すべき乎を知らざりしなり。郷黨知友にしてヂョンの如く僧たらんとを勸むるもの多かりき。然れども渠は自ら顧るに、自國の性情斯かる聖職に對する素養なきが爲めに。良心と情慾の訌爭をして徒らに其生命を破壞せしむるに止まるへきを思へり。或は法律家たらんとを勸むるものあり、渠は兩耳を掩ひて震ひ避けぬ。渠は大學にありし間、好むて兵書を讀み、自個大將の才ありと想ひ、試みに軍人たらん乎と想ひしと數回なりき。今も亦其念なきにあらす、然れとも軍人たらんには、第一貢緣なきに窮し、第二に若し軍人となり、不幸にして西

渠は生活せざるへからす然れども如何にして生活すへき乎を知らさりしなり

印度隊に屬せらるゝが如きとあらば、渠の才幹を以てするも、其地の黄熱より身を拯ふと能はざるべきを恐れて止めり、然して自個の詩人として生れたるとは夢想にだも心づかざりしが故に、不世出の詩人も、他の凡々たる書生の如く、自個の材を發見する能はさるに苦しめり。渠は生活の撰擇のため、再ひ親戚に請ひて幾干の旅費を得、其年の秋、再ひ渠は茫々たる大世界に向ひて發足したり。

渠は先つ倫敦に往けり。倫敦に於て、渠は唯マレイ人、支那人、白裝の黑婦人等の、時々街上を通行するを認むる外、少しも面白きとなかりき。渠か迂路迂路と人生の迷巷を徘徊しつゝありし間、不定の心、忽然革命の聲に誘はれ、年の十一月、渠は飄々乎として佛國に亘り、巴理に入れり。

佛國の革命は正に一髮の危機に際せり。國民既に新憲法を制定し、

生活の擇の爲に大世界に出てたり、

渠か不定の心革命の聲に誘はれたり

革命の危機

國王ルイ亦既に之を認可し、滿目の急雲忽にして一過せし時、革命の偉人ミラボー俄然として死より奪はれ、是まて渠か指揮の下に統一せられたる國民議會の三派、即ち立憲王政を主張する王黨、古代共和制を愛慕する平野黨、主義もなく目的もなく只管破壞を好むの山岳黨、復び以前の三派に瓦解し、革命の氣焰兩途に分れ。道理と情緒と日に訌爭し、然して其間恐るべき山岳黨、宛も地平線上砲車一片の雲の、隱然として頭を擧けむとする如くなりき。

此時に當り巴理は人の海の如く、民心搖動して定まらず、一群一群、波の如く潮の如く、議會に集り、倶樂部に聚り、遑々然として日に事の起るとを待つものゝ如くなりしかば、ヲルヅヲルスも心安きと能はず、日に人の流の裡に雜りて、或は議院の討論を傍聽し、或は倶樂部の演說、集會の評議に傾耳し、英國民か今日生れながらにして得たる同樣の權利を得んか爲に、數年の間生業を拋ちて紛擾せる佛國民を見、喟然として歎息し、思はず中夜涙下りき、渠は今にして始めて愛國者となり、身を以て國に許さんとする心ありき。渠は巴理にある間、バスチル城の遺墟を訪ひ、古來幾千の愛國者か、王者の快樂の爲に吟呻し、絕命したりし舊跡を觀、之が紀念として、今猶ほ無罪を天に叫ばんずなる一個の石を拾ひて歸れり。

渠は巴理よりオルレアンに入れり。オルレアンに於て、共和黨の一領袖ビウクリ井ス將軍の交際を得たり。將軍は熱爽なる愛國者、勇敢なる武人、然も智あり德ある哲學家にして、日夕渠を或はロイア河畔の晩歩に伴ひ、或はオルレアン近郊の林中に導き、渠に告るに今の天下の如何に老朽して悲慘なる乎、來らんとする世の、何如に新に且つ美にして、然も亦何如に幸福なるべき乎、然して此の轉變の

渠身を許して愛國者となれり

オルレアンに於てビウクリ井ス將軍と交際す

「年少なるは殆ど天授」

際にあつて、地軸を動かすとの如何に愉快なる義務なるべき乎を以てし、宛かも目既に其黄金時代を見たるものゝ如くに語りしより、渠は殆と心醉へり。渠は斯くも深慮ある哲學家、擧止を苟もせざる德義家、自個の先身に似たる斯の如き人の、心よりして革命を讃し、身を以て之に殉せんとするを見、（然り渠は久しからずして外國の同盟軍を迎へ、この河畔に戰沒せり。）血の迸らむまで激昂するを覺えざりき、渠は叫べり、「此曙に生き殘れる者は幸運なり、年少なるは殆ど天授」と

然れども渠は身英國の人、佛語を語るとも亦自在ならざるが故に、餘儀なく一個の傍聽者として過るの外なきを思ひ、其年の冬をオルレアンに過ぎたる後、恐らく其昂かる血を沈めんとの目的を以て、翌年の春、オルレアンよりブロイに出で、春より夏の間、且らく自

革命軍に投せんと巴理に返れり

革命の墮落

然に對して放浪したるも、人間の聲、宛も太鼓の聲の如く心を動かすに及びては、渠は久しく安らかなると能はず、年の十月、斷然革命軍に投せんとの心を決めて巴理に還れり。還り來れば舞臺は旋れり、革命は殘ましき人間の墮落となり、巴理は人間墮落の地獄となれり。嚮に着々頭をあげつゝありし山岳黨は今、蹶して革命の事業を横奪せり。渠が傾寫したる平野黨の如き正義人情に憑れる黨派は、早く既に其勢力を喪なひ、王黨は亡びて王捕はれ、王后王子亦捕はれ、豫期されざりし革命行はれ、佛國は意外なる共和國となり、佛國佛民は意外なる自由民となれり。山岳黨の殺氣日に天に漲り、業既に血雨を濺きて地に流せり。今も猶ほ街衢處々の隅に粘着したる血痕殘り、街衢の外今猶ほ人の死骸を擔きて死骸の上に積むの見ゆるは、山岳黨の一怪物、怪物なるが故に山岳黨

九月殺戮の後

人生の慘劇却て渠を呼ふものなるか如くなりき

の魁たりしダントンが、無辜三千の囚人を大苍に牽ひ來りて、外國同盟軍に欵通したるの嫌疑を以て、白晝吏を遣りて之を刺し盡さしめたる九月殺戮の痕なりしなり。然して全巴理人民は血を見て狂呼する餓犬の如く、轉た血に向ひて絶叫し、ヲルヅヲルスをして瞿然として恐れ。竦然として震はしめたり。

渠は既に革命の墮落したるを見、墮落の勢今日に止まるべからざるを觀たり。渠が眼明かに襲ひ來る「震栗之世」を前見せしものゝ如くなりき。渠は今背面せずしては街を歩く能はざりき。然れども猶ほ渠は此地を去るとを欲せざりき。滿目人生の慘劇、却て渠を逡巡せしめず、却て渠を呼び渠を牽くものあるが如くなりき。渠が爲には、此の墮落の裡にあつて猶ほ爲すべきものあるが如く、一日革命の裡にあれば、一日革命の爲にすべきものあるが如く、縱令自個外國人に

未た平野黨に投せすして旅費盡きたり

して、言語の自在を欠くと雖、身を自由に献ずるものゝ爲には、必ず道のあるべきを信ぜり。渠は斷乎として決心せり。渠は平野黨に投せんと決心せり。然して渠が未だ平野黨に投ぜざるに旅費先づ盡きたり。

渠は甚だしく醜辱を感ぜり。渠は正義の爲、人情の爲、身魂を盡して爲す所あらんとする天下の愛國者としても、猶ほ旅費盡くるが如き云ひ甲斐なき境遇に立たざるべからざる乎と思へり。然れども旅費盡きたるは事實なり。然して如何なる愛國者も、空腹にしては動くと能はず。然らば則ち歸らむ乎。生活の撰擇の爲に出で來りて、殆ど一年半に垂んとし、唯金錢と時間を浪費して、猶ほ依然たる職業なきの厄介者たり、是れ歸るにも歸られざるなり。然れども旅費は既に盡きたり、一日も淹留すべからず、渠は今雙方に面目を失へ

渠は進退谷まれり

り。渠は進退谷まれり。千七百九十二年の暮、渠は不面目を忍びて歸國の路に上れり。然して一年の後までは此不面目の歸國の、如何なる渠が好運なる乎を知らざりき。

歸來匆々晩歩粉本の兩篇を出せり

歸國の初に於けるヲルヅヲルスの窮迫は、歸來匆々、其の大學に於ての作なる「晩歩」「粉本」兩篇の原稿を把つて、書肆の慈悲を乞ひし一事を以て之を知るべし。幸運にも、詩は書肆の手に受られぬ。然れども渠が之に因て幾何の原稿料を得たるやを知らず。詩は出たり。兩篇とも、書生の作としては觀るべきものなきにあらざるも、詩人の詩としては唯ポープの模倣と云ふ外、評すべきものもなかりき。

ドロセアは之を公にする前に於て、他の知友の推敲を經ざりしを遺憾とせしも、渠は恐らく、一には知友に示す暇なく、二には他の推敲を經る必要なかりしならん。何となれば此詩に就きて、渠

ドロセア嬢の評

詩は渠を助くるに足らざりき、

か要する所は金錢にして、名譽にあらざればなり。然して詩はある一詩人の机上に留まるの外、直ちに書架の下層に沒せり。

要するに、詩は渠を助くるに足らざりき。渠は相變らず兩叔父の厄介なりき。然して吾人は兩個の叔父か、此の厄介なる大學得業生に對して、如何なる希望を屬せし乎を知らずと雖、優渥なる天命を帶びたる此青年を追ひて、浮世の窮巷に俗了せしめず。渠自身其天意と相感發するまで、渠を養ひ渠を放ち、其爲す所に一任せしめし好情に對しては、世のヲルヅヲルス信者の深く謝せざるべからざる所となすなり。

生活の撰擇昔畫餅に歸せり

然して渠は今も猶ほ生活を撰擇せり。渠は筆を執つて生活せんとを決せり。渠は博愛家と稱する月刊の雜誌を發行して、大に民主主義、共和主義の爲めに氣焰を吐かんとを計畫せり。然れども尋常一樣の

窮書生の妄想の如く、其計畫は畫餅に歸したり。渠は猶ほ如何にして新聞事業に關係せんと盡力せしも、これも亦徒勞にして了れり。渠が生活の窮是に到りて極點に達せり。

渠か生活の窮すると共に、思想の窮すると一層甚だしかりき、何となれば其の思想の本流たる佛國革命は、墮落し去つて復た還すべからざれはなり。見よ革命は今戰鬪の如く、巴理は恰も戰場の如く、最も多く殺し得るもの、最も大なる權力を得るの有樣となれり。名を聞くも人を震はしむるダントンあり、ダントンの下にありて、ダントンよりも兇暴なる殺人狂マラーあり、マラーの下にありて、マラーよりも獰惡なる、ロベスピアーあり。千七百九十三年の初、渠等は遂に國王を率きて斷頭臺に上らしめぬ。さしも堪忍强かりし英國政治社會に於ても、恂々として物論は湧けり。民黨の大勢力なり

しフホックスも佛國革命を贊成したる爲めに、墮落政治家として政治界より擯斥せられ。哲理的大演說家ボルクは、革命を評して空想と呼び、久しく心を動かさざりしピット內閣も、議會に逼られて、遂に戰を佛國に宣告せざるへからさるに至り、憐れなるヲルヅヲルスは、宛然咽喉を扼せられたるもの、如く、口復た云ふと能はさりき。墮落の勢力、一轉して「震慄之世」となれり。三人政治に反對するもの、若くは反對の嫌疑を蒙むるものは皆殺され。平野黨の名士半は自殺し、半は囚はれ殺されたり。渠は寒栗して上帝の恩寵を謝したり。ダントン漸く血に飽けり。マラー代りて斷頭臺を執れり。渠か政治上の主義は、殆んど佛國民を殺戮し盡さんとするにあるが如くなりき。渠は天使の如き一少女に刺されぬ。斯くしてロベスピアーの世となり、人は死を見ると歸るが如くなれり。ロベスピアーは先つ悔

世は全く革命せられぬ

悟せんとするダントンを殺し、斷頭臺を以て遲緩なりとし、斷頭臺に代ふるに大炮を以てし、里昂に於て、ツーロンに於て、全府の人民を一處に集まらしして砲擊し盡し、或は舟に人を積むと薪を積むか如くして、共和派の故將軍ビウク井スとヲルヅヲルスと其畔を晩步したりしロイア川に流せり。

世は全く革命せられぬ。新曆發布せられて、秋の初一年の初めとなり、主の日は消滅し、毎十日は休日となれり、無神論を眞理と布告せられ、ノートルダムに於て、無神教祭執行せられ、一個の娼婦、道理の女神と崇められ、祭司、僧官、禍を恐れて無神論に改宗し。人は死に慣れて驚かず、女子も小兒も、戰場に出つるの義務を課せられて敢て怨みず、外國の兵漸く國の四境に合ひて、兵隊盡く巴理に滿てり。巴理は殆ど兵營の如く、到る處に兵器鍛はれ、鐵砧の音、終夜に響き、「全府宛然復た眠る勿れ」と叫ふの聲を聞くが如く、世の終に近つきたるの感あらしめぬ。千七百九十四年、ロベスピアー殺されたれど、墮落の勢、遽かに止むへくもなかりしなり。

ヲルヅヲルスの心緒は、亂れて絲の如くなりき。渠をして速かに革命を吐き出さしめは、寧ろ斯の甚たしきに到らさるへかりしも、渠は之を吐き出すと能はさりき。蓋し夫の善にも強く惡にも強かりし渠の性情は、今や智性と感情と著しく發達し、事の初、甚たしき冷灰の人、中途以後甚たしき熱着の人となれるを見る。其の未た物の眞相を解せさる間は、渠は水の如く冷靜なりと雖、一たび其深邃なる理性を以て之を會し、强靭なる感情を以て之を捕ふるに及むては、之を捕へて擒にし。自個掌上の物となさずんは滿足すると能はず。其革命に於けるも亦然り。初めは殆ど白眼に看過したるも、一たび革

ヲルヅヲルスの性情

渠は事の初め甚たしき冷灰の人、中途以後甚たしき熱着の人なりき

渠か思想界の訌爭は理性と情緒との爭

命の眞理に合するを看、一たひ之か爲に身を許すに及むては、革命を以て理想の革命ならしめずんば、其墮落の運命を共にせずんば止む能はざるなり。然して今や革命の到底する所、感情の漲流の道理を沒すると、風浪の堤涯を沒するよりも易く、道理の力、感情の墮落を支ふるに堪へさること、一髮の千鈞を牽くよりも危きを見、湖水の如く靜かなりし渠が心界——理性と情緒と、智識と信仰と、適當に配合せられし一大蛛網の如き思想界も、亦忽然として動搖し來り、道理と感情の爭訌となれり。渠は確く道理を固守し、盡く感情を抉出し來りて、痛ましき分析の上に置けり。渠か思想の綱盡く破れ、想像の畫は夢の如く消え去り、書籍の敎ふる以前に於て、天てふ故鄉より得來りし所の美妙の感覺、身邊の自然に涵養せられし不思議の愛情、邱谷、林泉、江湖、田園、禽鳥の聲流水の音に接して勃興し來れる詩想、盡く一片の烟の如く放散し、無意識の琴線は斷絕して復び響かず、幸福なりし心の平和は亡び、盡きざる苦痛交々逼り來るに及びて、渠は失望して德義界の疑問を拋棄せり。渠は獨り德義界の靈魂を斷つに冷灰なる論理の刃を以てせしのみならず、見るべき自然界を擧げてすらも亦たその無慈悲の解剖の下に置きたり、渠は覺束なき園作師の如く、景色と景色を對照し、或は其位置の敍次、彩色の配合等、只皮相の觀を以て心を滿たしめ、其の四時推移の氣象、其無言の感化力、景色の生氣、復活力等、自然の生命に對しては感ぜざると木偶の如くなれり。其結果は德義界も自然界も、共に厭ふべきものとなり、渠は厭世の人となれり。

失望を以て德義界の疑問を拋棄す

自然に對する詩想を喪へり

厭世の人自然に於て唯法を看んとせり

渠は厭世の人となりて愈安する能はず、最初の前提を最後まで把持し來りて、自然界の疑問を解して自ら慰籍せり。曰く「宇宙の善暖く、

憐れなる考察家たらんとせり

美力なき時に於ても、猶ほ較著なる永劫の法、以て賴るべきものなきにしもあらず」と。渠は感情を逐ひ出せり。渠は思想の荊棘の裡に迷ひこみて、憐れなる考察者とならんとせり。若し天使の如き少妹ドロセアが、來りて其感情を拯ひ、其天命に觸れしむるに非らずんば、渠の歸着する所未だ知るべからざりしなり。

不幸なるチルヅチルス家中最も不幸なるドロセア孃

詩人正記

第一章　天生の詩人及ひ其妹孃

不幸なるチルヅチルス一家の中、最も不幸なりしは末女ドロセアなりしなり。彼は未だ三歳ならずして母を喪ひ、九歳若くは十歳にして父を喪へり。渠は父を喪ひたる後、多く母方の祖父の家に、時としてはハリハックスなる他の親戚の家に、時としてはヂンゾルの敎職なる母方の叔父クックソンの家に養はれたり。今年(千七百九十五年)二十六歳なるヂリヤムの齡より推す時は、彼は既に長成して二十歳前後の一婦人たらざるべからざるなり。借問す、彼はこの年頃まで、何を爲して成長したる乎。如何にして其兄の終生の伴侶となるに至りし乎。嗚呼是れ難解の疑問にあらす。

彼には自身を世に紹介する父母金錢なかりき

運命は美しく渠を導けり

婦人は生れて交際場の物なる故に、ドロセアも亦た幸福に長成したらんには、亦必ず交際場の物たりしならん、然れども幸乎不幸乎、彼には自身を社會に紹介するの母なく、父なく、交際場に於て、父母よりも勢力を有する金錢なかりき。腹藏なく彼れが位地を云ふ時は、彼も亦他の諸兄の如く、一個の厄介物に過ぎざりき。諸親戚は既に四個の兄弟を養ひ、殊にヰリヤムとクリストファーとを、迭次に大學に入れたる上に、猶ほ彼をしも養ひ、彼をしも教育せるに於ては、渠等が責任既に盡き、渠等の親切亦既に多しと云ふべし。彼は此上何をか怨み、何をか望まむ。彼もし怨まば、唯自身をこの憫然なる境遇に置きし運命の慈悲に訴んのみ。

運命は美しく彼を導けり。運命は寧ろ初めより彼を美しく用ひん爲に、世の悲運を稱するものゝ裡に置きたるものゝ如し。人は皆一たび自然の懷にあり、長成すれば世に奪はる。運命が彼の父母を視ひ。金錢を視ひたるは彼が紹介者を視ひたるにあらずして、彼を世に誘はんとする誘惑者を除き、彼をして永く自然の懷にあり、自然の懷にある彼をして、世に雜はる彼よりも遙かに清く、遙かに美しく、遙に輝やくものと爲らしめんとの目的に出たるものゝ如くなりしなり。

彼は年頃の婦人となれり然して依然として小兒の如くなりき

ドラ嬢は斯くして生長せり。彼は既にあらゆる婦人が、自然を棄てゝ人間に親しむ年頃の婦人となれるに拘らず、其無邪氣無心なると、依然として小兒の如きなり。彼が友ハッチンソン嬢は久しく既にヰリヤムと相結び、ポラルド嬢てふ友も、亦た其の身邊にマーシャルと呼ぶ少年を吸引し、同樣の情事は到る處の交際社會に成就され、吹聽され、歆羨されつゝありと雖も、彼は殆ど無頓着にして、牧場を

彼も亦自然の兒なりき

彼はミルトン以後の詩人の詩神となれり

ドラ孃か兄に伴ひし原因

愛し、羊を愛し、鳥の巣を愛し、鳥の聲を愛すると、今も猶ほ小兒の時の如くなりき。彼は他か情人を介して自然を見る時に於て、獨り草廬の鳥、綠野の羊をして自個を知らしめ、花卉、樹木、寥しき丘陵をして其の持ち來れる香薫を聞かしめつゝ、其兄の嘗て自然の兒たりし如く、彼も自然の兒として長てり。他の友等が、尋常一樣の情人として、自ら喜び誇れる間に、彼はミルトン以後の詩人の詩神とし用ひられんとす。彼は遺憾なかるべきなり。

然りと雖も、ドラ孃をして身を献して井リヤムの伴侶とならしめたる直接の原因は、主として兄妹間の愛情に因らずんばあらず。遺孤の相依る、既に自然の情なるが上に、ドラ孃の兄弟の裡最も少く、最も憐むべき事情、及び彼が世の物とならずして、自然の兒とし長ちし所以、井リヤムをして一層少妹を愛せしむるものありき。渠等の間の書簡を見れば、其兄妹の情を知るべし。

井リヤムの妹に與ふる書簡

千七百九十三年井リヤムは其妹に書き贈りて曰く、「我等が自分の小屋に住まん時、二人の心を一にせんため、苦樂の感の御身の情を訪ふ毎に、同樣の感我情にも訪ひ來よかしと願ふ心如何ばかり切なるそ。我は叔父に謂つて曰はん、我が御身と一處になるまでは、何處にも往く心なしと。渠が返辭如何なりとも、我は斷然今一度、御身と我が歡情を交ふるの機會を策らむ、嗟呼我が愛妹よ、是等の幸福の如何に早く盡きねばならぬ乎。されど今猶ほ年に價するの時なきにしもあらず」と。同年再度の書信に曰へらく「快哉、快哉、愛妹よ、如何なる歡喜を以てまた御身と會ふへきぞ、如何なる歡樂を以て御身と共に日を消すへきぞ、我は今、目前我腕に走り來る、否飛び來る御身を見る」と。

我か御身と一處になる迄は何處にも往く心なし

快哉快哉愛妹よ

井リヤムの愛殆と過激

然して(千七百九十二年二月)孃か其友、ポラルト孃に贈りし書中に、孃は井リヤムを以て、其季兄クリストフバーと比較して曰く。「クリストフバーも亦其愛情に於て着實にして眞摯なり。されど井リヤムは双方の美德を極度に具備し、其愛殆んと過激とも云ふへき樣にて、一日刻々發露しつゝ、若し其愛する人、渠と共に在る時は、目に見へさる千々の注意と、記するに間なき千々の看護と、絶えて冷ゆると

孃の第二書

なき温情を以て、其人に對する同時に、其擧止の雅しきと、人の裡に多く觀さる所なり」と。

然して同孃に與ふる其後(千七百九十三年六月)の狀に井リヤムを紹介すると、前書に比して數倍濃かなるを見る。「愛する友よ、妾は信す、御身のやがて、想像の力を假らす、直接に妾か散歩の伴となり、妾か愛する井リヤムも亦、我等の侶とならんとを。御身に乞ふ、妾か

渠か妹を慰むるに決して疲れす

渠か上を餘りに語り過きたるとを恕し玉へ。妾か愛念、妾に迫り、此の問題を御身の喜ひ玉ふと、妾と均しからぬとを忘れしめぬ。御身は未た渠を知り玉はす。未た渠か如何に可憐なるかを知り玉はす。定めて妾を盲したりとや笑ひ玉はん。妾は甘じて其咎を受けなん、妾は盲せしに相違なからむ。渠は固より妾か情の思ふほと愉快にはあらざらん。妾か想像する渠の美德、半は妾の情の夢なるべし。夫にしても猶ほ妾に辭あり。渠は其妹を慰むるに絶て疲れたりと云ふことなく、怒りて彼を棄たることなく、彼に會ふことに愉快ならぬことなし。渠は凡ての他の快樂に勝りて、妹と一處にあることを好み、妾等の相見るへき處にあるほと幸なる故に、相別れては渠に如何なる歡情もなし。斯く語れはとて、餘り深くな期し玉ひそ。一には渠即席には打解け難し、御身の渠と自由に語ひ玉ふには、數回渠

を訪ひ玉はざるべからす、二には渠の容貌好き方ならず、少くとも好き方ならしと妾は思ひき、されと久しからすして、左のみにも見へすなりぬ。妾か意見は謬らじ、渠斯く見ゆれと心易く、極めて物思顔なれとも、語らふ時には微笑匂ひて、妾はいとも嬉しく思ひつ。されと是にて免し玉へ、渠は妾か兄なるを、妾如何なれは渠を畫くべき、妾はいつしかも又渠を讃美しつゝあるなり」と。

世間如何なる兄かヲルヅヲルスの如く其妹を愛せしものぞ、如何なる妹かドロセアの如く兄より愛せられたるものぞ。彼が身を以て兄に献くるに至りしも、洵に故なきにあらさるなり。渠は實に愛を以て其妹を得たるなり。

渠等は今形影相隨ふが如く、井リヤムは半は生活の擇みの爲に奔走し、半は佛國革命の苦想に沈吟する間にも、一たび井リヤムと呼ふ小

と呼ふドロセアの聲

早く自分の小屋を有ち度し

妹の聲を聞く時は、忽ち身と世とを相遺れて、再び長閑なる自然に歸れる思をなすと同時に、ドロセアも亦た田園を歩き鳥語を樂しむ間、井リヤムの在らざる時に、如何に物足らす感したるよ。「井リヤム、井リヤム、御身は何處に往き玉ふ、何故妾とともに坐し玉はぬ」と、これ始終彼か情の聲なりしなり。

然して渠等か共に出て歩ぐ時、井リヤムは恒に早く一軒の小屋を建て、其を自個のものと呼びたきとを告け、ドロセアも亦斯かる閑居に其妹を誘はむとする、兄の心に滿腹傾寫し、若し然かならん日には、人間の中最も幸福なるものならんなど、喜び勇み、其の出て遊ふ間、兩心暗に、其小屋を建つる、何れの處か好かるへき、其室は如何にか飾らん、其果園には何をか植ゑん、薔薇も生へ忍冬も生へ、家の後には家より高き樹ありて、夏の日蔭冬の避場となれかしなど、

渠は始めて湖國の美を解せり

樂しみ思はざる日はなかりき。

ヲルヅヲルスか湖國の美を回復せしのみならず、眞個に之を解したるは、此の逍遙の時なりしなり。蓋し少しく詩を讀みたるものは、皆田園生涯の高尚にして、牧夫畊夫の敬愛すべきを知らざるはなし。然れども是は唯詩によりて敎へられたるのみ、未だ自個眞如に感得したるの活感にあらず。渠等が田家生活の眞味を眞解するは、人生を觀、生活を知りたる後にあり。ヲルヅヲルスの如き自然の兒と雖、亦然らざるを得ず。渠其學童たりし時に於て、夕陽光中に沐浴せし理想の牧夫を尊むことを知りしも、未だ羊を牧ふ眞牧夫の、果して敬ふべきや否を知らざりしなり。渠亦た能く自然を以て、神靈視して交感せしと雖、自然を自然として視し時、果して如何の情をなせしかを知らず。其胡桃拾ふ深林に於ても、渠が感ずる所は、深林の靈

にして、直ちに深林其物にあらざりき。要するに、渠が未だ世をらざる間、所謂ゆる「渠が猶ほ最初の愛する者より、一里若くは二里以外に出でざりし間」は、決して田園生活の神聖を知らんと欲するも知る能はず、反證するものなければなり。若し知ると云ふものあらば、そは唯其無味意なるを知るのみ。然れども今や渠端なくも大世界に出で、最も淺ましき人性の罪惡を見、最も恐るべき人生の墮落を見、最も痛むべき人世の有爲轉變の象を見て、大世界に絶望して、然る後、還り來りて田家生涯を反觀す、其の無意味なりし村落生活の、平和にして清淨なること果して如何。其の粗野なる農家家庭の、幸福にして優美なること果して如何。其の貧乏にして質素なる牧夫耕夫の、超然として脫俗せること、其四邊の自然其人と一致せること亦果して如何、是れ渠が感ぜざらんと欲するも感ぜざるを得ざる所。嗚呼、渠、

理想の人生を世に求めて得ず、歸り來りて故郷に得たり。渠は湖國に蘇生せり。渠は自然と人間に於ける其希望を恢復せり。然して是れ半は少妹ドラの伴侶の力に依らずんばあらず。渠は彼を贊して曰く。

彼は我に目を與へ、耳を與へ、
愛情、思想、歡情を與へぬ。

妹を頌す

嗚呼是れヲルヅヲルスが千歳分ち贈る所の、ドロセア孃が名譽なりけり。

渠は自然を回復す

是に於て響の一たび生命を斷ち去られしもの、復た活き還れり。響の一たび眠く力なかりしもの、復た興き來れり。其顯微鏡を以て測量せられたるもの、今は再び詩眼を以て瞻望せられ、其の庭作師が恰も自作の庭園を見るが如く觀られしもの、今は再び自然の兒の自然を見るが如くにして觀られ、宇宙は嘗て相識りたる宇宙よりも、一層深妙なる宇宙として返り來れり。渠は猶ほ響の冷かなる哲理を有すと雖も、今は殆んど其要を見ざりき。何となれば渠をして此美無盡の自然に對して、僅かに盛衰榮枯の法則を認めて、千年以來歌ひ來りし舊思想を歌ふ外爲す所なき、憫むべき詩人の如くならしめば、或はその美の力なき時もあるべかりしも、自然の裡に生れ、自然の懷に生ひ、自然の心を相識りし渠が爲には、自然は未だ斯かる法則の外、見るべきもの無きが如くに墮落せざりしなり。渠が爲に牧園は天國の如く崇とく、野流は大海の如く大に、小屋は帝者の宮殿の如く莊嚴にして、果園は公侯の苑囿の如く華麗に、渠が爲には、一石一樹も、一莖一穗も、天の秘密を含まざるはなく、渠が爲には、一片の落葉も一卷の歴史よりも不思議なるものとなり來れり。渠は

時來れり
渠は詩人の天職を執れり

今や漸く考察家たる方面を離れて、漸く詩人の方面に歩み來れり。」時は來れり。是より先きカムバーランドに土地を有せし、ノーフホルク侯の家扶の子にして、カルヴートと稱する少年、千七百九十三年、四年の頃に於て、ヲルヅヲルスの交誼を得たりき、カルヴートに放蕩の癖あり、ヲルヅヲルスは渠を矯正し感化し、久くして其習慣より渠を拯ひたりしも、渠は其結果を免るゝと能はずして病みにき。ヲルヅヲルスは絶えず此憐むべき少年を看護したるも、千七百九十五年の夏死は既にカルヴートの枕頭に逼り來りて、青年多望の生涯より、渠を奪却し去らんとすなり。カルヴートは、死に臨み、深く自身の生涯の徒爾なりしことを悔ひ、ヲルヅヲルスの若し世の煩累より除かれたらんには、眞に人類を益すべきの人は渠なるを看、願くは斯の如き人に由りて、世の爲にするの望を以て死んと欲する

カルバー死に臨みて、其遺産と詩人たるべき遺言をヲルヅヲルスに貽せり

の念に禁へず、其九百磅の遺産を擧げて、之をヲルヅヲルスに贈り、渠が固く詩人たるべき遺言を貽して逝けり、斯の如き屬望、斯の如き贈遺、豈にヲルヅヲルスを感激するに足らざらむや。九百磅多からずと雖も、猶ほ渠に數年間の生活を與ふるに足れり、渠に其妹と共に棲むべき一個の小屋を供ふるに足り、渠に其爲さんと欲する所を安かに爲すの機を與ふるに足れり。是れ豈に天の豫め渠が爲に所を備へたるものにあらずや。渠謂へらく、斯の如くにして猶ほ遲疑するか如きとあらば、是れ天と人に對して罪を犯すものなりと。渠は今グレイ、コールドスミス既に逝き、クーパー、バーンス既に衰へ、スコット、バイロン未た出てず、文星寥落として輝くものなき英國詩界に於て、斷然詩人の天職を執るの意を決したり。其年の秋、ヲルヅヲルスは妹と共に、ドルセットシヤアーの一離落、

渠は斷然詩人の天職を執れ

レイスダウン村に新居を求めぬ。是れ渠等が多年願望したりし、自分の物と呼ふ小屋にして、然も渠等が生涯に於ける、最初の住居なりき。ヲルヅヲルス嬢は、果園を作り、菜園を拓き、薔薇を植ゑ、忍冬を植ゑ、其趣好に從ひて美しく此小屋を飾りき。渠等は此閑居に於て專ら讀書、著作、園藝に從事せり。

詩人正記

第二章　革新詩人ヲルヅヲルス及び舊派詩人コレリッヂ

ミルトン以後最も眞面目なる詩人ヲルヅヲルスは今二十六にして其の天職を執り初めたり。然れども詩人とは何ぞや、是れ先づ渠が胸中に來る所の疑問ならざるを得ず。何となれば思慮事に先つ渠、漫然として詩人と稱すべきにあらざればなり。

如何なる是を詩人と云ふ乎、かの古文派と稱して能く古人の詩語を模倣し得るもの、能く意味なき美辭を綴りて以て意味あるか如く見せ得るもの、是れを詩人と云ふへき乎。若くは夫の傳奇派と稱して、漫りに結構脚色を求めて、以て奇を讀書社會に衒ふもの、是を詩人

蛆詩人
蠹魚詩人
幽靈詩人

と稱すべき乎、渠も亦學生として一たびポープ躰の模倣者なりき。詩人としての渠も猶ほ先輩の糟粕を嘗めさるべからざる乎。渠をして其前後の詩人の如く、古人の糟粕中より生じたる蛆ならしめば、古人の糟粕を嘗むる蛆詩人たるも可なるべく、渠をして先輩の詩冊中に活くる所の蠹魚ならしめば、先輩の詩冊を食ふの蠹魚詩人たるも亦可なるべく、渠をして空想世界、虛構國土の人たらしめば、或は怪を談し奇を衒ふの空想詩人たらしむるも亦可なるべかりしと雖も、然れども渠は現實界の人なりき。實自然の中に生れ、實人間の中に住むの人なりき。渠は自ら幾百年來朽敗したる古文派、傳奇派に投せんには、自個と共に生長し、其方寸の中に鬱積磅礴たる現實の天地、自然、人間、稱して湖國の美と云ふものゝ、餘りに新に、餘りに實なるを看破したり。

渠は根本より詩を革めさるへからさるの必要に逼れり
革命詩人
渠か所謂ゆる詩
渠か所謂ゆる詩人
所謂ゆる美

是に於て渠は根本より詩を革めざる可らざるの必要に迫れり。嘗て政治社會に試みんと欲して用ひられざりし渠が革命の精神は、今渠を駈りて詩界の革命家たらしめぬ。渠は詩を以て人間載籍の裡、最も玄妙なる哲理と稱するアリストートルの如く、詩を以てあらゆる智識の最元最後の眞理となし、詩の管に理學と背馳せざるのみならず、却て理學を以て眞理に達するの前駈の如くに取扱へり。詩人とは即ち此の眞理を以て人に語るの人、人より鋭き感情を以て其眞理を感受し、人より深き思想を以て、其眞理を吐露するの人となせり。然れども詩人は何處に其眞理即ち美を發見すべき乎。渠は獨り憐むべき諂諛者の如く、帝王の宮殿、公侯の園庭に於てのみ之を求めて、尋常普通の旅客の如く、都府、村落、茅屋、田園、牧場等、廣且つ大なる世界の裡に看出すと能はざる乎。或は頑是なき小兒の如く、

只管英雄の事業、武人の功名、若くは戰鬪、殺戮の裡に之れを尋ぬて、村翁、野郎、牧畜、耕耘等、普通社會に於ける普通生活に於て之を觀ると能はざる乎。然らずんば仙人の如く深山、幽谷、人跡の到らざる處、若くは虛無渺茫の遠海、孤島、鳥飛び絕えたる絕處に於て之を觀、一般の人間の如く、其身邊の丘陵、流泉、湖池、森林等目を擧ぐれば見、足を投すれば到る處に於て觀る能はざる乎。若くはかの厭世家絕望家の如く、天上の國、未來の土、但しは茫々たる他界に對する觀念、人間にあらざるものゝ住める、空幻の天地に之を覓めて、他の篤信なる信者の如く天に成れる神意の、地に成らんとする、其事業に參する能はざる乎。或は其眞理、單に詩人の夢幻、空想の裡、若くは其閑散の裡にのみ之あつて、到る處の自然、人間、及び人間生活の裡には之なき乎。要するに詩人は世人の謂ゆる高處、

遠處、大處、絕處等、人生多數の得て望む能はざるの美、詩人の夢中に之あつて天下の現實界に存在せざる美のみを歌ひて、世人の徒らに卑處、凡處、近處、平處等と稱して、然も一日も離るゝ能はざる、普通社會日常生活に於ての美を歌ふへからざる乎。渠は最も明かに此疑問を解せり。渠は最も大なる眞理は最も大なる眞理は最も廣き眞理は最も廣き社會に存し、なる德義の存するとを認めたり。渠は曰へり、「我が謂ゆる詩想は、日常生活に於ける異中の同相、同中の異相。即ち人間多數の記憶中に存する所のものなり」と。

渠が所謂ゆる詩想は日常生活の異中の同相同中の異相

然して詩人は如何なる言語を以て其詩想を人に語るべき乎。渠は直ちに喝破して曰く、「須らく詩語を廢して文語を用ふべし」と。渠は之が說を爲して曰く、詩語は死語なり。意味なき語なり、文語は即ち

詩語を廢して文語を用ひよ

詩語の起原

人語なり、意味あり、聯想を生ずる語なり。人の口を假りて人の情より出づる所の語なり。文語に由らずんぼ叙情の眞を穿つと能はず、文語を用ひずんば叙事の實を摩すると能はず、古より大家の詩の妙處は概して文語、即ち人語を用ふる處にあり。今の謂ゆる詩語なるものは、國民最初の詩人が、最初の人語を用ひて、或る事故に激昂せられたる情緒を叙したる語にして、語々皆意を帶び、句々皆事を表はせり。誦すれば情より出づるが如く、歌へば人の肺腑に入るもの、皆此理に由らざるはなし。然るに後の名に急なるもの、徒らに古詩の辭句の美なるに感じ、人語の既に幾度の變遷を經たるを察せず、同一の情緒を刺激する同一の事故なきにも拘らず、靦然古詩の句を剪截し、之を配叙して以て詩を作れりと稱し、覩るもの亦誤つて雷同せしより、茲に謂ゆる詩語なるもの興れり。詩語興りて詩は

詩語興つて詩衰ふ

之を救ふものは文語あるのみ

衰ふ、之を救ふものは唯文語あるのみと。

渠が詩を呼びて眞理と稱し、詩人を呼んで眞理を人に語るものと云ふ間は、敢て舊派詩人の信仰個條に反する所なしと雖、然れども理學を以て詩と相關せしむるに至つて、少しく俗耳を聳動せざるを得す。然して渠等が自個の神壇の中に幽閉したる詩神を拯ひて、自在なる尋常生活の中に置き、渠等が雅言美辭とし賞美する所の死語を棄てゝ、其俗語として卑しむ所の、活ける人語を用ひるに至つては、之れ純然たる詩界の革命者なり。嚮にクーパー、バーンスの徒、ポープ及びポープ派の虛僞趣味に反して、大に天眞自然を尙びたりと雖も、是は唯一時ポープに對する反動に過ぎず。チルヅチルスに至りては老朽無爲の古文派、傳奇派を根本より覆し、之に代ふるに新鮮にして健全なる現實派を以てする詩界の新開山、古びたる天地を一

振する革新の詩人と云はざるを得ず。

然れども渠は其新説を以て世を驚かすことを欲せざりき。渠は固く詩人の本分を守りて、專念著作に從事せり。然して渠も他の噴火的野心に駈らるゝ青年文學家の如く、大胆にも戲曲を試み、「邊民」と題する一篇の悲曲を書き、之をカヂント、カーデン坐の坐元ハリス氏の手に投ぜり。然して「邊民」の運命も、亦他の青年作者の戲曲と同じく、舞臺に適せずと云ふ好遁辭を以て、渠が手に返りしより、渠は斷じて意を戲曲に絶てり。渠は筆を譚話に轉じて、其の嘗て見聞したりし寡婦、孤兒の貧生涯を畫き、題して「荒屋」と呼べり。今日渠が「逍遙游」中の首に冠し、改題して「貧」と稱し、優に大家林中に濶歩するもの即ち是なり。渠は今其詩才の漸く發露し來るを覺えぬ。

始めて「邊民」の悲曲を作れり

「荒屋」の篇成れり

無名詩人が、斯く隱れたる村居にありて、潛かに勉强しつゝある間に、忽然意外なる知己の訪ひ來るに會へり。渠は當時最も多望の青年詩人、未來の大家、サムエル、テイラー、コレリッヂ其人なりき。渠が齡ヲルヅヲルスより少きこと二年なれども、其名を成すことヲルヅヲルスよりも蚤く、ヲルヅヲルスが「晩歩」、「粉本」の兩篇の詩、世に出でゝ世に沒せし際、獨り其の凡才の作にあらざることを看破して、獨り竊かに推服したりし詩人は、即ち是のコレリッヂなりしなり。渠は今其久しく心交してありしヲルヅヲルスの同臭味の生涯を執りて、此のレイスダウン村に住するを聞き、深く結托する所あらんと、斯くは態々訪ひ來しものなり。漫りに人に求むることなく、漫りに心を動かすことなきヲルヅヲルスなりと雖も、今や友遠方より來るに會へり。烏ぞ樂しからずと云ふことを得ん哉。吾人は遺憾にして此兩詩人の會面の、如何なる快談の裡に終始せしかを知る能はずと雖、

コレリッヂレイスダウンの閑居に無名の詩人を訪ひ來る

友遠方より來るに逢へり

チルヅチルスコレリッヂと相近つけり

量るに、客は始めて渠を知るに、其「晩歩」「粉本」の作に於てし、然して其ポープ模倣に於て、優に地歩を占めしことを主人に語り、然して主人はまた痛ましくも、今の渠のポープ宗にあらざることを告白し、徐ろに詩に關する渠が所見を擧げて、客の同感を得、兩個相互に新舊屬する所の派を明かにし、詩論は詩論、主義は主義として、然して後空想に眼沈めるコレリッヂと、默思に頭低れたるヲルヅヲルスと、面々相照し、意氣相投じ、一生渝らざる交情を結び、然して後相別れたることを想像するも、大過なきが如くなりき。

然して兩家の交洊、今は如何ばかり兩家を動かしたる乎、渠等の交情好は、相會する毎に加はり、二年にして最早居を隔つると能はざるに至れり、千七百九十七年の夏、コレリッヂのソーマーセットシヤイアーのチザーストエイに來るに及びて、渠も亦僅かに一里より

叙情詩書の合著

は相隔たらざるアルフホックスドンに移居して、以て相互に相近づけり。この第二の新居は、遠方の海を遠望する高き邱の上、空想の畫きし如き亂樹の裡に立ちたる、眺望佳なる住居なりき。渠は此處にて、「父達への小話」の主人公なりける、ベジル、モンテーグ氏の愛兒の教育を托せられて、多少の收入を加へたり。

渠等か此處に來りしより、暇あるとにコレリッヂを訪ひ、或は清淡時を移し、或は相携へて郊外に逍遙し、時としては兩家殆と生活を共にするの觀なくんは非さりき。然してヲルヅヲルスは猶ほ滿足する能はす、渠は猶ほ一歩を進め、其思想の産物を合併して、以て文壇に同行せしめんとをコレリッヂに計れり。コレリッヂも同意せり。渠等は此目的に向つて進めり。渠等は猶ほ新舊兩派の差別を超てへ形而上なる思想の合併をすら計らんとし、失敗して止みたり。

其年の秋なりき、ヲルヅヲルス兄妹、一日コレリッヂに伴はれて、リントンと云ふ處に遊ひ、リントンより遠からさる石の谷と云ふ處を訪ふへき豫定を以て、家を出てたり。渠等が持ち合せたる金錢多からす、途中にして盡きんとしければ、渠等は五磅許の詩を書き、之を新月報てふ新誌に投するの止むを得さるに遭ひ、コレリッヂ先つ其一友か夢みし所と云ふ、老舟夫の詩想を得たり。渠等は猶ほ行々其脚色を案しつゝ、コレリッヂは久しく既に記臆の裡に釀したるものなるか故に、速かに其過半を得、ヲルヅヲルスも、亦二三日前讀みたる或る航海誌より啓發せられて、舟夫か海鳥を殺して海靈の怒に觸る一段、及ひ其死して猶ほ舟を行る一個條を寄附せり。斯くして直ちに合作に着手したるが、ヲルヅヲルスは篇首に於て僅に二三行を加へたる後、筆を進むるに從ひて、果然豫期せられたるか如

く、兩家の思想、漸く背馳し、今や其勞力を別つにあらすんは、徒らに相傷るを見るに到りて、ヲルヅヲルスは、筆を投せり。然して五磅の旅費の爲に書き初めたる詩は、愈進むて愈長く、殆んと卷を成さんとするに到りて成れり。コレリッヂの唯一の傑作老舟夫は、實にこの合作失敗の餘の作なりけり。

千七百九十八年、合著叙情詩卷、ブリストルの一書肆より出てたり。其の含む所、コレリッヂの手に成るもの三篇、ヲルヅヲルスの手に成るもの二十篇。詩の價値より云ふときは、コレリッヂの作としては、渠か畢生の作たる老舟夫あり。ヲルヅヲルスの作としては、「我等七人」の如き、「シモンリー」の如き、「水松(いちる)樹下の坐に題するの句」の如き、ヲルヅヲルス信者の崇拜の燒點たる、「チンテルン」精舍を去る數里にして賦するの句」の如きあり。之を當時最も精撰したる詩集に

叙情詩集無味と叫はれたり

比するも、決して杜撰のものにはあらさりき、然れとも冷かなる書肆は是等の名篇に報ゆるに、僅々三十金を以てし、然して小兒の如き讀詩社會は、異口同音に其零細（ツリヒアリテー）、無味を叫ひたり。然れともヲルズヲルスは少しも動かされす、對ふるに嚴格なる沈默を以てし、其獨逸語の智識を完ふせんとの目的を以て、妹と共に獨逸に遊ひ、コレリッヂも亦相伴へり。渠等はハムブルグに到りて別れ、コレリッヂはラッゼブルグに向ひ、ヲルヅヲルス兄妹はハノヴに向ひ、ハルツ林と稱する群山の下に立てる一小市ゴスラルに入り、ある羅紗商の家に寓し、日常會話の裡に得る所あらんとを期したるも、意の如くなると能はずして、唯多く原書を讀むのみなりき。

獨逸語研究の爲め獨逸に遊ぶ

是も寒烈なる冬

千七百九十八年より九年に亘るの冬は、十八世紀の冬の中、最も寒烈なる冬にして、渠等は此冬に此山地に逢へり。陰雲は天を封じ、烈風は戸を鎖し、終日雪、雪の上に積み、偶々窓より頭を出せば、水の如く冷たき空氣、面を摩し去りつ。渠等の寢室は廊下の上なる天井なき一間なりき。家のものは渠を見る毎に相顧みて私語せり。ある夜かの人凍え死んと。然れども、渠は幸にして毛織の外套と、百姓の衣古したるか如き犬の皮の帽子に護られて、毎日池の湛ふる公園らしき地面に出で來り、前後人なく、唯渠に馴れ、渠を偷視する一羽の鶺鴒のみを伴とし、漫歩するを恒とし、渠が「詩人の碑」の作は、實に此の雪中漫歩の裡に成れりと云ふ。

詩人の碑

渠か詩才獨り春なり

滿目凛烈、萬象凝結せんとするに當り、渠か詩才獨り既に春に向へり。渠はドラ孃が與へし材料、――ヨークシャイアーの一寒村に住む少女が、雪中途を失ひ、野流の橋上に足跡を殘して落命せし一事實――によりて、此雪に對して「ルーシイ、グレイ」の詩を賦せり。渠は猶

ルーシー グレイ以下の諸篇

ほ「ルス」、「ルーシイ」、「胡桃ひろひ」、「童ありけり」、「宇宙の感化力」等の短篇を得、猶ほ自家心靈の發達生活の歴史を語る、自傳的一大作「序文」(プレリウド)の筆を、此地に於て起したり。

本國に歸れり

千七百九十九年の二月渠等は獨逸語の智識よりも寧ろ富贍なる詩卷を抱きて本國に歸り、詩人として生涯の居を卜すべく、故國カムバ

妹と共にグラスミール湖の山中に入れり

ランドの一隅にして、渠が幼なき足跡を印したりしグラスミール湖の山中に入れり。

詩人閑居の地

詩人正記

第三章　湖畔詩人及び其閑居

余は嚮に井リヤムと稱する一小兒の故鄉として、湖國の一片を小觀したり。今や詩人ヲルヅヲルスの閑居の地として其大概を大觀せざるべからず。

其の威儀表彰の爲に山の高きを求むる時は、湖國の山より高きものの何ぞ限らむ。其形容躰面の爲に幽なる湖を求むる時は、湖國の湖より幽なるもの亦何ぞ限らむ。然れども山の高きが爲に積雪氷魂到る處人間を杜絶せば、威儀崇峻なりと雖、如何か爲さむ、湖の幽なるが故に千山萬壑人間と遠絶せば、形容壯麗なりと雖亦何爲れぞ、一面には山高からざるべからず、高からざれば人を興起すると能はず、

湖國自然の德義的法象

湖も亦幽ならざる可らず、幽ならざれば人を感化すること能はず、然して一面には其人と相雜らむことを欲す、是れ自然詩人が自然に對する最元最後の要求にして、然してカムバーランド、ユストモアランド、ランカシヤイアー等湖國湖山の德義的法象の、如何に此の要求に應ずるかを見よ。

崇高の意山の高下にあらず

ヲルヅヲルスは其の「湖上案内」に於て記して曰く、

「我が湖山の地之を瑞西に比する時は固より小なり。故に崇高の意味をして單に土地の容積、及び之より生ずる氣象の影響にのみ歸せしめば、兩者初より同日の論に非ず。然れども我が山中に來りて、山の頭能く虛空に聳え、其巔能く行雲を去留せしむるに足るを見るものは、謂ゆる崇高の意、徒らに山の高下に由るのみにあらず、寧ろ多く山の威儀法象にあると、及び山の高三千尺に及ぶものは、亦能く氣象の、最も著しき度に於て創生力、壯嚴力、軟和力を有するとを認めん」と。

湖國の氣象

渠は又其風土を敘して曰く「此處には雨、心より降り、晴るゝ時、一段眩ゆき天氣を現し、鳴らざりし泉は鳴り、響かざりし瀧は響き、泉も瀧も、水溢るれども少しも濁らず、波も泡も澄み渡りて青味を帶べり。梅雨の如く定らざる日最も多く、人をして鬱陶しからしむるものあるに似たりと雖、往々雨の、丘より丘に移るに當りて、或は近く或は遠く、或は幽く或明かに、其の見て目に宜しきと、恰も快曲、悲曲、錯綜したる音樂の、聽きて耳に宜しきが如し、三伏の日、氣の湖より起るもの、若くは牧場より起るもの、或は濕やかなる日、山の巔に浮ぶもの、或は默然游動して谷より谷に移るもの、往々にして動かざる自然を動かし、變らざる景色を變へ、塊然たる物象を化

氣の變幻

して夢となし、幻となし、靈となし、怪となし、觀るものをして山の保護神、若くは其祖先の精靈の出て遊ぶものと信ずる、山中の善男善女と、坐ろに感を同ふせしむ。然して雲の變幻亦霧に讓らず、其の空しき時に於てや、唯靜かなる天と山とを見る、其の一片顯はれて、山の一角に浮ぶに當たり、見るに動かざるが如し、忽ちにして其の頭を擧げ、天と山の間を往き、暫く見えて山後に沒す。時としては遠かに兩山の背後より、一塊の雪の如き白雲、忽ち興りて岩石となり、雲より雲出で、岩より岩裂け、勃々然として眞山沒し、假山峙ち、天冥くして日蝕の如く、疾風一過して、霰の如き白雨を散し、須臾の間、樹震ひ、山動き、湖亂れ、人靜まり、然る後雨止み、雲開き、天地明かに、萬物活き、鳴らざりし泉鳴り、響かざりし瀧響き。大凡此州に來るものをして、湖國山雲の神怪に驚き、土

着の民をして、埃及の乾天、伊太利の虛空を羨やまず、却て其の雲雨の國に生れたるを祝せしむ」と。

一轉して湖水に移らしめよ、渠は曰く「崇高は自然か示す皮相の象のみ。細視すれば、個々の景色を配合したる全觀に於て、自然は示すに美の觀を以てせんとするものゝ如し。是等湖水の緣を一遍すれば、愈此理の誤らざるを知る、看よ湖水の明鏡の如き懷を開けば、四山の峰より列なり下る岩石塊、悉く皆湖心に入り、或るものは舟の如く、或るものは埠頭の如く、或るものは島嶼の如く、或るものは依然岩の如く、皆相須つて趣を爲せり。湖に注ぐ小なる泉あり、大なる泉あり、小なる泉、雨なき時に於て、其音なき流、殆ど見れども見ると能はず。其靜波の上に旋れる渦も、亦細くして指すべからざるが如きも。然かも其平素潛かに貯蓄する所の砂礫、人知れず堆積

年若くは月に當る日、時としては春に在り、

其日多くは秋に在り、

して、雨潦の日洪水を回轉せしむ。大なる泉は、蛟龍の走るが如く、湖上の平面を經過し、下に亦蛟龍の臥するが如き砂礫堆、紆餘として線を作しつゝ、大胆にも對岸より突き出たる長岬と相對す。

「語に曰く、生涯の裡、年に當るの時ありと。自然の情人をして、湖國の湖を來りて觀せしめば、年若くは月に當るの日を看出すと難からず。斯かる佳日、時としては春にあり、煦々たる和氣、微風に動きて花上を亘り、新草を吹き、思藻彼が如きブカナンに、五月朔の詩を吹きこみ、渠をして其日の空氣を以て、直ちに黄金時代の空氣に擬せしめぬ。然れども其日多くは秋にあり、一年の熱去り、氣は水の如くに澄み、天は鏡の如くに磨かれ、光と蔭と愈明かにして、愈映照せらるゝの時にあり。此の清靜の時節に於て、耳は時々驚かさるゝ外、絶えて聽くものあるとなく、人をして知らず識らず見る所の自然と冥合して、現即夢幻の思あらしむ。然して其日の美感を完ふするものは湖なり。其日人の想像を曳きて、他の方便を以て入ると能はざる妙境に遊ばしむるものは即ち湖上の靜觀なり。其理は他なし、此時、天のみ獨り地の懷に下り來らず、地も亦一層透き徹れる眼鏡によりて見らるゝに由る。最上の佳節は、秋分の風正に過きたる時にあり。處々折れたる枯枝、散り布く落葉、風威の如何に烈しかりしやを示すの外、空氣は一髮たにも動かさず、一點の蟲も目を遮るなく、目に見、耳に聞く所のもの、一として安定の意を語らさるなく、唯時々歸雲の靜かに湖心を亘り、遠く湖畔を過る旅客の、知らず識らず時の寂寥に融化せられて、徐ろに其倒影を伴ひゆき、若くは一點兩點の黑子、湖心の雲影を截る間、烏鷺の聲、空中より落つるのみあり、觀るものをして如何なる人生の喧嘩を以てするも、

自然の平靜を奪ふ能はざるとを感せしむ」と。

斯の如きもの是湖國自然の特質なり。然して其の自然の特質より、其民の特質を推究せんとせば、カムバーランド、エストモアランドの農夫の如き好材料はあらす。渠等の過半は、勁健なるスカンヂナビヤ種族の血統に屬し、記すへからさる時代に於て、那威より來れるものゝ子孫にして、渠等は今、自然に於ては、故國に劣らす、地味に於ては遙かに故國に勝り、其陰鬱なる北海に代ふるに、此の明媚なる湖山、此晴朗なる川流を以てせる邦土に住めり。渠等は依然として山民なれども、然れども其山たる、決して瑞西の諸山の如く、雪を以て人家を封鎖し、其住民を無識と怠惰の裡に密閉するものにあらす。雪は冬降りて春は消へ、夏は清流熱を洗ふの好風土たり。壚里落々山に依りて分別せるは、圍繞せんが爲の故のみ、其崔嵬たる保障によつて、其同族帶を緊ならしめん爲の故のみ。斯くして渠等は變轉常なき世と相遺れて、「地の中、天の如く安き」山村を作れり。政府の法律と雖も、渠等の安堵せる心を動かすと能さりき。何となれば、渠等は之を解くに遺傳的慣例を以てし、然して慣例を以て解く能はさるものは、果然無用の空文たりしなり。

地の中天の如き平和なる村落

各部離落必す一二の豪族ありき

孰れの山村にもある如く、各部の離落、必ず一二の豪族ありき。云ふ是れ前代蘇國邊民の侵入に對して、武器を執りしものゝ子孫なりと。然して他の一面、亦全く其土地より放たれたる「捕蛭翁」、「乞翁」の如きものなきにあらさりしと雖、是は唯偶々運命の慈悲に洩れたるものゝみ、渠等の罪に由るにあらさりき。然して其大多數は上者を敬ひ、不幸の人に人情を盡し、澆季の世にあつて、最も古く近き民なりき。

山民の家屋は寧ろ新しき自然と云ふ方適當なりき

渠等か斯く自然と活き、自然と起居を共にし、隱れて美なる土地の民としてある間は、自然か啓示する所の欲望と技術の外、他の物質的、人爲的の何物をも要せす、偶々要する所のものは、皆其手腕を以て給さるゝか故に、渠等か面目の粗麤にして然も恒に怡快なるを見る時は、直ちに其特質を同ふする渠等か居室を聯想せしむ、蓋し渠等の祖先か始めて、此處に家を建てしは、石を裂くの術未た知られさりし時にてありき。渠等は各自石坑より堀り出したるまゝの石を、轉はし來りて四壁となし、其上に盤石を蓋ひて天井となせり。斯くして渠等の家屋は成れり。

渠等は之を假盧若くは火爐と呼へるも、寧ろ新らしき自然と云ふ方適當なりき。看よ其の削らす夷らけさりし、四壁と屋根と、漸く莓苔の生する處となり、處々鳥の啄み遺せし種子より、蓬々として雜

尨然として生物の形を具するに至れり

建てられすして出來せり

草生へ、時としては名なき美しき花さへ開きて人に看せ、人間の住居を以て復た元來の自然に歸せしめ、然して渠等は其世業と此石屋とを以て、子孫に讓り、子孫は敢て其世業を轉せすと雖も、然も其當代の主人として、其世業を操るの便利の爲に、隨意に其石屋を變更するの自由を有せるか故に、既に自然に歸せし石屋、今や首尾の如きものを生し、手足の如きものを伸へ、耳の如きもの瘤の如きものを得て、尨然として生物の形を具するに至れり。斯の如きもの、野に立ち、路に出て、或は林に伏し、或は山中に沒するを見る、他の具眼の旅客をして、山民の家屋を以て、人巧にあらすして、自然の產物、建てられすして出て來しもの、其天性を負ひて、地盤より生長せしものと觀做さしむるも、蓋し亦偶然に非す。數代の菜園は家を環り、菜園の中、處々蜂窩に代ふへき小舍建てり。果園、遠き處に

あり、又近き處にあり、安息日ことに、蕪の褥、花の筵つくられ、時としては摘むには愛しき花すら、摘まれて筵の緣となれり。戶外の樹、其樹に立ち懸けられたる乾酪棒、夏の蔭に結ひたる無花果の總、萬木黃落したる後、獨立して風に歌ふ樅の大木、四時戶外に私語する流泉、晝夜厨の瓶にもの言ふ筧等、自然と人と相得て到る處に相宜しきを見るものは、誰か此の醇樸なる山民か、數代の間經過し來りし其經過の簡易なるとを思はざるものあらんや。

湖國の自然斯の如く、湖國の人間斯の如く、然して其自然と人間と相經緯する所の、湖國人生の生活亦斯の如し、是れ實に天地の間常に無くして偶々あるもの、久しく存せずして暫く留まるもの、夫のゴールドスミスの理想の故鄉たる、オルボーンを以てするも、初より比較を爲さゝるものにして、然もチルヅチルスの故鄉たり。其物質的破壞の犧牲として、世より銷盡する前に、焉ぞ詩なかるべけん哉。看よ渠は今暫く他鄉にありしかとも、久しく他鄉に留まる能はず、現實の如き記憶に催かされて、復たび故鄉に歸り來れり。

チルボーンと湖國

渠等がグラスミールに入りしは、恰も年の暮なりき。地高く天寒くして、渠等は一時雪に埋れぬ。然れとも速かに春は復りて雪を解き、渠等に地上の自由を得しめぬ。渠等か居住は、タウンエンドと呼ひ、湖水を俯瞰する山角に建ちたる、二階造りの小さき素屋なりき。固より狹き家なりしかとも、二人か住むには餘ありき。孃は詩神の如き手を以て上下の室を綺麗に掃き、下なる一室を客間となし、石の床なりけれは筵を敷けり。上の一室を居間とし、他の物置の如き一室に、二個の寐臺を据へて寐間とし、今一個、小く低く天井なき一間を、新聞紙を帖りて新ならしめ、此處に小き寐臺を備へぬ。其他火

タウンエンドの住居

外觀は一層看るに美はしかりき

豆を植ゑたり

最も質素なる生活

爐を据へ、食卓を置き、樫木筐を藏め、書籍器什を列へ、屋室をして十分其心に適ひ、慰藉を與ふるに足らしめぬ。然して外觀は一層看るに美はしかりき。渠等は日日山より花卉を取り來りて戸外に植ゑ、薔薇、忍冬の如き、當年生のものと雖、葉を以て花を以て戸庭を薫せり。渠等は亦其處に豆を種えたり。其實の總を結ふのみならず、花も亦いと美はしかりき。家に對ひて田園を拓き、多く山菜、野菜をつくれり。渠等が山民の裡より看出したる家婢は、六十許の老媼にして、寧ろ憐むて使へるもの。孃は云へり「彼は實に如何にも痴鈍にて、誨へ難き婦なれとも、亦正直なる腹立てさる好婆なるゆゑ、忍んて使へは、却て使ふに便なり」と。渠等は又其手を以て湖水に浮ぶる一葦の小舟を作りき。

渠等の生活は最も質素なる生活にして、渠等は多く水を飲み、野菜を茄ひ、時としては其身邊の民よりも儉なるとすらありき。孃は固く家計を引締り、一面或は不時の需、或は賓客の來往、殊にコレリッヂの如き賓客をして、一家を携へてヲルヅヲルスの天井の下に月を經るに差支なからしむる爲にし、一面其兄をして、最も少なき費用を以て、最も長く生活し、「最も低く生活して、最も高く思想」せしむるの工夫を執れり。ヲルヅヲルスは日に其家と相睦み、日に讀み書く心を安むせり。倦む時は犂鋤を携へて躍り出て、樂土に於ける遠祖の如く、孃と共に田園を耦耕せり。然して逍遙は、今猶ほ日程の如くなりき。其山、其丘、相見る毎に相親み、其土其民、相逢ふ毎に面識を益し、相語る毎に歡情を加へり。其蓄ふる所の書は少なけれとも、其の精撰したる少數を以て足り、隣の知人多からされとも、多きよりも寧ろ深きを喜ひつゝ。チョーサーを讀み、ゲルか家の

最も低く生活して最も高く思想せしむ

其山、其丘、其土、其民、

讀み、歩き、森を過き、人を訪ふ、斯の如きもの一日

邊を歩き、風に動く遠樹を觀、歸り來りてスペンサーを讀み、復た出て、他の道より他の森を過き、某の人を訪ふ、斯の如きもの一日。或は水邊の水仙を見て浮雲の如く低回し、山前虹霓の立てるを見て、急雨の如く走り出つる、是も亦一日。時には亦小舟を漕き、水禽の如く湖を分ち、邈かに岸より見えさる處まで往き、歸り來りて跡なき湖水に對し、湖心の雲影を見、湖畔の人影を見、湖水より起りて、湖水よりも廣く空に舞ふの水禽を見る、斯の如きもの亦一日。」

自ら謂へらく苦痛を解脱したる樂境に達せりと

是れ渠か生活なりき。之を他の普通の詩人の、肉を活かさんか爲心を殺し、生命と天才を寸斷して金錢に代へさるへからさる悲運に比する時は、天の渠を遇する亦厚からすや。宜なる哉、渠悠然として自適し、自ら苦痛を解脱したる樂境に達せりと謂ひつるとの渠か足跡は日に廣く、渠か詩は日に成れり。渠は家を繞れる遠處近處に、「地を名くるの詩」を得、ロザ川の岸に於て、「ヂョンナの岩」を得、グラスミール湖の岸に於て、「臆斷を示せ」を得たり。グラスミール谷の公道に傍ふ、寂寥なる高邱の址に立てる廢屋の後に、乞翁あり、日夕此處に來りて其施物を食ひ、時々其の麻痹したる手を以て食片を散し、山鳥を饗應して孤獨の寂寞を慰したり。幼時より此乞翁と相識なりし渠は、再ひ此老人を訪ひて、爲に一篇の長歌を賦せり。グラスミールよりアムブレサイドに通する公道の一方に、請願門と云ふ門あり、渠亦時々此處に閑歩し、「請願門」の詩を賦したり。當時渠の最も數したる處は、グラスミールより、ライダル山に到る舊道、今は磽确、荆棘の裡に朽廢したる山徑なりき。渠は此道より遠からぬ、那處青山の巓に於て、其長篇「序文」を書くへく、朝夕往還したるか故に、道より山まで、目を瞑つるも上下し得るまて相親しみぬ。

「地を名くるの詩」

「乞翁」

「請願門」

「序文」目を瞑つるも上下

し得る迄に相親しみぬ

チルヅチルスはグラスミールより、コレリッヂはケスヰツクより

然して渠か記憶の中心は、グラスミールより出つる他の二條の公道にして、一は當時ケスヰツクに住するコレリッヂ及ひ其友サウゼイ——コレリッヂと時を同ふし派を同ふし、然も互に妹を相娶れるサウゼイ、及ひ其他の朋友に渠を送るの路、一はウルス湖、ローサー城、及びバッターデール、ホールスヘッドの諸朋友に渠を導ひく順路なりき。殊に其前者は、渠か「車丁」の車を駈りし處、一碧不動、サーミール湖の湛ふる處なりき。兩個の詩人、屢々筆を抛ち去りて、一日の清游に齡を迎ふへく、チルヅチルスはグラスミールより、コレリッヂはケスヰツクより、各々其家族を伴ひ來りて相迎へ、互に其愛するもの、頭文字を記して遊ひ、然してチルヅチルスか、深く人生蜉蝣の哲理に感して、身後の千秋を相期したるは、實に此湖水の岸に於ける一面の磐石なりけり。

最傑作「ミカエル」と青頭谿

殆と一たひ人間を相絶す

忘るゝ勿れ、爾、懷かしき嚴よ。

我等か永く眠るの後、其責任を執るとを。

然れともチルヅチルス信者か最も記念すへきは他にあらす、渠を啓くに、其最傑作「ミカエル」を以てしたる、グラスミール谷の奥、青頭谿（グリインヘッド）と云ふ一澗流なりしなり。青頭谿、其下流は、グラスミールに流れ下（ツト、ギル）れり。渠は一日其流に從ひて溯れり。面を仰けは一道の坂路、直ちに天に朝するか如く、前方の山、人に向ひて面面對峙し、登るものをして、思はす躊躇逡巡せしむるものありき。然れとも、渠は猶ほ氣を皷して登れり。澗流を夾む兩方の山は、一峰一峰、自ら出て來り、其遁隱せる幽谷を人目に顯せり、然して其山の深き、谷の幽き、殆と一たひ人間と相絶つに非さるかと疑はしめぬ。然れとも路數歩にして轉し、未た見さりし山と共に、山より空に飛ひ離れた

山上の紙鳶を見る

る紙鳶見えたり。渠は奇異の念を爲せり、且つ看且つ行き、一歩一歩別天地に入るものゝ如くにして進み、處々、散在する所の牧羊、及ひ人の坐したるか如き岩あるを見、心恍惚として現境夢境の間に出入し、然して潺湲たる泉流の音、亦絶えず耳より入て、渠か記憶を呼起す心地しつ、久うすれとも去ると能はす、頻りに低回顧望したりき。然して記憶の緒、端なく自個と潤流の間を隔つる、叢間の石壘に觸るゝや否、渠か幼時寂物語に稔聞したりし、不幸なる一牧翁ミカエルの故事、遽然として心眼に浮ひ、恰も昨日の事の如く活如し來れり、今も猶ほ依然として其牧山を見、渠か牧ひしか如き羊群を見、世に出つる其一子リウクを、此道より送り來り、リウク父の爲に其一石を積み、父子此石壘の下に相別れたる、當年の情を懷ひ、宛然青頭谿の水と共に、一たび人世に流落して、復た還らさる

其山解は其流盡くる期あるも青頭谿の名はミカエルと共に傳はるへし

兄弟ヂョン海より來れり

憐むへき少年の悲運を懷ひ、老死して祖先世襲の牧山を失ひたりし牧夫夫妻の心緒を懷ひし時、胸躍りて須臾も留まると能はす、幽靈の如く狩り來る追懷に駈られ、來路を下り家に歸り、慨然して「ミカエル」の詩を賦せり、嗚呼其山解け、其石滅ひ、其流盡くる期あるも、青頭谿の名は、渠か「ミカエル」の傳と共に永久に傳はるへきなり。

湖國の村落、住民、生活、一片一片、斯くして渠のものとなれり。此年の春、兄弟ヂョン海より來りて渠を訪へり。ヂョンは嚮に學童の時に於て、家を出で、井リヤムの渠を相送りて、エスエイト湖上に別れしより、天旋り地轉じて、今は東洋印度會社の商船アール、ヲフ、アバーガエニー號の船長となり、偶々一年許の暇を得て始めて歸省し、井リヤムが小妹ドラと、此のグラスミールの山中に住めるを聞き、此閑居まで訪ひ來しものなり。一別以來十餘年、相思へとも

各々相誤らむまでに變れる沈思的容貌と暴露的黎面

兄弟身を以て相献せり

相見る能はず、相慕へども相語る能はず、天涯遠く隔たりては、時に隨ひ事に觸れ、唯運命の慈悲を祈るの外なかりし兄弟、今斯く無事に再會せしと、如何ばかりの滿足なりしならん。然して各々相誤まらむ迄に變れる、其沈思的容貌と、暴露的黎面の歴史を、夜と共に問ひ語りし時、如何ばかりか悲哀の涕を交へしならん。然して兄弟は猶ほ慊々として安ずる能はず、遂に身を以て相献じ、爾後の生涯に於て、弟は、世の爲にして世に容れられず、三十にして猶ほ室なく、詩の價、靴の紐だに買ひ得ざる不遇詩人を、生活の煩累より除きて其心志を肆ならしめ、自身も亦此グミスミールの山中に來り、兄妹と共に安全に世を終むことを誓ひ、兄も亦平生久しく相見す、其心質の變遷如何を憂ひしにも拘らず、今も猶ほ自然の情人、沈默の詩人として、恒に自然の懐にあり、自然の胸に護まれ、世を擧つて抛ち去りたる兄の詩集を快讀し、自個の生命を賭けて得る所を以て、其兄を救はんと誓ふ弟に對して、爾後の作詩の、盡く渠か滿足の爲にせんと矢ふことを忍ひ得さりき。

閑居より遠からさるある邱上に、蔚然たる樅樹林あり、冬の寒甚たしく、一日一日、雪降りつゝき、グラスミールの谷、殆と全地を失ふに當り、此下蔭には、雪淡く、雪なく、恰も散歩の退避場となるに足る處ありき。年新まりて、渠か初めて足跡を着けたるは此樹蔭にてありきと云ふ。今やヂョンか海より來るや、渠は最も此林下を好み、興來る毎に唯一人茲處に來り、宛然船背を蹈む的の一定の足歩を以て、其路を量るもの、如くに行歩し、或は未た知らさりし路を得て、遠く自ら失はれ、或は未た見さりし境を見て、獨り歸るとを忘れつゝ、此處に逍遙する毎に意を極め、心を樂しまさるとなか

「ヂョンが森」

「兄弟」の悲歌、其情甚た悲し、

叙情詩集第二卷成れり、

り。斯くてグラスミールに在ること八ヶ月、再ひ去つて海に往けり。ヲルヅヲルスはヂョンを懷ふて止まず。此森を「ヂョンか森」と呼ひて其足跡を追ひ、「樅樹蔭の路」を賦して、ヂョンの歸來の速かならんことを望思するの情を叙へたり。然れとも渠かヂョンを懷ふの念猶ほ止まず、遂に翻つて「兄弟」の悲歌となれり、其情甚た哀しきなり。其大要に曰く、牧夫の遺孤兄弟二人、幼にして相別れ、兄は故郷に在りて牧業を嗣き、弟は海に往けり。二十年の後、弟は兄を生活の苦より救はむと、其財囊を懷ひて故郷に歸り來りしに、兄は久しき以前既に世を去りてありしかば、復た去つて海に終ひぬと。渠の傑作にあらずと雖、辭情悽絶、人をして涕の出つるを覺えさらしむ。千八百年の暮、叙情詩集第二卷成れり。是は「ルーシー、グレイ」、「詩人の碑」以下、日耳曼に於ける諸作、及ひ「乞翁」、「ミカエル」等、ヂ

目なき詩界は先つ其「觀察」の爲に恥かしめられぬ

ョンの快讀を經しものに加ふるに、此「兄弟」等の作を以てしたるものなりき。渠は猶ほ之に附するに、第一卷の再版、及ひ渠か詩を解する便宜の爲とて、始めて盡く其抱懷する所の詩論を發表し、題して「觀察」（オブサーベーション）と稱する叙文を冠して、之を倫敦共同出版會社に投し、其の報酬として僅に百磅を得たり。詩は出てぬ。目なき詩界は、先づ其の「觀察」の爲に恥しめられて一層激昂し、批評の矢、雨の如く下りて、之を世の耳目より奪ひ去れり。渠か玆處に來りし初より、慢性病の如く其心緒を傷めつゝあり、弟ヂョンが、之が爲に渠を救はんと誓ひし生活の困難、今や漸く逼り來れり。渠は初めカルヴートの遺贈九百磅と、嬢か得たる一百磅の遺産を以て、人の骨を傷ましむる生活の苦念を逐ひたりと雖、是は唯一時に過きさりき。渠は嚮にグラスミールに卜居して、心境の新なる

渠か今に到りてメリーハッチンソンを空しく閑居の外に怨望せしめたる所以を見は其の中心の如何に落寞なるかを看るへし

分配金千八百磅は兄妹の手に落ちたり

よりして、自から新なる希望湧き來るものあるか如く、當坐は恰も苦痛なき樂境に住するが如く謂ひしと雖も、其感覺も漸く老ひたり。嬢か非常の節儉法を以て巧に生計を調理したる千磅の貯蓄も、百磅の原稿料も七年の生活の後、今は漸くにして盡きんとせり。若し渠か今に到りてメリーハッチンソンを空しく閑居の外に怨望せしめたる所以を見は、渠か心中の如何に落寞なりしやを知るべし。然してオルヅオルス家の渴望なりける亡父の遺産の復り來りしは此時(千八百二年)なりき。前年の暮、ロンスデール伯歿し、少ロンスデール伯、新たに家を襲ひ、亡父のヲルヅオルス家に不義なりし其の五千磅の母錢と、之より生する子錢、三千五百磅を併せて償還せしにより、其千八百磅は、分配金として兄妹の手に落ちたり。物の樣は一變せり。渠等は旅裝を整へたり。ヲルヅヲルスは今ドラ

物の樣は一變せり渠等は旅裝を整へたり

渠は今久しく空しくせし約束をメリーに成就せんか爲に行くなり

を伴ひ、其山地の一角に、暫時の訣別を告け、絶えて久しき亡き母の故郷ペンスリスに發足せり。問ふとを止めよ、渠は今久しく空うしたる其約束を、メリーに成就せん爲に行くとを。渠等か隨時山より花卉を取り來りて裝りし閑居は、薔薇、忍冬、金盞花、雛菊を始めとして、花美しき、葉の珍しき無數の艸に纏はれて、愈可憐の住居となれり。渠は今其戸を閉ち、天の保護に委して出でたり。

宜なる哉爾の佇み、眩ゆき眼を以て凝視するとよ、
安き山角に立てる其の可憐の小屋は、
其の美なる小川、其の小き牧場、
乃至其の明媚なる天を以て、深くも爾を撼かしつらむ。
然れども其住居を貪る勿れ、羨む勿れ、
多くの人のする如く、見つゝ且つ嫉むを休めよ。

花卉、芳艸貧者の爲に一として神聖ならざるはなし

夫の侵入者を見れば、其不虔の手を以て、
珍奇なる葉を自然の書卷より引き裂くなり。
此家若し爾のものたらば果して如何、
爾の嗜好の淡なるにもせよ。夫れ天井、窓、戸より、
個々の花卉も、戸庭に枝を交ふる薔薇に至るまで、
貧者の爲に一として神聖ならざるはなし。
大凡爾を歡ばしむる所のもの、
其の觸らるゝ日より、忽ち消ゆべし、消え失すべし。

渠は倫敦を詩境となせり

「エストミンスター橋」

詩人正記

第四章　湖畔詩人及び其家庭

ヲルヅヲルス兄妹は婚嫁に先ちて倫敦より佛蘭西に遊べり。十年前生活の擇に失望して、白衣黒婦人の外、見る所なかりし倫敦も、今や滿足の眼に對して如何ばかり變りてあるや。渠は倫敦を詩境となせり。渠は茲處に多くの絶句を得たり。然して渠等が其倫敦を去らむとするの曉、恰も五時と六時の間、人の未だ起き出ざる時、街の一煙猶ほ未だ起らざる時、エストミンスター橋を渡らんとして、遙に其川に浮ぶ船舶、及び川を夾む兩岸の人家、高塔、寺院、劇場等の、靜かに新鮮なる黎明の光を衣て、朗かに明けたる空に立てるを見て、謂へらく、天地の間、復た是より艶なるものはあらしと。有名なる

自由民の名を帶びたる奴隷

年の十月メリーを伴ひてグラスミールの閑居に歸れり

最も幸福なる結婚

最も幸福

ユストミンスター橋の絶句、渠は此時に於て之を得たり。

倫敦を去りて、カレイに向ひ、カレイに於て、海上の夕、落日金波の情を咏ぜり。渠は今、嘗て身を献じて盡瘁せんと誓ひたりし革命の地を來り見て、革命も過ぎ、自由も過ぎ、其の愛したりし平野黨も、憎みたりし山岳黨も過ぎ、佛國民は墮落の極、ナポレオンと呼ぶ一個の專制力の下に、空しく自由民の名を帶びたる奴隷となり了れるを見、心胸鬱塞して久しく留まると能はず、速かに本國に歸り、年の十月メリーを伴ひて、グラスミールの山中に入れり。

詩人家庭の恨事、其同時代の詩人バイロン、セレイ、コレリッヂ輩の如きは、固より云はず、敬虔にして神を羅るゝ詩家ミルトンの如き人と雖も免れざる間に在つて、獨りヲルヅヲルスの結婚のみ、最も幸福なる結婚と稱せられ、其の家庭のみ、最も摸範的家庭と呼ばれぬ。

なる家庭

其樂田園にあるメリー

一家三人三位一體

是れ固よりヲルヅヲルスが、夫として最も好き夫たりし所以多きに居らずんばあらずと雖も、然れどもメリー、ヲルヅヲルスが妻として最も好き妻たる所以亦少とすべからざるなり。メリーも又村落に生れ、「其樂田園にある」の人なり、故に能く詩の何物たるを解し、良夫の詩作に對して、同情を表し、其閑散を重じ、其自由を敬ひ、以て其天才を圓滿に緊張せしめ。亦能く自個の天眞を發露して、一方には其良夫の退隱生涯に伴ふ自尊の習癖を和げ、一方には來客を主人に近づけ、轉た會話を易からしめたり。家政の調理に關して、彼は盡くヲルヅヲルス孃の規摸に從ひ、又事毎に其助言を求め、良人の情と云ふべき、孃を愛すると姉妹の如くにして、自身も亦孃より姉妹の如く愛せられ、一家三人を以て三位一躰ならしめぬ。宜なる哉、ヲルヅヲルスがメリーを賛して「其坂登りの進みに於て、終ま

て渠を推すの後援なり」と歌ひしとや。

千八百二年以後、渠か詩作の進路に於て、最も注意すへき事は是なり。渠は一道の天才を兩分し、半面湖國の詩人として、渠か日々親炙せし湖國の人物と自然を經緯して、哲理的一大作「逍遙遊」の稿を起し、半面は猶ほ愛國家として、佛國再遊に於て復活したる感慨を叙へ、「自由に奉するの絶句」を歌ひ始めぬ。

國詩人と愛國詩人、逍遙遊と自由に奉するの絶句

千八百三年八月ヲルヅヲルス夫妻兄妹、コレリッヂの同伴を得て、第一回蘇國漫遊の路に上れり。此行渠等は前代の蘇國詩人ロバート、バーンスの墳墓、ロモンド湖以下、此の歴史國に於ける名所、舊跡、古城斷廊を訪ひ、到る處必す詩ありき。渠等はロモンド湖上に於て、姉妹の「ハイランド」童女を見たり。嬢か記する所に由れは、彼等は非常の佳人にして、其の二人とも、足まで垂れたる一樣白き胸當を衣、

第一回蘇國漫遊の路に上る

姉妹の少女

面のみ顯はして列ひ立ちたりし姿は、渠等か看て過るには餘りに美なりき。渠等は近つきて事問ひたるに、姉妹か言語の、流麗、明浙、自在なる、坐ろに渠等を心醉せしむるはかりなりしと。ヲルヅヲルスは、一たひ之を「ハイランド」童女に賦したるも、情猶ほ盡さす、再ひ「素屋の三小女」に咏したるも、猶ほ盡さす、久しき後、始めて人口に膾炙したる「彼は歡喜の影なりけり」の短篇を得、之を以てメリーに贈れり。渠は今十年來の一事を成せり。

「彼は歡喜の影なりけり」

渠等は唯蘇國名所の名所、古跡の古跡なるヤローを訪はさりき。ヤローは美なる牧谷にして、トヰード流に委會するヤロー河の縈回する所なり。蘇國邊境の亂より以後、幾多叙事詩歌の中心點として著しく、殊にハミルトンの「いそげ、いそげ、いざ我妹子よ」の名曲に依て、最も讀詩社會に顯れたり。ヲルヅヲルスも亦是等の詩を讀むに

「ヤローを訪はす」

南巡してスコットに邂逅せり

由つてヤローの勝概を想像しき、然れとも今回渠はヤローを訪はさりき、謂へらく、ヤローの眞景を以て其幻影を滅すを欲せすと。

斯くて渠等は南に還り、メルロースに於てサー、ヲルター、スコットに邂近せり。渠猶ほ未た「湖上の姫」も、「マーミオン」も書かす。猶ほ未た名を知れさる詩人なりき。渠は今一地方吏として其職に赴く途中にあり、意外の遊客に接して愉快に堪へす、渠等をメルロースの精舍に導き、其景色を示し、其故事を説き、其後渠等と一逆旅に晩餐を共にして相別れたり。途上の會面甚た草率なりしに拘らす、渠等は既に此時よりして親友となれり。

艸率なる會面

畫家サー、ゼオジ、ビウモントと呼ふ

蘇國より還りて、ヲルヅヲルスは他の一層近き知己を得たり。其人は有名なるエリサベス朝戲曲家の裔、サー、ゼオジ、ビウモントと呼ふ才あり識ある畫家にてありき。ゼオジは初めコレリッヂの名を慕ひて、ケス井ックに來り、コレリッヂの交誼を得て其寓せるグレヲ館に留まれり。渠はコレリッヂによりてヲルヅヲルスの事を聞き、其人をケス井ックに致さんとの切望に堪へす、スキッドー山の麓に一片の美土を買ひ、宅地としてヲルヅヲルスに呈せんとを申出てたり。偶々コレリッヂ久しく傷める健康回復の爲め、英國を去るの止むを得さるに會ひて事止みたるも、斯の如き好意、如何そ深く渠を感せしめさらん哉。渠はゼオジの欵情を謝するに、最も純粹なる感情と言語とを以てせんか爲め、返辭殆と二個月間を費せりと云ふ。洗季斯の如き世に於て、是豈に驚くへき事にあらすや。

返辭殆と二個月間を費せり

ゼオジの交誼は此靜肅なる家庭より多少の香氣を誘ひ出せり。云ふまてもなくゼオジはコレリッヂの不在の間、能く渠を訪ひ渠を招きたるへし。然して多く畫を見さるも、自然を知りたるヲルヅヲルスも

多少の香味を誘ひ出せり

亦景色畫に於て、ゼオジの多少得る所あるを認めしものゝ如く、ゼオジの作にして意に會するものある毎に、賛して以て時時の興を遣れり、渠か最も嘉したるは其の暴風斷郭の圖にして、「甚深の苦楚は我心をして人間を思はしむ」の句を、渠に惠みしは此畫幅なりき、かの「歡喜の影」を畫きて、渠より絶句を博取せしも、亦た是の畫家なるなぎを得んや。

翩々たる紳士的畫家は、能く此の新詩人の知己とし稱讃者として、渠か詩畫の交を得るの好運を得たるも、果して能く其新趣味を解する新畫人たりしや否。渠も亦他の舊詩人の如く、舊趣味の間に醉生夢死する所の舊畫家にはあらざりし乎。孰れの時、孰れの國に於ても、畫家は詩人よりも幼なきものなるが故に、當時の詩人すら解する能はざる所を、ゼオジか獨り解せりと思ふは非なり。然れともゼオジ

ピウモントを啓發せり

最も陷り易く然も最も惡むへき自吾の趣味

の俗骨を俗骨に任せ、心を欺きて交際するが如きは、ヲルヅヲルスの肯ぜざる所なるが故に、渠は其識る所を以てゼオジを啓發せんと欲し、渠に告ぐるに、美術家たるものは、須らく心の手を以て自然の活ける靈を捕捉すべきことを以てし、眞成の成功は唯渠自身、身邊の景情と默契し、紛々たる雜念を拂ひ、心を虛して自然と神會し、若し變更する所あらんとせば、須らく他の默示を待つてするにあるとを以てし、然して渠は猶ほ美術家の最も謹て避くべきは、最も陷り易くして、然も最も惡むべき自吾の趣味にあるとを以てし、美の目的の一個人若くば一階級の滿足の爲にあらざるか故に、美の裡最も廣く最も普き美を採るべきとを以てしたり。

サー、ゼオジ、ピウモントが果して斯の如き眞面目なる勸告を受くるに勝ふるの畫家なりし乎否、吾人は之を知らずと雖、然れども二家の

天惠は友にてもなく讐にてもなかりき

寂しきクラスミールの閑居か大世界より賑かなる時は今なりけり

兄弟ヂョンの訃音

交誼は。千八百二十七年、ゼオジが終る迄繼續し、殊にビウモントも忠實なる渠か衛星たりしなり。

夫人の如きは、能くヲルヅヲルスの詩を知る知らさるに論なく、最然れとも天の惠みは、友にてもなく、讐にてもなかりき。ヲルヅヲルス夫人は待ち設けられたる如く、千八百三年に於て長男ヂョンを擧け、千八百四年に於て、長女ドロセアを生めり。家庭の幸福は具足せり。寂しかりしグラスミールの閑居か、大世界よりも、賑かなる時は今なりけり。

豈思はんや、渠か生涯の望なりける兄弟ヂョンの訃音。此時にして到らんとは。優しくも生涯を兄に献して、渠を生活の苦より脱離せんとの志を立てゝ、五年以前グラスミーを出てたるヂョンは、此目的を以て長き兩度の航海を成し、今や其第三回として、ポルトマウスを開航し、海峽より舟を出さんとするに當りて、水先案内の失錯の爲に、ポルトランド島の岬角に於て、舟岩に乘りあけたり。

渠は是迄其義務の命せし位置に生きたりし如く死せり

我か生命

是は實に千八百五年の二月五日の事なりき。「時は恰も午後の五時、急を報するの急砲は放たれ、猶ほ斷えす放たれぬ。舟は夜の七時に於て、岩を離れたるも、夥しく水を呑み、絶えす吐かしめたるにも拘らす、漸々に沈みかゝれり。舟夫等は船の猶ほエイマウスの渚まて走り得へきの望みを維き、一人一人、此望を以て絶えず侵水を吐かしめたるが、夜の十一時の比、望も船も遂に沈めり。船の沈まんとする數分前、我か弟は一等水夫と快けに語らひつゝ、頓て全船を見下すへき鷄籠の上に立ちたりし時、船は沈めり。渠は是迄、其義務の命せし位置に生きたりし如く死せり」と、兄なる詩人は語れり。渠は猶ほ語を繼て云へり。「我は我か生命より、一たひ截たれて、回

より戒たれて回復すべからざるものあるを覺ゆ

復すべからざるものあるが如く覺ゆ。我が渠を思ふ時、胸に溢るゝ希望と歡喜なくんばあらざりき。我は渠がグラスミーアに歸り來りて、我が隣たらん時、渠が生涯の事既に了りて、靜かに其報酬を求るより外に事のなき時、遠からず來らむとをのみ遲ちにき。我は謂ひぬ、其頃は我も亦我事の過半を了へて、渠が我を信ずるの空からざりしとを示すとを得べしと。此の望に滿たされて、渠が意を得んの念なくしては、一行たにも書かざりき。然して我の著す所と云へば、書冊となく、艸稿となく、渠が快樂の種子となり、長き航海の間に於て、二なき慰籍なりけるを。渠は今將た何くにかある、然れども我をして止ましめよ。我は力を落さゝらむ。死若し渠が爲なりせば、我は心を喪はさらむ。我が爲すべきと猶多し、徒らに悲しまむより、寧ろ上よりの力を祈らむ。我等が間の約束に於て渠が部分は

渠か特質より出て來れる哲理的滿足の方便

告白すれは我は自ら滿足すべき

終りたれども、我が部分は猶ほ續けり。我は寧ろ平かに渠を懷ひ得る時、生ける渠が與へし歡情よりも、其死の記憶の、一層我を鼓舞する時の來らむとを望まんのみ」。

嗚呼是れ渠が特質より出で來る哲理的滿足の方便なりき。然れども人は唯哲理のみを以て活きざるなり。哲理を以て感情を制せんとするは、恰も左手を以て、右手を制せんとするが如く、壓ゆれば益揚り、退くれば益反る。渠が嚮に冷淡なる思想家たらんとして却て詩人となりし所以も亦茲にあり、渠が哲理に安せざる、今豈に疇昔に異らん哉。「我も亦御身が問ふ如く自ら問へり。渠は何故に執り去られたるかと。告白す、我は自ら滿足すべき何等の答をも得すして止めるとを。嗟呼人は如何なれは是非を論するの德義物たる乎。最高主宰者か、人に對して斯くの如く用捨なき世に、人のみ獨り愛する

答を得さりき

ものに同情を表して、其憂患苦痛を懼れしむるは、抑も何の心なるや。若し物をして此世に盡くるものならしめば、我等か同胞に對する思想の、主宰者の攝理と、如何なれは斯くまて復かに異なるへき乎。死と滅ふへき假定説の上に立ちて、我等は最と微き物なれとも、造物者よりも多くの愛情を有すと云ふ。是れ豈に穢す言ならすや。

一層深き疑問

斯く云ふは、極めて怪しく聞ゆへきも、我か不幸の念を除くは、他の善き世界ありと云ふ假定の外、何物も之なきなり」と。渠は今一層深き疑問に陷り、一層深き哲理を以て自ら拯はんとせり。然れとも渠か心の天人の如く論する間に、渠か情は、人間の如く「渠を返せ」と叫へるなり。實に渠は多くの聖徒の如く、自ら説き慰めたりと雖も、猶ほ凡夫か其失ひしものを畫像に復して、始めて甘心するか如く、詩に於て渠を復活せしまては滿足せさりき。

一層深き哲理渠を返せ

相傳ふ、渠か「好武人」(ハッピーティーリオア)の作は、ヂョン、チルヅチルスと殆と時を同ふして海に死し、死して猶ほ生るか如き大チルソンの性情と、ヂョン、チルヅチルスの性情とを拍合したるものなりと、

渠若し、人類の爲め善かれ悪かれ、
天の豫め大結果を結ひつけたる
大機會に當るへく召さるゝ時には、
快然たると情人の如く、忽然として
色輝やくと、天啓を受けたる人の如し。

渠斯く風雲變動の際に乘する
意氣、才幹の天賜を有てるも、

渠の心の衡は恒に
衷なる快樂、閑かなる天地に傾く。

スコットは來れり

スコット來れり、渠は今「最後伶人の曲」を著はし、文名一日天下を動かし、一躰して大家林に列せられ、千歳不朽の面目を帶びて、ヲルヅオルスを其溯居に訪へり。渠は好き時に來れり。ヲルヅヲルスが、平かにヂョンを思ひ得るの時に來れり。ヲルヅヲルスは渠を導きてグラスミール谷の奥、ヘルベリンの高峰に上れり。スコットは筆と手帖を携へ、好く準備して閑居を出て、路々其目を驚かす所の景色、例せば沙上を亘る水、其水に臨む岩上の斷郭岬頭、紅の實を振ふ榛皮樹等、目に觸るに從つて手帖に書きつけ、閑居に歸りて其書きつけを詩に編みき。

筆と手帖とを携へたるスコット

自然は其美を目錄に製するを許さず

情に殘れる所の畫像即ち景色の眞觀念

偶然の美特色の美

スコット還れり。ヲルヅヲルスは其友に語つて曰く、「自然は其美を目錄に製するを許さず。渠は須らく手帖と筆とを家に置き、敬意を以て身邊の事物に對し、情を披きて其精靈を感受すべし。斯くして數日を經たる後、其の見し景色を以て、情に質さば、渠は必ず其嘆稱したる物の一半痕迹を存すると同時に、其一半は賢くも割愛されたるを觀ん。殘れる所の畫像、是其景色の眞觀念なり。以下の形像、個々其物として見る時は、觀るべきものなきにあらざるも、要するに其景色の特處にあらざる偶然の美なり。孰れの景色に於ても、偶然の美は特色の美よりも多し。自然を觀るの眞眼は、決して之れに注くべからず、注くとも住まるべからず」と。

此年(千八百五年)長篇「序文」、及び「車丁」の作成れり。

一千八百七年、渠は今日まで脱稿せし「自由に奉くる絶句」に加ふる

新趣味と舊趣味

に、「好武人」、「義務の歌」、「蘇國漫遊雜詩」等を以てし、敘情詩集第三卷を出版せり。世は茲に始めて渠が詩界革新の大精神を認識し、瞿然として恐怖せり。渠等は最早之を一笑に附し去る能はざるのみならず、却て之に對して渠等が文學、渠等が趣味を保護せざるべからざるの必要を感ぜり。渠等は今ヲルヅヲルスが渠等を呼ぶの名目を以てヲルヅヲルスを呼び。渠を英國文學の賊とし。英國文學の神聖を瀆すものとし、其詩を目して俗と呼び、僞と呼び、以て敘情詩集の頒布を妨げたり。渠は依然答へざるを以て渠等に答へぬ。

渠の多からぬ朋友は、是等の妄評の、或は渠が自信を奪ひ去んとを恐れ、殊にビウモント夫人の如き親切に渠を憂ひしかば、渠は却て慰めて曰く、

「我は明かに我を辨護するが爲め、御身及び他の朋友諸君が遭遇する

獨り少年のみならず孰れの齡にも見、感し思ふとを教へ人心をして有道に歸せしむ是れ我詩の命なり

英人の我

所を知る。然れども我が詩の今の不遇を意とする勿れ、我が詩の命として信する所のものに比すれば、是等の囈語、我に於て何か有らん、夫れ苦しめるものを慰め、幸なるものを彌幸ならしめて、日中に日光を加へ、獨り少年のみならず、孰の齡にも、見、感じ、思ふとを教へ、人心をして有道に歸せしむ、是れ我が信する我が詩の命なり。我は我が詩の身後に留まり、永く其命を果すとを信するものなり。是故に詩人をして先つ其情に謀らしめよ。餘は後世に任せて可なり。我は苟も詩を作らず、我が詩の一篇だに、或る意味或る理想を帶びざるものはあらず。自由の詩乎、我は敢て之を云ふ、其詩躰の簡にして、道德感情の健なると、今代の諸作、孰か我が詩に如くものあらんや。唯世人の我が詩に對して冷淡なるのみ。若し小を以て大に比すべくんば、英人の我に對する、宛も大陸の沙翁に對する

に對する大陸の沙翁に對するが如し

大詩人は皆教師なり

と同日の論のみ。世を擧げて我が誇る所を毀り、世を擧げて我が醜づる所を揚ぐ、然れども、大詩人は古より皆教師なり。我は教師たらんことを願ふ、然らずんば無に歸せんことを欲す。コレリッヂ嘗て我が爲に言ひき。「大家たり新詩人たるもの、其の大なり、新なるに隨つて、其の趣味を敎へざるべからず」と。

スコットとチルヅチルス

詩界は今スコットの代なりき、世は渠を無冠の王と稱へり、ヲルヅヲルスは其間に在つて、眇たると大海の一粟の如くなりき。

アラン堤に移居せり

千八百八年の春、渠は八年間、定居したりしダウンエンドの素屋を閉ち、湖水の首アラン堤(バンク)の新居に移れり。是は詩人が家族の昌へて、舊居の狹きを感ずるに至りたればならん。ヂョン、ドラの兩兒年を接して生れしより、千八百六年に於て二男トマス生れ、一千八百八年に於て二女カザリン生れ、唯二人なりし家族、今は殖へて七人となれり。新居は舊屋に比して云ふまでもなく廣かりしかども、グラスミールの正北角に當れるが故に、一直線に朔風を受け、冬の寒さ堪へ難かりき。

自由の詩了つてシントラ會議論出てぬ

渠はアラン堤(バンク)に住みし三年間、渠は「逍遙游」の作に從事する外、「シントラ會議論」を著して、大に自由を重ずる英國政府の無氣力を責めたり。

渠は詩人にして隱者にあらず

オルヅヲルスが山中に退隱せるが故に、渠を以て世と相遺れたりと思ふは誤れり。渠は詩人にして隱者にあらず。渠は日として新聞紙を手に觸れざるなく、時ありては之を閑散なる散歩にすらも伴へり。ある暴風雨の後、谷を歩くの夕、携ふる所の新聞紙に於て、フオックスの將に歿せんとするの報道を見るや、慨然として叫べり。「谷響き、聲高し、天の送りし所の人、再び天に歸らんとする乎」と。渠は歐洲

谷響き、聲高し、天の送り

諸國の民、其政府の懦弱なるが爲め、殘酷なる壓制主義の下に呻吟するを見、慷慨自ら禁ずる能はず、其の西班牙國民かナポレオンの武力に對し、獨立を叫ぶに當りて、渠は其苦しめるものに滿幅の同情を表し、毎朝新聞の配達し來るを遲しとし、ケス井ッグより夜來る新聞運搬車に逢ふべく、朝の二時、アヲン堤よりグラスミールの往還まで馳け出たること、幾回なりしかを知らずと云ふ。

（ケス井ッグより夜來る新聞運搬車を待てり）

渠は「シントラ會議論」に於て、英國の佛國に對し、西班牙國民を救ふの力足らずして、遂に西班牙國民を擧げて、再び一賤夫ボナパートが脚下に陷らしめたるの罪を鳴らして、其義憤を公衆に訴へぬ。

當時の大政治家カンニング之を讀むで驚嘆して曰く、エドモンド、バーク以後の文字なりと。然れどもヲルヅヲルスの名を帶びたるものは、詩となく文となく、世人の省せさると故紙の如くなりき。

（エドモンド、バーク以後の文字なり）

コレリッヂがヲルヅヲルス家の天井の下に來りて、「朋友」てふ散文を著したるも亦此時なりき。此一時の閑居を傳へて後世に垂れしめたるものは、此兩篇の文章なりき。

（コレリッヂの「朋友」）

千八百十年季子井リヤム生れたり。其翌年ヲルヅヲルス一家は、再びアラン堤より、一時グラスミールの寺院に移居せり。

（三たびグラスミールの寺院に移居せり）

「逍遙遊」に於て、遊歷者と渠と、隱者を伴ひて來り觀し寺院と墓地は、即ち此寺院、墓地にして、渠等を誘ひし僧も、亦此寺院の牧師なりけり。

渠はこの假居に於て、兄弟ヂョンの死よりも悲しき不幸に遭へり。渠は一年の中、二個の愛兒を喪へり。渠は既に兄として、最も熱衷なる兄、友として最も親切なる友、夫として最も密着なる夫なるが如く、父として亦最も慈愛の父なりき。渠は屢其兒女を歌へり。渠

（渠は一年の内二人の愛兒を失へり）

は「吾嬰子ドラ」及び、「三對」に於てドラを歌ひ、カザリン畫像に於て「此兒可憐」を咏ぜり。然して千八百十二年六月、其可憐兒逝き、幾もなく其兄トマス亦其妹を追ひぬ。慈父の哀悼知るべきなり。渠が友の或ものは云へり、渠がその一兒の危篤なりし時、渠は正に筆を執り居り、風の如く吹こみ來る、神來の興に動かされ、他を顧るの遑なく、爲に其子の死に遇はざりしと。渠が其の天職を重む、愛兒の天命と爭はざるに於て、殆ど人情に近からざるものあるが如しと雖も、然れども其の悲哀の深刻なる、四十年の後、頭髮種々、記憶漸く消え盡るの時に於てすら、語次亡ひし兩兒に及へは、目濕ひ、唇震ひ、言語屢凝絶するにも拘らず、細かに當時の病狀を陳べ、聽者をして殆んど前日の事の如くに感愴せしめき。

兩兒は其寺院の墓地に頭を列へて葬られぬ。晩年渠か唯一の望にして、當年八歳九歳なる可憐のドラは、遽に二人に亡くなられて、如何に寂しく遊びつらん乎。人ありて、兄弟はと彼に問はゝ、此兒は何とか答へつらん乎。

兄弟はと彼を問はゝ此兒は何とか答へつらむ乎

「我身の兄と妹なる、
二人は墓に寢ねにけり。
墓遠からぬかの小屋に、
わかみの母はすみませり。

「二人の墓は青々と、
こゝよりしても見ゆるなり。
母ます戸より遠からず、

二つならひて立ちにけり。

「先たちたるは妹にて、
かれは寐床に泣きつるを、
神の來ましてくるしみを、
とりましたればゆきにけり、

「妹か墓に寐ねしより、
艸葉の露のひるごとに、
墓のそばにて遊びけり、
我身と兄と二人して。

「眞白に雪のふるときも、
墓にてともにすへりしを。
間もなく兄もさそはれて、
妹のそばに寐ねにけり。

十五年前の作十五年後の豫識となれり

見るもの聞くもの皆兩兒の記念なりけり

渠が十五年前の作、今や十五年後の豫識となれり。哀き哉ヲルヅヲルスの詩、不思議なる哉ヲルヅヲルスの詩、

家に在つては兩兒が遺容を見、家を出ていは其墓を見、目に觸るもの耳に聞くもの、一として兩兒の記念にあらざるはなく、渠が心を安じて居るには、寓居の餘りに悲しかりければ、渠は遂に此處を去るの心を生じき。千八百十三年の一月、其友ロンスデール伯に告げて云へり、「我が當分の寓居は、グラスミールの僧宅にして、直ちに墓

生涯の安居と期したりしグラスミールの谷を出てライダル山に隱れぬ

地に臨むで立ち、我等が去年、受けたる哀傷の追念をして、刻々心に新ならしめ、我義務とし求むべき平和に達するの道、痛ましくも杜絶せられぬ」と。千八百十三年の春、渠は其生涯の安居と期したりしグラスミールの谷より出てゝライダル山に隱れぬ。

第五章　湖畔詩人及ひ其詩

ライダル山決して渠に新しからす

ライダル山は決して渠に新らしからす。これまて既に渠が逍遙の場なりき。渠は其兄弟の作に於ても、其場を此地のエナー谷（デール）に取りたりき。

飛鳥を半仰き半俯する高處

渠の新閑居は、岩かちなる坂路の中間、飛鳥を、半仰ぎ、半俯する高處に立ち、多年の風雨に暴され、葛藟處々隙を窺かひて匍匐ひこめる荒屋なりき。眺望は三面塞かり南方開け、邱の麓、綠野遠く敘ひ、遙かに井ンダーミールの湖の樹影を緣にしたる大明鏡に對し、瑰奇なるロセイの谷を俯し、虛空に畫ける蔚然たる林岳を仰ぎ、氣象日に美より美に變じ、詩の如く、畫の如く、穩かなる夢幻境の如

最も夕日を觀るに宜しかりき

ライダル山の閑居、猶ほグラスミールの閑居の如し

く、して、最も夕日を觀るに宜しかりき。遠く天の一方に向ふ攢峰の裡、最も遠くして最も高きもの、日夕夕照を帶ひて暮嵐を生じ、氛氳たる山背、半は黃金館となり、漸くにして紫雲殿となり、又た漸くにして琉璃宮となり、日光天に歸して。然る後山に復りぬ、室內は例の如く質素なる什具を以て裝飾せられたり、ピウモンーが、畫きし「ライルストンの白鹿」、及び「荆棘」、其處に懸かり、此處に懸かり、中夜の寂覺の寂寞を破る時計も懸かり、三百年の時代筐も、亦依然として室の隅に坐せり。

此處も亦グラスミールに於ての如く、菜園日ならず家を環り、邱上の平處には幾徑の路開け、叢深き麓に最も手を盡したる花逕通し、麓より閑居に上る、虧間草を生ぜし石梯あり、鵶のなく榛の喬木あり、鳩の籠の懸けられたるラバラム樹あり、山の側面に於て、近き

ダッドンの流を無窮に流れしめぬ

印紙配付事務と五百磅の年俸

平處より遠き平處に通する中間の平處は、渠が其詩を吟唔する處、其ランダ谷及び小ランダ谷は、「逍遙游」に於ての會話場の中心に擇はれし處、湖國南西境に於ける最も幽き隅を流がれ、唯名のみあつて世に顯はれざりしダッドン河の源より委流までは、渠が日夕涉りて以て三十六篇の絶句を得、ダッドンの流をして、無窮に流れしめし處なりき。

好運は渠に伴へり、渠が生活の再ひ蘆らむとするに當り、ヲルヅヲルス家に對する、其父の不義を償はんが爲め、詩人の保護者として顯れたるロンスデール伯は、渠がライダルに來るの初、千八百十三年の五月に於て、渠が爲めに、五百磅の年俸を生ずべき、エストモアランドに於ての印紙分配の職を周旋し、猶ほ重ぬるにカムバーランドに於ての同職を以てしたり。然して其事務は一人の忠實なる書

大作「逍遙遊」を受くるものはロンスデール伯なりき

當時最も高く最も少く最も光ある數星の發見

記の手によりて盡さるゝか故に、渠は依然として吟哦事業に從事するとを得たり、其後伯は猶ほ渠に加ふるに一層豐かなるホワイトヘーブンの收稅職を以てしたるも、渠は辭せり。渠は固より其のセイバインの谷を以て、富と憂の荷に代ふるとを欲せざりき。然れども此の深厚なる好情に對し、渠は昨今脫稿しつゝある「逍遙遊」を以て、此の雅量の公子に奉するを辭する能はざりき。

ヲルヅヲルスが宛も天上の曉星の如く、詩の天職を執りてより、今は殆んど二拾年を經たり。渠は其順次出版する所の詩集に對する妄評に蝕せられて、僅かに知られたる名さへも、世間大多數の耳目より隱されたる同時に、渠は當時最も高く最も少く最も光ある數星の發見し、圍繞し、陪侍する所となれり。渠等はヲルヅヲルスの名の漸く不聞に沈みゆくが間に、漸く渠を情神の元氣の中心と認め、期せずして其周圍を來り環れり。コレリッヂは既に渠が心交たり、クス井ックのサウゼイも、湖派詩人の名を分ち、未來の文章家ド、クヰンシーは初よりヲルヅヲルス崇拜の故に、此地に留まること數年、茲に臣下的口吻を以て、異樣に組立られたる批評を吐露し、ヲルヅヲルスの非凡を認むるの第一人たりし「ノクテス、アムブロシアニー」の著者井ルソンも、亦此閑居に來り、其師の閑歩に伴ひ、其閑話を聞くが如く世に有益なるとなきを告白し、ログビー大學の博士アルノルドも亦フホックスハウに來住して渠が交遊及び智識生涯を分ち、神童の如き幼年を以て、ヲルヅヲルスに沃くに數篇の佳品を以てせし、夫のハートレイ、コレリッヂも亦、天才毀れし脆弱生涯をライダルの谷に寓せて、以て私かに其の高風に淑せり。

是以下、名に於て劣れりと雖ども、其本尊に對する認識同情に於て、

し圍繞し倍侍する所となれり

コレリッヂ、サウゼイ、ドクヰンシー、井ルソン、アルノルド、ハートレイ、コレリッヂ、

フレッチャー夫人、リチヤードソン夫人、デビー夫人、

寧ろ遠く他に踰ゆること、フレッチヤー夫人の如き、其阿嬢の如き、リチヤードソン夫人の如き、デビー夫人の如きありき。是等婦人のヲルヅヲルス傳に看過すべからざると、猶ほマグダレーンの一行が聖書に於て遺るべからざるが如くなりき。

「逍遙遊」成れり

千八百十四年、渠が唯一の大作、畢生の才を犧牲にしたる「逍遙遊」(エキスカーシヨン)の詩篇成れり。渠が心身の歴史、渠が哲理、渠が自然、人間、及び生活の觀念等、大凡渠が此大世界より、一たび吸收したる所のものは、此九卷の大著述に於て遺憾なく吐露せられたり。「逍遙遊」は、普通の標準に由りて判すれば、遊歴者と牧師と二個の主人公を有せる所作なき叙事詩にして、其叙事の梗概は、自然、人生、人生生活に就て沈思する所の詩人自身、其老友にして然も人と神の善知識なる遊歴者を訪ひ、渠より貧の苦の爲に死したる善女の生涯を聞き、

所作なき叙事詩

遊歴者と共に、山間の隱者の、其家族の死沒と、長き大陸旅行の間に受けたる苦痛の爲に、平和を喪ひたるを訪ひ、遂に其隱者を誘ひて山村の寺院に導き、寺院の牧師も亦、渠等を墓場に伴ひ、茲處に葬られたる殊勝なる善男善女の生涯を語るに了れり。其遊歴者は詩人自身の眞影にして、其隱者は世界よりグラスミール谷に陰遁し來れる喪心者、墓中の善男女は即ち渠か朝夕相親しみしグラスミールの山民、其寺院、墓地、牧師は既に云へる如く、渠が假寓したりしグラスミールの寺院、墓地、牧師にして、然して其全齣は即ち盡く湖國自然の美なりしなり。

逍遙遊成れり。渠は妻と妹を携へ、再び蘇格蘭に遊び、スコットを其のアボツト城に訪へり、恰もスコット全盛の時にして、賓客城に滿ち、高會王侯の歡樂の如く、主人の顏、衆中にあつて日の如く輝き

一たび眞景に接して復た幻影を思はす

「逍遙遊」は思想の一大殿堂

たり。アポット城を辭して、渠等は始めてヤローに遊べり。「ヤロー」は是れ乎。我が空想が多年養ひしヤローの流は是れ乎」と。渠は一たび其眞景の美に感して、復た其幻影を懷はざりき。

其夏、「逍遙游」は世に出てたり。渠は自ら之を稱して、思想の一大殿堂となし、其前後の小品は、唯之れを環れる小神壇に過ぎずと云ひ、然して其崇拜者も亦口を極めて稱賛し、或ものは、「其妙處を取つて論ずる時は、詩あつて以來、匹敵すべき文字あらず」と云ひ。或ものは「其景色を叙する妙、古來詩家の云ひ未だ出ざる處を得、未だ盡さゝる處を盡せり」と云ひ。ハヅリックの如き「其個々の事物に對して、殆ど無限の興味を與ふる所の理解の力、觀念の高、感情の深に於て、是著空前絶後ならむ」と云ひ。然して亦夫の有名なる佛國の批評家、バイロンを好むてヲルヅヲルスを好まざるテインすらも、「逍遙游」を頌するに數千言を累ねて曰く、「其の眞摯なる反省、人心に逼るの正氣、輕薄なる佛蘭西風を忘れしむ」と。七十年後の今日、セキスピアーの「ハムレット」の如く、ミルトンの「失樂園」の如く、寂寞たる詩界に於て、仰望仰止の中心となりし「逍遙游」の如き大作も、其の世に出づる初に在つて、如何に落魂なりしとするぞ、エテンボローの評論の主筆ゼフレイは、待ち設けたる好餌の如く、「逍遙游」を捉へ來り、「是は到底爲す無き也」の一轉語を下して、以て數萬言の「逍遙游」よりも著名ならしめ、バイロンは「逍遙游」と呼ばれし、眠たき、烟たき詩」と冷笑し、セレイも亦口を極めて罵詈し、然して冷淡なる讀書社會は、總じて沽はざるを以て之を辱しめたり。ヲルヅヲルスの名、殆んと地に葬られんとせり。

是は到底爲さゝるなり

眠たき烟たき詩

然れども渠が儼然として屹立せると、スキットー山の動かざるが如

「逍遙游」成つて渠か大業殆ど畢れり

詩界の革命

くなりき。渠はサウゼイに答へて云へり、「世をして其闇黑を愛せしめよ、我は天の光に依つて書く」と。「逍遙游」成つて、渠か大業殆ど了れり。今や余をして且らく渠か事業を觀せしめしよ。

革命詩人として渠が詩界に持ち來りし所は、恰も他の革命の偉人が宗教界、學問界、政治界に持ち來りし所と、氣脈の相貫通せるを見る。

大人時代の特質、平等の觀念事實の好尚

蓋し革命の氣運は、世界の年齡、社會の發達に於ける一紀元を指示する者にして、十四世紀文學復活以後、新たに勃興し來れる革命の氣運は、進歩世界の、既に幼年時代、少年時代を過ぎて、漸く大人時代に成熟せんとするが爲に惹き起されたるものなり。然して大人時代が革命と共に伴ひ來る所の特質は、曰く平等の觀念なり、曰く

事實の好尚なり。ルーサー、カルヴヰン等の先哲か、羅馬法王か獨占したりし天國の鍵を奪ひて、平等に一般の信者に與へしは、宗教海の成熟して、既に一人の祭司に依るを要せさるを觀たればなり。ベイコン、ニウトン等の先覺か、空漠捕捉すべからざる本躰より眞理を解きて、平等に見るべき實物に歸したるは、理學界の既に成熟して、復た夢幻的虛靈に滿足することを能はざるを感じたればなり。クロムエル、ミラボー等の巨擘が、帝王の主權を覆ひて、從來無一物なりし人民に附せしは、政治社會の成熟して、復た一個空名に服從するの時にあらざるを見たればなり。然して斯の如く革命せられたる平等社會、今や一轉して事實社會となり、盡く妄想空論を排斥して、事實を攻究し、歷史を推尋するの時代となれり。

世界も猶ほ人の如し

世界も猶ほ人の如し。幼年時代には神怪を好み、少年時代には空想

天上の曉星の如く新なる光輝を放てり

を好み、成熟しては事實を好む。夫の古文派は幼年時代の好尚に應して起れり。故に美を擧げて神怪に屬せり、然れども傳奇派は少年時代と共に來りて、古文派神怪の美を奪ひて其空想に移せり。然れども詩界は久しく既に神怪、空想に飽き、他の宗教界、理學界、政治界と共に、一たひ新まらんとを望むと、亦既に久しかりき。今や此成熟せる詩界の氣運を稟けて、痴愚なる神怪を葬り、興味なき空想を逐ひ、實在の人生、實在の生活、實在の人と自然を平等美觀の裡に擧げ、老廢したる天地の面目を一新して、大人時代のものとなすに非ずんば、人間復た生息するに堪へざるの危機に際せり。渠が出づる他の革命家に後れぬ。然れども他の長夜の夢を貪りて覺むることを知らざる滔々たる詩人に先ち、獨り天上の曉星の如く、新なる光輝を放ちて、眠れる詩界に天明を告げしものは、實にヲルヅヲルス

少年にしてバイロンを讀み、中年以後ヲルヅヲルスを讀む

其人となす。

ヲルヅヲルスの詩か一個人に於ける、亦猶ほ世界に於けるか如し。「少年にしてバイロンを讀み、中年以後ヲルヅヲルスを讀む」てふ詩界の通語之を盡せり。蓋し少年の空想も、神怪を喜ぶ兒童の爲には無味なるが如く、大人の生活も亦空想を喜ぶ少年の爲には無味なるを免れず。誠に英國詩界を渉獵し、セキスピアーに於て、「シーザー」、「ハムレット」の如き巨大幽玄の人情を觀、ミルトンに於て天地初發、上帝、鬼神の如き華麗崇高なる品題に接し、瑰麗流暢のポープ、燦爛目を奪ふスコットを經て、剴切痛快、山を動かし海を覆す的のバイロンを讀み、然る後來りてヲルヅヲルスに接するに、其の嘯咏する所は、徒らに身邊の村落、素屋、村童牧兒、及び平生目に見耳に聞き慣れたる普通の生活、田家の經營に止まり、何等の人目を聳動す

セキスピアー、ミルトンを以てするも我がチルヅチルスを奪ふ能はず

るものあるを見ず。夫の小兒の如き讀書社會が、萬口一齊に其零細無味を宣告せしも、洵に故なきにあらざるなり。

然れども讀者一たび生活を經て來り、再びチルヅチルスに對する時は、響の意味なかりしもの、今は一として天の秘密にあらざるはなく、其の零細摘むに足らざりしものは、一として滄海の遺珠ならざるはなく、其平生耳目に慣れて怪まざりし所のもの、一たび渠の崇高深妙の理想より出て來る時は、眼前の景も、新鮮なる初發の天地の如く、口頭の語も上帝鬼神の述懷の如く、一個の少女も巨大なる一個の野郎も、不思議なるとハムレットの如くと「シーザー」の如く、面前の野郎も、不思議なるとハムレットの如く、動もすれば最も平凡なる自個すらも、一個の幽玄躰と變し來るを覺ゆ。此時に當りては、セキスピアー、ミルトンを以てするも、復た我がチルヅチルスを奪ふ能はず。

渠の詩獨り讀者に無量の同情を表す

ミル及びチルヅチルスの詩

然して渠が詩の本色として、大に他と異なる所以は、他は皆讀者に要むるに無量の同情を以てすると同時に、渠の詩獨り讀者に對して無量の同情を表するにあり。渠は其苦しめるものを慰るの誓願に於て、著しく成就せるものにして、今日チルヅチルス信者の斯の如く多數なる所以は、主として之に由らずんばあらず。然して此派の代表者として最も有力なるものは、夫のヂョン、スチユアート、ミルに若くものはあらず。渠は其絶望煩悶の時に於て、チルヅチルスの詩に由て自ら慰めしとを、明かに其自傳の一節に特書して曰く、

「チルヅチルスの詩の、我が心質の良藥石たる所以は他なし、其の風眺する所、唯外界の美のみに止まらずして、美の刺激の下に惹起されし感情、思想を摘發するに由る。是れ我が久しく渴望する所なりき。渠が詩を讀む時は憐むべき自吾、卑吝なる慾望を離れて、普通

人間の相共にし、然も苦痛不幸と相關せざる默思の快樂、同感の快樂、想像の快樂中より酌む所あらしむ、渠か詩を讀む時は、生活の邪魔の除かれし後、無盡幸福の源は何なるやを學ばしむ。我は渠が詩の感化力の下にあるとに、一層善眞幸福なる人たるを覺ゆ」と。

渠は實に不思議の人なり

渠は實に、聖經の下に來らざりしミル其人の如き大哲學家をすらも慰籍せり。單に此一個の信者を以てするも、ヲルヅヲルスの名、天下を壓倒するに足る。

然して渠が詩の如何にして斯の如き感化力あるかを觀んとせば、須らく渠が人物の如何に感化力ありしかを見るべし。渠は實に不思議の人なり。渠は其身邊に來るものを捕へて、盡く自個のものとなせり。渠妹に觸るれば、妹は爲に身を献し、カルヴートに觸ればカルヴートは遺産を献じ、ビウモントは地を献し、ロンスデール伯は其盡力を致しぬ。渠は朝夕を謀らざる詩人の交際に於て、終までコレリッヂ、サウゼイ、スコットの歡情を完ふし、博士、學者、貴婦人等、其の遭遇する社會に於て終まで敎師たりき。渠は實に不思議の人なり、思ふに渠は其愛を以て他の愛を捕へ、其心を以て心を得、最も深き人性を以て、最も深き人性と謀り、最も高き神性を以て最も高き神性と默契したるものゝ如し。渠は詩人、渾身盡く是れ詩なりしなり。

渾身盡く是れ詩

自然の形を見すして其神を見き

然して渠が自然を觀るも、亦猶ほ人を觀るが如く、其形を見すして其の生命を觀たり。渠は人と自然を以て齊しく神の表象にして、神の秀靈なるもの、清淑なるもの、莊嚴なるもの、崇高なるもの、人に在り、自然に在り。然して其の人に在り自然に在るもの、互に相

感遇し、互に相啓發するとを觀たり。渠が爲には、自然は復た塊然無情の自然にあらずして、同情溢るゝ人の如し、其の平靜なる時、宛も默思の人の如く、其の聲ある時、言語する人の如くなりき。渠は其「詩人の碑」に於て云へるとあり。曰く、

渠は天地、
邱谷の外觀を見ぬ。
然して一層深き感懷、
閑居に渠を訪ひ來る。

其の水松樹蔭の坐に題して、不遇の隱者を弔するの詞に於て又云へり。曰く、

然して藪、雜榛、杜松、葛藟を以て
纏はれし、このみなき巖の上に

其の寂しき眼を渠は注きて、
憐なる滿足の意を養ふと多時、
實りなき自家生涯の表象（エムブレム）を索めつゝ。

蓋し自然の生命なきと久しかりき。古文派は之を以て神靈の栖む處、人の足を以て汚すべからざる靈場とし、傳奇派は之を以て戰鬪、狩獵、行樂の舞臺とせり。殊にポープの人爲的趣味より後、自然を見るとを書を見るが見く、多く書かずして巧に書きたるコリンスも、バイロンが自然詩人として許す所のクラッビーも、ポープ宗に逆ひて天眞を唱道したるクーパーも、ヲルヅヲルスの先輩たる田園詩人バーンスも、殊に渠が同時代にして、渠より大なりとせられし自然詩人スコットも、亦皆書を見るの眼を以て自然を見たり。時としてはバーンスの如く、自然を假りて人情を洩すの好伴侶となし、クーパー

の如く、之を以て神の智能の證跡とする者なきにあらざりしと雖、此時に在つても、自然は依然死してありき。此死せる自然を活し、新なる生命を與へて、以て人の友、人生の伴侶、神の彰表と作せしものは、實に我がヲルヅヲルスより始まれり。渠は眞成に人の牧師、眞成に自然の牧師。

渠は眞成に人の牧師、渠は眞成に自然の牧師

獨り怪む英國の讀詩社會が、自然詩人として、ヲルヅヲルスとスコットとの眞價を甄別すると能はず。動もすれば同一視するの傾向あるを、スコットはヲルヅヲルスが云へる如く、目錄的詩人たるに過ぎざりき。渠は筆と手帖とを携へ、見聞するに隨つて筆記し、目錄を書くが如く、文字を排列するの詩人に過ぎざりき。斯の如くして成る所の詩、積んで萬卷を成すと雖、詩歌的眞理に達すへからず、渠は最も造詣する所に於て、地理的眞理に達すれば足れり。看よ渠の

ヲルヅヲルスとスコットとヲルヅヲルス

目錄的詩人

務めし所如何に地理的眞理なりし乎を。然れどもヲルヅヲルスは既にビウモントを啓くに、美術家の須らく自然の神と心會せざるべからざるとを以てし、スコットに諷するに筆と手帖とを棄て、心を虛くして自然に對し、眞詩筆を以て、その特質の美、偶然の美を判別すべきとを以てせるが如く、初めよりスコットと品類を異にし、詩歌的眞理眼を具したる眞詩人なりき。見よ均しく湖上の靜觀を說くに當り、スコットは唯云ふ、

スコットの湖上の靜觀

渠は起ちて清き月光を覓めたり。
野生薔薇、芳草、及び金雀花、
其馥郁たる香氣を四邊に匂はせ、
樺樹は其馨香の中に涕涙し、
白楊は平和の下に眠り、

銀光の瞬く眼は、
靜かなる水面に遊べり。
斯の如き沈靜なる光輝の下にも、
猶ほ激するが如き人情は俗なり」と。

ヲルヅヲルスは即ち曰く、
「最上の佳節は、秋分の風正に過ぎたる時にあり。處々折れたる枯枝、散り布く落葉、風威の如何に烈しかりしやを示すの外、空氣は一髮だに動かさず、一點の蟲も目を遮るなく、目に見、耳に聞く所のもの、一として安定の意を語らざるなく、唯時々歸雲の靜かに湖心を亘り、遠く湖畔を過る旅客の、知らず識らず時の寂寥に融化せられて、徐ろに其倒影を伴ひゆき、若くは一點兩點の黑子、湖心の雲影を截る間、烏鷺の聲、空中より落つるのみあり、觀るものをして如

ヲルヅヲルスの湖上の靜觀

何なる人生の喧嘩を以てするも、自然の平靜を奪ふ能はざるとを感せしむ」と。

スコットの靜觀は、僅かに目錄の如く列記したる自然の形に止るも、ヲルヅヲルスの靜觀は深く自然の心に入り、如何なる自然も之より深き平和を顯はすこと能はざるを見る。其の天才の高下、詩眼の眞否、少しく自然を識るもの、一日了解する所、然して夫の自らヲルヅヲルス信者と誇稱する輩の獨り撰擇に惑へるものは何ぞや。ヲルヅヲルス信者天下に多しと雖、眞知己果して幾人かある。渠等がヲルヅヲルスを誤解するとき、獨り之に止まらず、渠等は是より大なる誤解をなせり。

渠は人生の詩人なり

渠は人生の詩人なり、渠が畢生の本領は人生生活の批評に在り。渠は既に人を觀、自然を觀るに德義觀を以てし、然して此兩樣德義的

表象の相煥發する所を稱して、最も高尚なる生活となせり。渠は人性を論じて謂へり、適當に家庭の愛に涵養せられ、適當に自然の感化力に感化せられば、人の德義的の物たるに於て、多く書籍の知識を要せすと。是れ渠が人生觀なり。是れ渠が七卷の詩集を一貫する所の詩理なり。批評家マシユーアルノルドは曰く、「人生は詩人の最大疑問、人生の批評は詩人の最大事業なり。古來大家の大なる所以は、未だ嘗て人生を謳歌するに由らずんばあらず。詩人としてのヲルヅヲルスの位次の、遙かに、ポルテア、ドライデン、ポープ、レツシング、シユレル、ハイテ、ユゴー、等諸大家の上にあり、優にセキスピアー、モリエル、ミルトン、ゲオーテ、の如き不世出の詩傑の班中にあるものは、其の人生觀の高且つ崇なるに由らずんばあらず」と。

セキスピアー、モリエル、ミルトン、ゲオーテ及ひヲルヅヲルス

然れども渠等は、ヲルヅヲルスか美しきドロセアに導びかれしにも拘らず、哲學者の如く議論するの性質ありしが故に、渠を目して哲理的思想家となし、「逍遙遊」を以て、哲理的思想の產物とし、之を以てミルトンの「失樂園」に比せり。渠等は曰く、ヲルヅヲルスの詩は句々哲理なるか故に誦すべし。曰く、渠が詩は哲理の深きが故に尊ぶべし。曰く渠が思想は能く理學的組織を得たりと。

蓋し哲理的眼孔を以て觀る時は、詩人は固より哲理家にして、詩も亦哲理にあらざるはなし、此點より觀る時は、渠も亦一大哲理家にして、其人生觀も亦幽玄なる哲理ならずんばあらず。然れども詩人が哲理家と異なる所以は、詩人は哲理を講せず、詩人は哲理を歌ふにあり。哲理家は徒らに空論を追ふ、其中に事實なきなり。詩人は事實を歌ふ、哲理其中にあり。渠は其「逍遙遊」に於て哲理を論じ、他の小詩に於て人生を歌へり。渠の哲理は夢にして、渠か詩は現なり、

渠が哲理は一時にして渠が詩は千歳無窮

渠が哲理は一時にして、渠が詩は千歳無窮なり。詩人たる渠を誘ひて、哲理家の班中に立たしむるは、恰も巖上の教會を轉じて、沙上に移すが如し。徒らに渠を僵すに過ぎず。

有名なる「小兒は大人の父なり」の句に於ても、吾人は既に幽妙なる詩歌的眞理を味へり。然して渠等は之を解て、プレトーの靈魂天降説を翻し得たりとするが如き、是れ無用の出處を告げて、呑みたる美果を吐き出さしめんとするものに過ぎず。渠はかの人口に膾炙する「悟道行」に於て、明かに小兒の天降を歌へりと雖も、是は是、彼は彼、相通解するを要せず。吾人は解釋の自由を有せり。吾人が新鮮なる詩歌的眞理を以て渠が詩を解釋するに當り。夫の憐むべき陳腐の哲理、吾人に於て何かあらむ。

吾人は解釋の自由を有せり哲理我に何か有らん

然れども余をして自由に言はんと欲する所を云はしめば、余は獨り渠が哲理を棄つるのみならず、其人生の理想すらも抛ち去り、直ちに余が無意識を以て渠が無意識に對せんとを欲するものなり。何となれば詩は第一義に於て、無意識即ち天才の產物にして、哲理と云ふも、理想と云ふも、唯天才の幫助者たるに過ぎざればなり。渠が富瞻なる遺稿の中、マシユー、アルノルドが云へる如く、渠が詩と稱すべからざるほどの惡詩、過半以上に及べりと雖、是れ殊に狹隘なる舊趣味を打ち破りて、新天地を截開したる、新詩人に伴ふ、普通の欠點にして、恰も久しく牢獄に在りし囚人が、忽然此世界に出で來りて、樂土の觀を爲すが如く、其間美醜を甄別するの暇なかりしに因る。渠が革新詩人たるを反證するもの、未だ嘗て此の欠點にあらずんばあらず。渠又曰く、ヲルヅヲルスの眞價は、詩篇にあらずして詩撰にあり、詩撰即ち渠が人生の詩なればなり。若し個々の詩

渠が天才

篇を以てする時は、必ずしもグレイ、バーンス、コレリッヂ、キーツ、ハイネ等の上にあらずと。嗚呼是れヲルヅヲルスの理想渠等に勝りて、天才却て渠等に如かずと云ふものなり。恐らくは是れ渠等の詩、凡て、其一篇に盡せる間に、渠の詩體の太簡にして、一題一事の外、多岐に亘る所なきよりして、此の如き説を生じたるべしと雖、然れども余は未だ服する能はず。

余は余が所見、果して詩界の公論なるや否を知らずと雖、感ずる所を盡さずんば止む能はず。

セキスピアー、ミルトンの如き、余は敢て言はず。グレイ、キーツ班の詩人と雖、誰か大家に非ずとせん哉。誰が不朽の詩人たるを疑はん哉。將た又た誰か流讀して、以て感懷を遣るに足らざらん哉。然れども余は敢て曰ふ、渠等は余が眞知己にあらずと。渠等は我を誘

渠等は余が眞知己にあらず

ふて、世異に、時異に、遠く我が知らざる國に導びく。其の地美ならざるに非ず、然れども余が嘗て知らざる地なり。其人親しむべからざるにあらず、然れども余が嘗て知らざる人なり。余豈其地に對して快感なからん哉。其人に對して同情なからん哉。然れども、多くは唯書中の景色、人物に對して、快呼し同感するのみにして、卷を掩へは忽ち其自然と人とを失ふと、恰も眼を過る雲烟の如きを覺ゆ。蓋し餘情と云ふものは、其詩人の記憶の緒を摘み出し、卷中の詩既に盡くるも、記憶の詩猶ほ盡ざるよりして生ずるものなりと雖、渠等の詩は、文字と共に盡き去つて、何物の存ずるなく、其同情の涙、徒らに費されたるを疑はしむるもの少なしとせず。

然れども、一たびヲルヅヲルスを讀む時は、遠く異鄉に流轉せる余をして、忽然として故鄉に歸り、余が懷しき自然と、余が相知る鄉

黨朋友の中に安息せしむ。見よ其の雪中母を尋ねて、途を失ひし可憐の孝兒、豈に獨りルーシー、グレイのみならん哉。其の一たび世に誘はれて、復た還らざる山中の少年、豈獨りリウクのみならん哉。朝夕林前に出て來りて、鳴鳴烏啼と應答するもの、新衣を衣て袖を振ひ、得々其友に誇るもの、豈獨り湖國の童男童女のみならん哉。祖先の牧業を失はんとを恐れ、岌々乎として老の至らんとするを知らざるミカエル、壯くして數十里の山壑を狩り盡し、老ては一株の枯木すら拔く力なきシモンリー、何の處にか之なからん哉。其他愛せし小女を喪ひ、時々にして涙くむ好々翁のマシュー、母を家庭に喪ひて、獨り自然に養はれし後、暫く人に誘はれて人に棄てられ、遂に復た自然に救はれたる、不遇の少女ルスの如き、端もなく緒もなく、無心に歌ひて一人野に苅るハイランド處女の如き、身躰萎痺して歩けども猶ほ佇めるが如く、蟻にだにも後るゝ乞翁の如き、是れ皆身邊、何れの處に於て乎見、何れの處に於ても見る所にして、皆盡く我が故郷の人なり。其の一半は、渠自身にも告白せる如く、天質ならぬ習癖より捕へ來れるものなりと雖、然れども一たび渠が筆に入る時は、形容躍々として出て來るを奈何せん。

然して其自然を歌ふ時に於て亦最も然るを見る。余は始めて「宇宙の感化力」、及び「チンテルン精舍」、「水松樹下の坐」の諸篇を讀むに當り、余は告白す、何の待ち設くる所なかりしとを、然るに流讀すること數行、「日既に暮れて數里の中猶ほ見るべし」、若くは「潛かに樹間より出づる烟」、若くは「渠は愈久うして愈愛すべく、其心此の美に優るの美に勝ふる能はざるまで瞻望す」等の如き辭句に會するや、眼下忽ち雲烟を生じ、故山の景色髣髴として來り浮び、蓬勃として紙上を遮ぎ

り、復た讀む能はざらしめぬ。是に於て書を掩ひ、目を瞑ち、記憶中の自然、一景一景心眼の中に卷叙し去り、久うして山泉胸中に流れ盡き、餘韻全く兩耳より遠かるを待ち、然る後徐ろに詩卷に對せり。然れども須臾にして又他の相識の景色に逢ひ、忽ち又未だ聯觀し及ばざりし景色を聯觀し、一篇一篇、故鄉の幻姿を涉獵し盡さずんば目を進むると能はざらしめぬ。斯くして僅に二三の短篇を誦するため、殆ど半日を費し、誦し了りては、天涯孤客の余をして歸思射るか如くならしめぬ。靈なる哉詩人の筆。

蓋し余より見る時は、渠等は多く美を遠方に置き、ヲルヅヲルスは獨り美を身邊に置き、渠等は多く虛美を示せるも、ヲルヅヲルス獨り現實の美を書くを觀る。渠は既に現實派の主唱者なるも、詩は即ち別才なり。渠は如何にして其詩を作るやを知れりと雖、渠が詩を作りしは天才なりき。渠が其の不思議なる筆を以て、小兒を畫きて、シーザーの如く巨大ならしめ、村童を畫きてハムレットの如く幽玄ならしめ、健牧夫を寫せば、健牧夫を寫し出し、好々翁を寫せば、好々翁を寫し盡し、烟を寫せば烟を顯はし、雲を寫せば雲を浮べ、山を寫せば山、湖を寫せば湖、讀者をして前後を索搜し、身邊を回顧して應接に暇なからしめ、然して準備なき自個をすらも、知らず識らず詩卷中のものたらしむるものに至りては、是れ天才の魔術にあらずして何ぞや。

其れ斯の如くして猶ほ一篇のグレイ以上のものなく、一篇のコレリッヂ以上のものなしと云ふ、是れ余か信ずる能はざる所。

然して又ヲルヅヲルスが、獨り重きを「逍遙遊」に置き、他の短篇を輕しとするものは、「逍遙遊」は其意識的の作、其十二年の苦心を識り、

セキスピアー戯曲に於て成せし所のもの

チルヅチルスは其小叙情詩に於て之を成せり

其畢生の歴史を識り、其哲理を識れるも、他は皆壯年無意識の作、アルノルドが謂ゆる、自然の渠が爲に書きし所のものなればなり。

「逍遙遊」を讀む時は、時として非常なる自然の美を感ずるとあるも、其哲理、其人生觀は、夫の目に入らむとする飛虫の如く、絶えず眉間に纏綿するを見る。然れども他の「兄弟七人」、「ルーシー、グレイ」の如き、「ミカエル」、「泉」(スパウンティン)、「チンテルン精舍」の如き短篇を讀む時は、超然として哲理以上、人生以上に遊ばしむ、是れ豈に幽玄の境なるならん乎。

ミスター、マイエル云へるあり曰く、「セキスピアー以後、英國農夫の活畫を殘せるもの、ヲルヅヲルスに如くものなし」と。余は敢て一歩を進めて曰はん、「セキスピアーが戯曲に於て成せし所のものを、ヲルヅヲルスは其小叙情詩に於て成せり」と。

其他渠が詩語、稍節奏を缺けりと雖、其の意味と、文字の一致した

逍遙游了りて革命の業了れり

チルヅチルスの天オ夕に向ふ

「夕の歌」

る、其新鮮にして殆と露を帶びたるが如き、是れ渠か文語を用ひたるの結果なり。

「逍遙遊」成りて革命の業了れり。千八百十五年、渠は猶ほ「ライルストンの白鹿」を書きたるも、然れども渠は夫の大作の爲めに、滿張した る詩絃既に斷絶し、健全なりし節奏漸く萎靡せるを看出せり。痛ましくも渠か天才は今、其既に革命したりし古文派の領分に於て、光焰を維持せんとを務めたり。千八百十四年より千八百十六年まで、渠か詩眼は古代希臘に還りて、トロイの役に其夫を喪ひたる女王ラオダミア、公益の爲に甘して其血を流したる、プレトーの高足弟子ダイオンを賦し、ヴージルのイーニードを譯せり。詞藻莊麗ならさるにあらすと雖、其光焰は既に夕日の色を帶へり。千八百十六年、「感謝行」、晩鐘の如く殘日を擣ち落し、速かに千八百十八年に於ての「夕

の歌」を來せり。

我をして回想せしめよ、
一たひ失ひて空しく悔る所の光を、
其光は今不思議にも回復せられて、
我か心の眼に照る樣見えたり。
……
止ぬる哉幻の如き莊嚴は消え、
夜は其影を以て近つき來れり。

サウゼイの生涯とチルヅチルスの生涯

詩人正記

第六　革命詩人及ひ讀詩社會

チルヅチルスは書く爲に、グラスミール谷に居り、活くる爲にライダル邱に栖めり。渠は其友サウゼイと其生涯を較へて曰へり、サウゼイは恒に身を以て法王に擬し、其平居を以て無盡の書庫を具したる寺院の住職に比せり。讀書は渠の情欲にして、逍遙は我か生涯なり。然して我か不如意の運命の爲に掣肘せられしは、寧ろ幸福と云ふへかりきと。渠一たひエスエイト湖畔の晩歩者として顯れしより、千七百九十年大學の夏暇に於て瑞西に遊ひ、千七百九十一年の冬より翌年の冬まて、滿一年間佛蘭西に遊ひ、千八百三年始めて蘇格蘭に遊ひ、千八百十四年再ひ蘇格蘭に遊へり。是れ嚮に既に説く所な

り。

千八百二十年、渠年既に五十、老いんとして益壯に、其妻、妹、及ひ二三の朋友を携へ、再ひ瑞西より伊太利に遊へり。此行詩を得ること最も多く、其詩亦往々神來の候なきにあらすと雖も、然れとも概して苦心の痕迹を存し、自然に出つるもの少く、僅かに其有る所の佳處と雖、亦多くは舊作の佳處を繰返せしに過さりき。蓋し詩人自ら、今の放浪、詩の爲にあらすして、放浪の爲なるとを期せしならん。

千八百二十三年、西の方和蘭に遊ひ、明年北の方威爾西に遊ひ、又四年にしてコレリッヂと共に、西の方ベルヂヤムに遊ひ、明年其友マーシヤルと共に愛蘭を廻れり。到る處亦詩ありき。

千八百三十一年、渠か齡六十二、頭漸く白からんとするの日、愛孃

ドラを携へて、三たひ蘇格蘭に遊ひ、例に仍つてスコットを訪へり。渠等か到りしは日の夕なりき、十七年前、榮華を極めたりしアボツト城は、今如何はかり變りてあるや。當時車馬斯の如く陳列したりし園囿、車轍、馬跡斯の如く地に滿ちたりし門前、今は盡く雜艸の生する處となれり。顏色日の如く輝きたりしスコットも、不運なる失敗のため、連歲血を吐く著作の後、神氣喪亡、形容枯槁、殆と隔世の人の如く、僅かに短かき閑日月を得て、健康回復のため、伊太利行を思ひ立てる處なりき。渠は慇懃にヲルヅヲルス父子を迎へたるも、嘗て夜猶ほ晝の如く照したる萬丈の光焰は今何くにかある、綺羅星の如くなりし賓客。樂器を夾むて均しく歌ひしリッヂル夫妻、琴を取りて古歌を彈ぜしロカード夫人、椅子の背に隱れ顯はれ、落語的に稗史を語り且つ躍りしミスターランは今何くかにある。渠等

は皆幽靈の如く、一時に出て、一時に消ゑ、歡樂去つて哀情多く、當年無冠の帝王をして、悄然として獨り空城の中に老いしめぬ。

明る朝、スコットは強て自ら勵まし、賓客をヤローに導けり。ヲルヅヲルスの「ヤロー再訪」は即ち當時の記念なりき。是より先渠は最初の漫遊に於て「ヤローを訪はず」を賦し、次に「ヤローを訪ふ」を賦せしが、是に至りてヤローを終れり、歸り來れる夕、遙かにアボット城に向へる、ト井ード川を渡らむとして、ヲルヅヲルスは頭を回し、エイドン邱に留まる夕日の、陰沈として黃色を帶び、漸くに人目より消えむとするを見、慨然として、スコットの復た此川を渡ると無らむとを感想し、渠かテーブル行を送るの絶句を賦して、以て其衰へたるを嘆しき。

スコット復た此川を渡らさらん

次の日の朝、スコットはヲルヅヲルスと閑談すること數刻、自ら曰ふ、「幸福なりし生涯に滿足す」と、朝餐の前、渠はヲルヅヲルス孃の書畫帖に數章の詩を錄し、ヲルヅヲルスの前に於て、之を孃に返して云へり。「我は御身の父の故にあらずんば、復た此種の依賴に應ぜざりき。これ恐くは我が書く所の最後の詩句ならむ」と。詩の一句は句を成さず、其一章は押韻を誤り、名を記するに、最初の頭文字を遺せり、渠は終に近けり、ヲルヅヲルスは渠が赴く伊太利の風土、其懷古的趣味の、速かに渠が健康を復すべき希望を告げ、スコットは深甚痛歎の音を以て其情を謝しつ、地上に於ける兩個の詩人は、茲に永久の訣別を叙へたり。

ヲルヅヲルス、スコットと永訣せり

スコットは既に潮の如く去りてありき

千八百三十三年、渠が四たび蘇格蘭を訪ひし時は、スコットは既に潮の如く去つてありき。其後四年、渠は猶ほ朋友ミスター、クラッブ、ロビンソンと同伴して、三たび伊太利に遊び、最も長く淹留し、少か

最後の漫

らさる詩を得たり。渠等がラベルナに來りし時、同伴クラッブが、渠に先ちて兩度郭公を聞きたるとを語りし時、渠は徒らに歡喜の手を拍ち、「我も聞けり、我も聞けり」と呼び出でぬ、嗚呼是れ渠が最後の漫遊なりき。

一百餘篇の宗教絶句

然れども渠は少しも休息の意なく、閑中に在りては亦閑中の經營ありき。千八百二十一年以後、渠は靜かに英國に於ける宗教上の沿革を尋ねて、宗教絶句一百餘篇を修めたり。是は固より詩として云ふべきもの少なしと雖、然れども此種の著作に於て遠く先輩に超絶し、ヲルヅヲルス信者が稱して以て、哲理家の宗教と宗教家の宗教とを拍合せりと云ふ所のものなり。

政治論の變遷

年の遇むに從ひ、最も著しき變遷を顯したるものは其政治論なりき。蓋し青年は未來の希望に活き、老年は過去の追懷に生くるが故に、

チルヅチルス保守主義

青年は常に進歩黨にして、老年は常に保守黨なる習あるか上に、佛國革命の厭惡すへき記憶は遂に其初心を翻さしめぬ。渠は人に語りて曰く、「若し我が政治論にして、些少の變遷を受けざりしならば、我は殆と目的なしに活くべき不幸に陷りしならん」と。然して其變遷の由つて來る所、普通の變節政治家に於ての如く、一朝一夕の故にあらずして、其齡に伴ふ思慮精神の自然の傾向に出づるを見れば、渠が德を累はすもの少かりしなり。

然してチルヅチルスが、晩年其保守主義を執るの堅實なると、猶ほ其壯年、進歩主義を執るの堅實なりしが如くにして、然して渠が最も深く心を痛めしものは、教育上の改革なりき。渠は湖國の民の、平和世界の幸福を享け、村落生涯に滿足するを見て、謂へらく、人は適當に自然の感化力を感受し、適當に家庭の愛に素養せらるゝ時

教育上改革に反對す

は、之に少數有益なる書冊の智識を加ふるのみにて、既に豐かに德義の人たるとを得と。故に渠自身熱心なる教育論者なるにも拘らず、千八百二十年に於て、マドラス組織と稱する教育上の新案出て、一層便宜の方法を以て、一層完全なる智識を、一層廣濶なる版圖に普及せんとするや、渠は、未來の山民を其の家庭より奪ひ、其の情慾を自然より誘ふもの、遂に此のマドラス組織なるへきを看、絶叫して曰く、「スパルタ人が家族帶を輕したるは、家庭に代ふべき國家と云ふものあればなり。此新法は、目的なくして、家庭の羈を截つものなり」と。斯くてコレリッヂが、天使軍を以て天に迎へらるべしと迄て稱讃したる新法の發案者博士ベルも、渠が爲には、マラー、ロベスピーア以後、最も憎むへき名なりしなり。

進歩の時勢と老翁

渠は猶ほ千八百三十年前後に於ての、政治社會の大問題たりし、舊教徒解放案に對し、議院改革案に對し、新貧民法に對して、同一の熱心を以て反對を試みたり。然れども渠は今漸くに老いぬ、千八百三十二年、渠は其一友に書き贈りて曰く、「我が六十三年は直ちに既に滿んとし、然して余が惠まれたる健康、氣力、猶ほ我が同年の友に超絶せりと雖、精神上に於ては、既に老境を感せずんばあらず。昔は我能く理解力の上にありき、今は我理解力の下に沈めるを覺ゆ」と。渠既に自ら其老たるを感せりと雖、猶ほ未だ其の休むべきを感せざりき。一方には其讀む所漸く少に、其見聞する所亦限られ、其情既に新方向に向ふとを好まず、其心亦決して新智識を吸ふを欲せざる同時に、一方には其嘗て見、聞き、識りたる所、漸く古く漸く過きんとするにも拘らず、渠は猶ほ世と絶つと能はず、其の平生最も憎むて、亦最も歡迎せらるゝ、製造家若くは改革派議員家に招聘せら

渠の絶筆

ライダル山の不幸

る丶毎に、諄々として製造事業、議院改革の無殘なる破壞道具たるとを說きたり。然して世の今渠を擲ち去りつゝあるとを、渠の始めて感ぜし時、如何なる沈痛なる悲觀か、渠の筆を絶ちしものぞ。

この苦樂の大世界にして、
果して一條の軌道を轉るものならんには。
一たび眠りし自由のまた復活し、
一たび去りし德義の再び歸り來るとあらんには。
日日の累を以て其情を滿せる
近眼者流は禍なる哉。

渠は世界を奪はれたり。然して亦詩と別れたり、渠は今天地の一閑人としてライダルの閑居に歸り來れり。然して閑居に於て受けし運命の酷遇、更に酷甚なりしなり。

ドロセア孃憐す

千八百三十二年、渠が詩神の半體なりけるドロセア孃は、激しき病症を得、數ヶ月の間殆んど昏倒の樣なりしが、病症全く去りし時、渠が精神痛くも傷み、其爽快なりし心の空は、終まで曇り了れり。彼は嚮にグラスミール閑居の日記、蘇國漫遊紀行、及び諸湖の紀勝を著せり。皆ヲルヅヲルスの詩集と共に世に行はれぬ。就中諸湖の紀勝の如きは、自然の情人をしてサウゼイの湖記、グレイのカムバーランド州の記事よりも愛讀せしむ。彼の作なる「母の歸り」以外二篇の小詩、載せてヲルヅヲルス全集中にあり、亦讀まれぬ。

渠が世に於て有ちたる、唯一人の益友コレリッヂが、臨終に近きたるも亦此時なりしなり。渠は殆ど四十年の心交、漸く零落し盡んとするを見、深く感傷して曰く「渠及び我が妹、是れ我が詩の最も負ふ所多き二人なり。然して今や病の途を經て、幸福なる無窮に向へり、

コレリッヂは幸福なる無窮に向ひき

我は敢て墳墓と云はず」と。

千八百三十四年、コレリッヂは幸福なる無窮に向ひき。自家以外に詩人なく、スコット、サウゼイの徒は有れども猶ほ無きが如く、バイロン、セレイ、キーツは初より讀みたるとなきヲルヅヲルスをして、啻に詩人と許さしめしのみならず、自家の詩の理想の聽者として始めより畏服し、殊に人物として最も異常なる人と稱せしめたるものは其同時代に於て、獨りコレリッヂ其人ありしのみ。然して其の新舊派を異にしたるにも拘らず、猶ほ能くヲルヅヲルスの特質を發揮し、此等の句、アラビヤの沙漠に於て相見るも、猶ほヲルヅヲルスと叫ばしむ」と稱揚して、以て隱れたる渠が名を世に紹介し、殊に渠が世の冷笑の的物たりし間に在て、獨り大家たり新詩人たるものゝ、須らく新趣味を敎ふべきことを告げ、隱然革命詩人を皷吹せしが如き、

此等の句アラビヤの沙漠に於て相見るもヲルヅヲルスと叫ばしむ

ヲルヅヲルスが永久、コレリッヂに負ふ所となす。

コレリッヂの沒後二年、久しくヲルヅヲルスの家庭の伴侶として、ヲルヅヲルスもコレリッヂも均しく尊敎したる、ヲルヅヲルス夫人の妹なりけるサラ、ハッチンソンも亦、千八百三十六年に身歿れり。詩人夫妻が、彼をグラスミール寺院に葬りし時、彼が今其兩兒の側に臥するが如く、夫妻も亦遠からず彼が傍に臥すべきの願を其墓碣の上に記しぬ。

今やライダル山上の大陽系一星一星零落しつゝありし間に、ライダル山を環りて、名譽の一大國、俄然として開かれり、千八百三十年より、千八百四十年まで、十年の間に於て、ヲルヅヲルスは山間の隱君子より、英國文壇の最大文豪に移されぬ。是は他の著名なる珍事の起りし故にあらす、破天荒の大作の出しと云ふにもあらす、是

ヲルヅヲルスと讀詩社會

渠は蒔きたる種子より苅れり

は正に革命の詩人か、當然受くへきの報酬、播きたる種子より苅るものに過きさりしなり。渠は不幸にして、革命事業の謳歌軍なる青年社會の中、得る所の知己少數なりしも多數を敎へぬ。然して渠の始めて、叙情詩集第一卷を出せしより、今は殆と四十餘年、舊派の詩人にして渠か敵國たりしもの、セレイは千八百二十二年に死し、バイロンは千八百二十四年に死し、千八百三十二年以後、スコットとコレリッヂ相踵て逝き、纔に殘りしサウゼイは老い、ヲルヅヲルス攻擊軍の領袖、ゼフレイか統率したりし一派の批評家も、亦半は死し半は衰へ、獨りヲルヅヲルス崇拜者なりし四十年前少數の耳目、及ひ渠に敎へられたる全世界の青年、之に代りて唯一の勢力となり、一人ヲルヅヲルスを唱へて、天下響の如く應し、當年の讀書社會一轉して、ヲルヅヲルスの世界となれり。一たひ書架の下層に埋葬せられ

リード、エマーソン

たりし叙情詩集「逍遙游」到る處に注きて奔り、嚮に渠を誤りし風潮の過激なりし如く、反動の勢力も亦過激を極め、勢の到る處、バイロンを奪ひ、セレイを褫ひ、コレリッヂを僵し、キーツを抜き、スコットを逐ひ、サウゼイを掃き、半熟の社會にすらも、ヲルヅヲルスを投して過き、テニソン出て、其波瀾を回し、ヲルヅヲルスの名をして、ミルトンの平準に歸せしむるまでは、止まさりき。

然り然して是の反動の兆候は、米國に於ける渠か詩集の出版なりけり。蓋し英國文學は、米國文學の母なるか故に、米國文人か、屢英國文人の知已たるとは怪しむに足らす。是より先きフヒラデルフヰヤの敎授リードは、渠の稱讃者として、屢書簡を往復し、未來のコンコルドの君子エマーソンも亦千八百三十三年、渠をライダルの閑居に訪ひ、渠が詩に關する意見を聽きぬ。然して今回、渠が詩を米

米國に於ける叙情詩集の出版

オックスフホルド大學民法博士號をチルヅチルスに贈る

國讀詩社會に紹介するの勞を取りしものは、リード教授其人なりき。

ヲルヅヲルスは此の力ある知己に對して、其の米國より受けたる識認、渠が今日まで受けし最も感謝すべき識認なるとを告白するとを躊躇せざりき。

一にも則ちヲルヅヲルス。二にも則ちヲルヅヲルス。世はヲルヅヲルスの名に奔り、遂にオックスフホルド大學を動し、千八百三十九年の夏に於て、渠に贈るに民法博士の名譽學位を以てせしめぬ。贈位の日定められ、贈位の式擧げられぬ。其日敬虔なる應接の裡に、渠を其式場に伴ひたるは、詩科の教授ケブルなりき。ケブル教授の羅甸語演說に於て、ヲルヅヲルス賛辭の語中、「渠は情愛、作事、貧民の篤信の上に、天の光を照せり」の語あり、參觀者を感激せしめたると、エリントン公訪問の日以後、曾て見ざる所と云ふ。

三百磅の年金

詩職

名譽に名譽加はり、好運より好運生ぜり。千八百四十二年、英國國民は三百磅の年金の名を以て、其の敬意を此の老詩人に表せり。實に渠は此年まで、依然印紙配布の吏たりしなり。渠は茲に始めて、其職を長子ヂョンに讓り、始めて心よりの自然を得たり。時の首相ロバート、ピールは、其の年金贈呈の辭に於て曰り、「此の王室の恩寵を受くる爲に、君の自然に何等の率掣をも加へられず」と。居ること一年、其友サウゼイの歿するに由りて、詩職の空位、屐の如く、ヲルヅヲルスの足前に置かれぬ。然れども斯の名譽ある虛器も、渠が爲には要なかりき。渠は齡既に邁み、復た他の責任を負ふに堪へざる旨を以て之を辭せり。然れども首相ピールは之を聽さず、其授職の意、女王陛下が、當時絕倫の詩人に對して、當然尊敬を表するものにして、此高老なる詩人より、何等の義務をも徵するものに非ざる故

渠が天職認められぬ

に、速かに之を受くべき旨を牒せり。

革新詩人としての渠の天職は今認められぬ。渠は七十四歳の高齢を以て、始めて當然受くべきの月桂冠を受けたり。英國國民は今、詩職ありて以來、最も適當なる詩職を得たる名譽を有しぬ。

詩人後記

ヲルヅヲルス及ひ陶淵明

物質的破壞力

渠復た老を忘れて起てり

湖國と鐵道

井ンゾル宮中、舞踊會の夕に於て、白頭の老詩人、天女の如き少女王の御前に跪き、詩職授與の天恩を謝すへく、御手に接吻して退きしより、責任なき地位に於て、靜かに殘れる生涯を樂しむべきの時に當り、到る處の古村落を破壞し來れる物質的文明は、今や湖國に向ひ來り、鐵道を以て湖國を世と連絡せんとするに及びて、ヲルヅヲルスは止む能はず、湖國の保護者として、復た老を忘れて起てり。

鐵道を以て湖國と世とを連絡し、遊覽群波濤の如く寄せ來る時には、雜沓は自然の平和を破り、世は其の凡ての誘惑道具を携へ來り、村落は半市となり、農家は半逆旅とならずんば止まず。多望の少年は

湖國を破壞して得る所は何物ぞ

リウクの如く世に奪はれ、罪なき少女はルスの如く人に誘はれずんば止まず。凡ての物金錢を以て量られ、清貧は輕蔑せられ、德義生涯は價値無くなり、家庭の美風は家庭を去り、大凡湖國の人と、自然と、生活を擧げて、盡く地より奪却せずんば止まず。斯の如く湖國を湮滅して、得る所何物ぞ。

蓋し一般人民をして、自然に對する趣味を高からしめんとならば、渠等をして、其了解し得ざる所の美を瞥見せしめんよりは、自然の生氣を、自由に且つ不斷に感受せしむるに在り。故に渠等は湖國の自然を觀る前に、須らく先づ公園の美を觀ることを學ぶべきなり、湖國の自然に在つては、美が其特色たる如く、閑靜も亦其特色なるが故に、決して渠等が雜沓し來るを許さず。

渠等は漫りに保養と呼ぶ、然れども湖國は決して保養の地にあらず。

徒らに湖國を破壞の犧牲にするものなり

何となれば世の俗群が保養の爲に要する所は、繁華にあつて閑靜にあらざればなり。夫れ星夜の靜と、林間の寂、決して渠等が堪ふる所にあらず。

若し强て湖國を以て保養の地となす時は、渠等は其自然を獨占せんと欲するの俗慮を生ずるに到らずんば止まず、草深き牧場、露多き田園、朗かなる空、清く明かなる泉流、茂林、深樹、疎垣等、凡て共有の天園を以て一個人の私有に歸し、此の美はしき物を以て、不快憎惡の物となすに了らずんば止まざるに至らむ。

嗚呼是れ目的なく、得る所なく、徒らに湖國を破壞の犧牲にするものなり。夫れ斯く近き公道を行步するの勞を省くが爲め、千歲の自然を一朝にして盡滅せんとするは、酷たしき慘事ならずやと。

千八百四十四年、渠がケンダル及び井ンダミール湖間の鐵道布設を

非難したる兩篇の書簡の梗概は是なりき。然れども世は渠を省せざりき。鐵道布設の議は直ちに決せられ、鐵道は既に井ンダミール湖に向へり。

渠は歸去來を陶淵明の如く永く世と相辭しぬ

止ぬる哉、世をして世に從はしめよ、我老ひたり是より去らむ、渠は今にして世の爲なきを知り、始めて世と永訣しぬ。

ヲルヅヲルスと陶淵明

蓋しヲルヅヲルスの傳を讀むもの、渠か田園の詩人にして、超然として塵世の外に辷り、恒に逍遙として游ふを見、未だ嘗て夫の支那詩界に於ける田園詩人、陶淵明の隱逸生涯を追懷せすんはあらす。

ヲルヅヲルスに擬するに陶淵明を以て

我か讀詩社會の先輩にして、ヲルヅヲルスを終するもの、亦往々にして之あるを見る。今や我がヲルヅヲルスを終らんとするに臨み、渠を識る一層の明を加へむか爲め、兩個の詩人を對觀するも、無益の業にあらす。

其同しき處より是れは兩家殆と相同し、

若し其の同しき處より觀る時は、兩家殆と其の相同しきを見る。渠等は均しく自然の見なり。均しく俗韻に適ふの趣味なきなり。渠等は共に閑居すへき閑居を有し、共に自家の手に成る田園を有せり。渠等は共に貧に安居し、共に耦耕して菜蔬を食へり。渠等は同しく幾度か世に出てゝ、亦た幾度か世より退き、天を完して閑居に終れり。陶淵明が平和の人なりしか如く、ヲルヅヲルスも平和の人なりき。陶淵明が天眞を樂しみ、自然に任放せしが如く、ヲルヅヲルスも亦苦痛を容れさる樂境を懷ひき。若し唯其生涯の迹より見る時は、兩家は殆と名を異にしたる同一人の如きを觀る。

兩家正して相反對す其性情

然れとも少しく深く觀察する時は、其性情に於て、其の生活に於て、其天職に於て、兩家正しく眞反對に立てるを觀る。先つ其性情よりして觀れは、淵明の平和は天性より出て、ヲルヅヲ

ルスの平和は修練より來る。

淵明の平和、天性より出つるか故に、眼前國家の傾廢を見、自家晉室の元勳陶侃の後にして、名望既に世に信せられ、胸中亦幾分の經濟あるにも拘らず、少年の日既に能く志望を國家に絶ち、不平の根本なる意識を沒了し、身を以て自然に一任せり。渠亦時々仕へたりと雖も、其仕ふるや唯其平和を維持せんが爲のみ。然して渠が平和を愛するの念、其平和を維持する些細の羈束にすらも堪ふる能はず。毎々些細の口實を設けて歸り來り、然して其の歸り來るや、愉快心より溢れ、欣然として池魚故淵に返り、飛鳥舊林に復りたるの感なくんばあらざりき。然して其屢餓ゆるとあるも、耕して食ふに足れば、猶ほ心を安ずるに足り、五個の兒子の皆爲す無きも、杯中の物を進むれば亦以て自ら煩悶を遣るに足りき。實を云へば、渠は意識

沒却し得ず、身世の不平勃々懷を衝て出で來り、壎の酒も一片の心を潤すに足らざるに當りては、渠が平和は屢破烈せられたりと雖、然れども意氣倏忽、龍蛇の如く過了せし後、胸宇未だ嘗て一團の和氣なくんばあらざりき。

ヲルヅヲルスは則ち然らず、渠は極めて熱情の人なりき、渠が胸は常に炎え、渠が情は絶えず湧涌してありき。渠が僧たらざりしは之が爲、其軍人生涯を喜びしも之が爲、其自由の鼓に擊たれしも之が爲、兄弟を喪ひて殆んど天を怨みたるも、二兒を喪ひて其家に留まると能はざりしも、一として之が爲ならざるはなかりき。渠が友の一人は渠が六十九の老年を評して曰く、「不思議なる哉此大人の心狀や、其感情と愛着心と、今も猶ほ怖るべく強きなり。其の智識の力今一分にても弱くんば、渠は疾く其感情の爲に滅さるべかりき」と。

實に渠は陶淵明の平和を直覺頓悟するが如きにあらず、緻密なる論理を以て、追尋推窮の後、始めて之を得るの人なると、余は嚮に既に十分之を說けりと思ふ。

二家の特質相反すると斯の如く。然して其相反する二家の特質の擇むて執りし所の生活、亦如何に相反應したるかを見よ。淵明の生活は生活なきの生活にして、ヲルヅヲルスの生活は神聖なる生活なりしなり。

何をか生活なきの生活と云ふ、曰く、責任なきの生活是なり。何をか責任なきの生活と云ふ、曰く、天職なきの生活是なり。淵明既に國家と絶てり、啻に公僕として心を役せざるのみならず、其形を勞して貢を納るゝ國民たるにもあらざりしなり、渠は謂ゆる我耕して食ひ、我鑿ちて飲む、負ふ所なきの民なりしなり。然して當時國家

と絶つことは、其一分子たる、家庭とすらも絶つものなりしが故に、渠は既に世のものならず、渠は純乎たる天民にして、唯天に負ふ所あるのみなりき。渠が心謂へらく、天の我を道なきの世に生せしは、是れ天既に世と我を絶つなり。我は憐れなる夷齊の如く、歸すべき所なきものなり。唯天既に我を生せり。亦必ず我を活かさんと。渠が餓寒溫飽を以て、甘して天道の自然に一任せしものは、素心茲に在りし故のみ。是故に渠が爲には窮畊も恥づるに足らず。窮畊して給らざる時は、辭を拙して食を乞ふも。厭ふに足らず、九十にして行々索を帶するも、酣醉して誤謬を生ずるも、渠が爲には毫も不面目ならざりき。渠は天の赤子にして、天は渠の父なりき。渠が命は天に懸りき、苟も渠を訴るものあるも、天先づ其訴を受くべかりしなり。

然れども、ヲルヅヲルスは則ち然らず。渠が爲に生活は神聖なりき渠は詩人として世に遺はされたり。渠は詩人として生活せざるべからず。渠既に人生の詩人として、人生を觀するに德義觀を以てせり。渠は須らく模範生活を示さゞるべからざりき。貧は決して不德にあらず。貧も亦一個の生活にして、嚴肅崇高なる生活は、寧ろ貧の中にあるを覺ゆ。然れども、日常必需の物を欠くは、是れ既に貧にあらず。是れ既に缺けたる生活なり。然して飢餓に至りては最早、貧にも生活にもあらざるなり。渠は如何なる道理を以てするも、陶淵明の如く餓へて食を乞ふべきにあらず。如何なる境遇に際すと雖も、亦淵明が如く酒を蒙りて自ら任放すべきにあらず。渠はゴールドスミスの如く、決して無責任の借金を爲すべからず。渠は又コレリッヂの如く、其家庭の義務を忘却すべからず。渠が立つ所の位置斯の如

し、吾人をして其實際を讀ましめよ。

渠はカルヴートの遺產を以て其の生活を初め、其の遺產の盡きんとするに當りロンスデール家よりの返金を得、其返金の盡きんとする時、印紙配布の好位地を得、其老いて休せんとするに當りては又政府よりの年金を受けたり。渠が生活の迹より觀る時は、天授の福運、羨望に堪へさるものありと雖、然れとも渠自身の境遇より云ふ時は、未た嘗て渠か生活の如く不安心、無希望の生活はあらす。何となれば、運命は必ずしも論理を成さず。カルヴートの遺贈の後、誰かロンスデール家の返金あるを知らん哉。ロンスデール家の返金の盡きんとする時、亦焉そ印紙配布の好位地の渠を待てるあるを知らん哉。渠か生活は恰も偶然故鄉を離れたる羈旅の、一歩一歩不安の地に陷み出て、時々逆旅を得ると雖、然も歸着する處を知らさるが如くな

り き。その一定の職業を得し迄は、渠か情常に生活に向ひて叫ひき。渠か兄弟ヂョンを思ふて止まず、兄弟の詩を賦して深く期する所あり、其の死するや、恰も身を殺れぬと叫ひしもの、嗟呼是れ渠か心の聲なりしなり。

然して其の一定の職業に安堵するに當りてや、渠は其清貧の生活を維持せんか爲に、如何ばかり苦心したるものとするそ。

千八百二十年、渠は自ら告白せり、其著作業より得たる所、其日まて僅かに百四十磅に過きずと。晩年にして詩職に上り、其一時の醜辱も、亦千歳の名を缺くに足らさる時に於て、渠は始めて其秘密を洩せり。「我は實に我著作の世に容られさるを痛心しき。我は屢々休息を得んか爲に書けり、然して亦同好の人を益せん望なくんはあらさりき。然れとも我は貧の爲にあらさるよりは、再ひ我か作を世に試みて、萬一を僥倖すへきに非さるとを信せさるへからさりき。我若し富める人なりしならば、「書簡」若くは「邊民」の悲曲の如き、必然原稿のまゝにして了るへかりき」と。

見るへし、生活の困難は、渠を駈りて、其處女の作にして、疾く火中にあるへかりし「邊民」の悲曲をすら、故紙袋中より取り出して、金錢に代へしめしとを、然して千八百十五年、ヲルヅヲルス嬢か其友に書きし手書を讀む時は、夫の「白鹿」の詩の如何なる事情の下に出版せられたるかを知るへし。

「妾か兄は、常に深く渠か詩を好ますと明言し玉ふ御身の腹藏なきを喜へり。渠は今御身か白鹿の詩に對する感情如何、其說話の御身を樂しましむるや否、エミリーの性情、御身を會得せしむるものありや否、彼と白鹿の間に存する以心傳心の交感、果して御身を喜はすに

足るや否を知らんとを願へり。御身の返辭の渠に苦痛を與ふるとを配慮し玉ふと勿れ。渠は既に苦痛を感せさるほとに虐待せられたれは。妾か御身の意見を求むるは。渠の知己、其詩必す其說話の故によりて賣るへしと云へはなり。

今の此詩を公にする目的、差當り金錢の爲なれは、渠は知己の公評の、讀まるゝとを證するにあらされは出すことを欲せず。渠はもと出版てふとを好まず。渠若し富まざるにあらざりせば、其詩は皆遺稿として出づへかりき。されば白鹿の詩に於ても、渠は二三の知己の外には讀まれざるべきを恐れて拒み、僅かにメリーと妾の懇請によりて承諾せるのみ。妾等は出版せんと決せり。然れども若し今回も欺かれしものならんには、以後は渠に聽かんのみ」と。

之に由て觀る時は、「白鹿」の詩も亦其家庭の金錢を缺くが爲め、身を剝がるゝが如くして出版せしなり。渠が所謂ゆる苦痛を解脫したるの樂境は、渠が爲に希望の地にして、到達の地にあらざりしなり。

然して渠が此の希望の地に到達するまでは、宛もエジプトを出つるイスラエル族の如く一方には絕えずモセスに叫び、上帝を怨む民群の如き情緒あり、一方には絕えず民群を慰め、上帝に訴ふるモセスの如き理性あり、僅に能く表面の平和を保つを得たりと雖も、中心一日も安からざりしとを。渠が人生を遠さかるとは斯の如くにして、然して人生に深通すると斯の如きもの豈に是故にあらずとせん哉。」

且つヲルヅヲルスは淵明の天職なきが如きにあらざりき。淵明の詩を作るは、自個の嗜好を滿すか爲のみ、自家の情を叙べん爲のみ、其の一家の私事なると、猶ほ渠の酒に於けるが如く、初より世の爲にするものにあらざりき。何となれば渠は閑人にして、決して詩人に

あらざればなり。ヲルヅヲルスは之と異なり。渠は即ち詩人なりき。渠は詩人の責任、詩人自ら娯むにあらずして、世を娯ましむるに在るとを其「觀察」に特筆して、明らさまに自家の天職を宣言せり。渠は如何なる新趣味を敎ふるの新詩人なりとするも、渠は世を樂ましめさるべからず。渠は如何に天の光を以て自ら書くと云ふとも、渠は世を樂しましめさるへからず。渠如何に世の闇黑、世の不識を以て自ら慰籍すと雖、然れとも若し世を樂ましむるに足らずんは、其天職を如何すへきや。渠をして如何に後世と相期せしむるも、人間を樂ましむる能はすんは、其豐富なる詩卷も抱負も亦何爲れそ。然して渠か叙情詩卷の世に喜はれさりしと亦果して如何なりしそ。

渠は初めコレリッヂと合著叙情詩卷を出して獨逸に遊へり。傳へ云ふ、渠か不在の間、五百部の詩卷殆んと出版のまゝにして塵を蒙れり。出版者は其詩卷を擧けて倫敦共同書籍會社に讓り渡せり、然して會社に於ても亦此の詩卷の爲に一錢の拂ふへきものなかりしより、出版者は再ひ其の詩卷を取り還し、盡く之を其著者に贈れりと。吾人はヲルヅヲルスか果して此不面目なる贈遺を受けたるや否を知らすと雖も、然も渠は實に始めより此の如き不面目なる面目を以て世に顯はれしなり。渠か二十年間の著作業に由りて得たる處、果して百四十磅に過ぎずとする時は、渠は第一の詩卷の爲に、三十磅の半分、第二詩卷の爲に百磅を得たる外、其の第三詩卷の爲に、「逍遙遊」の如き巨作の爲めに、「白鹿」の如く心配せられたる詩篇の爲に、渠は僅かに數磅ついを得しのみなりけり。所謂ゆる「渠か詩價、靴の紐すら買ふ能はす」とは、形容にあらすして事實なりき。渠れか詩價の靴紐をすら買ふ能はさるを觀る時は。其詩の世を樂ましむるに足らざりし

と、實に靴紐にすらも如かざりしことを知る。

渠が屢其詩の遺稿として身後に出んことを欲すと云ふを聞くもの或は謂はん、世の冷罵、渠をして最早當世に望まずして、寧ろ後世と相期せんと欲するに至らしめぬと。然れども渠がエマーソンに答ふる所に由りて見れば、渠が詩の出版を急がざるは、多改の爲めにして、決して當世と相干せざらんと欲するが故にあらず。渠亦頻りに後世と云ふと雖、是れ激昂の餘に出つるの言、其實決して斯の如く淡泊なると能はず、淡泊なるは陶淵明の天質にして、淡泊ならざるはヲルヅヲルスの天質なればなり。渠は一方に後世と期せるが如く云ひし同時に、一方には恒に同好の士を益するの念なき能はざりき、一方には當世の無識を恕する同時に、一方には其無識を以て人を愛し、神を敬することを知らざる事として當世を咀ふを免かれざりき。渠其詩の詬罵せらるゝ毎に、默して其詬罵を受けたりと雖、其噴火の如き赫怒、口より出てずして骨髓に入るもの、渠をして轉た沈痛の人たらしめたり。渠は實に蠢爾たる無識界に向つては、石の如く默したるも、其少數の知己に對しては、諄々として自個の詩を語り、人をして其詩話を除きては、殆どヲルヅヲルスなきの思あらしむるを免れざりき。渠は晩年其天職の認識せらるゝ迄、恰もユダヤの豫言者イザヤの如く、渠を尋ねざりし民に逢ひ、問はざりし民に顯はれ。終日手を扛て、悖り須はざる民に向ひて聲を擧げにき。渠は夫の無邪氣なる五柳先生の如く、未だ嘗て一日も懷を得失に忘るゝと能はざりしなり。

且つ渠は詩人なり、詩を作らざるべからず、是に於て乎詩愁あり。千八百年渠がグラスミールに來りし初、血氣方に盛なるの時に於て、

チルヅチルスと陶淵明

嬢は其友に告て曰へり、此頃渠が詩を書く時、感激、戰慄、一時に發し、其左脇と胃とに苦痛を感ぜしめしが、遂に平穩なる感情を以て書く能はざるの癖を成すに至りぬ」と。越へて三年、渠亦ゼオヲビウモントに告げて曰く「我其原因を知らずと雖も、三年以來、身躰に異狀を來し、筆を執ると五分間にして、發汗の全身を經過し、胸邊一種云ふべからざる異樣の掩壓を感ずるを例とす」と。然らば則ち陶淵明に在ては唯酣醉放浪の餘興に成りし所のもの、渠に在ては經營苦心病人の如くにして始めて成りしを見るなり。

之に由て觀る時は、渠等は均しく田園詩人と雖、初めより相反せるの人なりき。均しく樂天家なりしと雖も、陶淵明は直覺的樂天家にして、チルヅチルスは論理的樂天家なりき。均しく平和の人なりしも、陶淵明に於ては涕淚の中、猶ほ天地悠々なるものあるを觀、チルヅチルスに於ては微笑の間猶ほ天地に哭するものあるを覺ゆ。渠等は均しく天民なりしも、陶淵明は赤兒の如く、チルヅチルスは嚴父の如し。陶淵明は氣隨なる凡夫の如く、チルヅチルスは凡夫を勸化する教師の如し、陶淵明は田野に隱れし隱君子の如く、チルヅチルスは大世界の偉人の如し。實に渠は偉人なりき、實に渠は詩人として革新の詩人、人物として平和の偉人なりき。有名なる書家ヘイドンをして、エルサレムに上るクリストの模範を示らしめ、ドクヂンシーの如き批評家をして、智の法象と呼ばしめし、眼光射るが如く、頰窪み溝を成し、然して終始地に向ひて倒れたる頭面、不仁の處爲に對して、破裂し來る情の赫怒、嚴烈なる自信、蹶然として獨り往き獨り歸る山行の習癖等、大凡盡く是れ皆偉人の表象にあらずんばあらざりしなり。然して世は七十なる渠の大感情と大思

陶淵明は隱君子

チルヅチルスは詩人として革新の詩人、人物としては平和の偉人なりき

陶淵明の詩は春山の如し

想を認めぬ、渠は眞成に偉人なりけり。

渠等均しく田園を歌へるも、其詩趣の相反すると、亦氣象の相同じからざるが如し。淵明の詩は春山を看るが如く、遠からすと雖烟霞の隔つるを覺え、ヲルヅヲルスの詩は秋水に臨むが如く、近からすと雖明かに物象を寫し來るを觀る。淵明か詩は人をして安せしめ、ヲルヅヲルスの詩は、人をして思はしむ。蓋し淵明は氣象寧ろゴールドスミスに近く、ヲルヅヲルスは却て柳々州に似たりしなり。

ヲルヅヲルスの詩は秋水の如し

渠か詩は放朗なる天地の中に吟成せらる

然れども物を齊ふするものは齡なり。事を廢し、世を抛ち、白頭を回し來る時、何人か復た陶令ならざるものあらん哉。何人か復た歸去來の人たらざらん哉。渠は全く家庭の人となれり。閑居狹きにあらずと雖、渠か詩の十中八九は放朗なる天地の中に吟し成されぬ。渠は客の來るとに、田園に誘ひ下りて、詩集の就りし野

徑を示すを例とせり。客の來りて、渠が詩作を窺はんとする毎に、家婢は先つ其主人の書齋を示し、然る後遙に邱下の野を指して曰く、「那處が主人詩作の塲」と。其の閑居より遠く離れ往きし時に、隣家の父老の渠を見るもの、相指顧して私語せり。「見よ、夫の人彼處にあり。我等は渠の呻吟を聞くを喜ぶ」と。

詩作既に止みたる後に於ても、渠は猶ほ戸外の人なりき。面白き小話あり、今より五十年前、米國の一少年にして、獨逸の大學を卒業して本國に歸るの途次、一たひ其の崇拜する本尊を見て往んと欲するものあり、遠く英國に上陸し、湖國に來り、ライダル山にヲルヅヲルスを訪ひけり。渠は家婢の、主人今家にあらず、邱下の牧塲に乾艸を取り入れつゝありと云ふを聞き、其儘再ひ平野に下れり。時は恰も夏なりき。渠は曾て寫眞に稔知したる老詩人をシャツ一枚に

なり、熊手を把つて草を爬き居し白頭翁に於て認め、身を其人の足下に進めて、準備し來りし挨拶を敘べ、丁寧なる敬意を表して、渠に見えんか爲に、英國まで來りしことを告けたり。熊手に倚りて默聽し居たる老翁は、少年熱心家の言了りし後、徐ろに答へて云へり。

「我か少友よ、我は御身の好意を謝す、然して言語よりも聲高く語るものは事實なり。雨降り來れり、若し我と我詩に對して、御身の云ふ處眞ならば、是より外套を脱き、我を助けて、この乾艸を爬き入れ玉はんは如何。」

大學卒業生として、外國の賓客として、流行を盡して着飾り來りし少年紳士は、意外の要求に困却せしも、辭むべくもあらざりしかは、渠は斷然上衣を脱き、他の熊手を把りて役に服せり。事終りてヲルヅヲルスは篤く渠に謝し、渠を閑居に伴ひ歸り、佳き晩餐を供し、

恰も久しき知己の如く、感情塊なる少年の耳に、終身終る能はざる快話を刻せり。

渠は今、自個の生命よりも心を懸けしドラ孃を喪ひたり。彼の天眞爛熳の擧動、爽快なる心地、宛然今日憐むへきヲルヅヲルス孃の少き時と相肖たりしより、ヲルヅヲルスの執着性は、獨り此兒にのみに執着したりき。千八百四十一年、彼は休職の武官ミスター、クヰリナンに嫁せり。クヰリナンは文學趣味に富み、幾分獨創の才あるの人なりき。渠は千八百二十一年に於て、ヲルヅヲルス倶樂部の一人として、ライダル山の下に住み、直ちにヲルヅヲルスの知己となれり。渠は嚮に既に妻を娶りたるか、千八百二十二年妻は二個の女兒を殘して逝きぬ。其二兒の一個はさゝやぐロザの流の名より名けられて、詩人か介せし神の子なりき。父の天井を出てゝ後、幾もなく

ドラ天に歸してより渠が頭亦天に向ふ

ドラ、クヰリナンは、弱くなりぬ。千八百四十五年クヰリナン夫妻は、保養の爲めオッポートーに往き一年にして歸り來り、謂へらく健康を復せりと、然れどもドラは日ならず再び病み、千八百四十七年七月、ライダル山に於て死し、其老父の幾干もなき餘生をして、復た慰籍なからしめたり。

ドラ天に歸してより、渠が地に向ひし默思の頭、漸くに天に向へり。渠は人に語りて云へり。「我が詩の世にある間、德義、眞理、少年の伴侶たらんとを望み得るは、深く滿足する所。我名の如きは、毫も記憶せらるべき要あらず。一葦舟を棹して無窮永刼の海を渡らむもの、何時まで岸より見られんとするや」と。

渠が終の靜なるは秋の夕天上を亘る

渠が終の靜かなるは、秋の夕、天上を亘る一片の雲の如くなりき。ある時は幼時の豫言の滿され、懷かしき故鄕を以て、終焉の地と爲し得たる幸福を喜び、ある時は少年を益せんとを求めて、遂に少年を益し得たるとを思ひ、偶々閑居を訪ひ來る隣翁を見ては、孰れが先に逝くべきやを語り、湖上に釣遊する兒童を見ては、遠き以前の前身を回顧し、長かりし世の空しく過されざりしとを滿足し、事了り、齡足り、誕生日の祝すら、既に一昔となれる今は靜かに終焉を待つ外なかりき。今も猶ほ悠々として逍遙せるも、峻しき道よりも夷かなるを擇ひ、渠が吟行に答へし鳩、今も猶ほ同じ樹に懸れるも、聲は漸く少なくなれり。低きに下りては仰ぎ、高きに上りては俯し、或は日暑の移るを見、或は家より上る烟に對しつ。渠が形影、一日一日疎遠になり、一日一日食堂の窓、夕照に對して、日科聖經を誦する、種々たる白髮の頭見え、終りまで信仰を保ちて逝きし朋友等の爲に感謝する時、微動する深く遠き祈禱の聲聞えぬ。

一片の雲の如くなりき

渠が臨終は天の如く安かりき

平和の偉人天に歸せり

渠が臨終は天の如く安かりき。ある日曜日の午後の散歩に於て捉へし感冒は、漸くにして肋膜炎となり、數週間困臥したる後メリー、ヂルヅチルスは渠に云へり。「井リヤム、御身もドラの處へ往き玉ふ乎。」渠は如何とも對へず、恰も聞えざるに似たりき、斯くて二十四時間の後、病室に入り來り、遲々たる春日に對して其窓布を曳く渠の姪を、宛然安眠より覺めたるものゝ如く見て曰へり、「ドラなりや」と。」千八百五十年渠誕生の月(四月)の廿三日、恰も火曜日に當り、永らくの間聞きし時計の、正に正午を報ずるとき、天より來れる平和の偉人は天に歸れり。年を享くること滿八十、其遺骸は願の如く、平和世界の中、最も平和なる、グラスミールの寺院の墓地、樅樹茂れる樹蔭に於て、妙なる歌を歌ふロザの流の源に於て。平和なる湖國の先民、及び其の愛兒と共に眠りぬ。

湖國の荒壞

世は速かに變れり。嚮に着手しつゝありし鐵道は既に湖國を世と連絡せり。鑛山は到る處に開鑿せられ、水道は到る處に疏通せられ、自然は到る處其形を缺かれ、村落は到る處平和を失ひ、山民半は墮落し了り、半は懷かしき故鄉を去れり。詩人兩家の家族の相會して遊び樂み、愛する人の頭文字を書きつけたりしサーミール湖上の岩も、解け去りて貯水所顯はれ、障らるゝ日より消んと嘆せられたる、グラスミールの舊廬も、今は繁劇なる旅館、噪噂しき商賈群の裡に沒了せられ、谷の中處々に散布したりし素屋は退けられて、今は人巧を競ふ別墅相對峙し、「貪ぼる勿れ、羨やむ勿れ」の語を假り來りて山民に矜り。湖國の美は恰も夫のオルポーンと一般、夢の如く消え、

千歳の下湖國を傳ふるものは渠が詩なり

幻影の如くに消え失せて、亦荒村行中のものとなれり。若し渠が詩卷の千載に傳ふるあるにあらずんば、誰か復た千載の下人間皆て天上に似たる、湖國の古村落ありしことを知らん哉。

井リヤム、ナルヅナルス終

明治廿六年十月十四日印刷
明治廿六年十月十七日發行

著作者　東京牛込區市ヶ谷富久町百五番地　宮崎八百吉
發行者　東京々橋區日吉町七番地　垣田純朗
印刷者　東京々橋區西紺屋町二十六番地　島連太郎
印刷所　東京々橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舍
發行所　東京々橋區日吉町四番地　民友社

定價拾八錢

版權所有

◎民友社出版書籍目錄◎

十二文豪

一冊定價十八錢
全部十二冊前金二圓
郵稅各四錢

毎月出版〇一卷讀切〇十二卷完結〇毎卷紙數二百頁內外

本社已に十二文豪の初四卷を發行し、第五卷の出版亦近きにあり。是れ實に寂寥たる今日の文學界に千丈の狼烟を上ぐるもの、文界是れより活氣を添ふるものあらん。讀者諸君刮目して見よ。

○『エマルソン』……北村門太郎
『賴山陽』……德富猪一郎
『マコウレー』……竹越與三郎
『近松巢林子』……塚越芳太郎
『萩生徂徠』……山路彌吉
『ユーゴー』……人見一太郎
『ゲーテ』……高木伊作
『トルストイ』……德富健次郎
『瀧澤馬琴』……塚越芳太郎
『新井白石』……山路彌吉
『チルヅテルス』……宮崎八百吉
『カーライル』……平田久

平田久著

十二文豪 第一卷

カーライル

肖像入
定價十八錢
郵税四錢

○近世の大文家トマス、カーライル一生を悉くせり近時の著述者讀んで自ら愧る所を知れ（大阪朝日）

○豪壯の筆を以て、併も同情の念を驅て、之を傳せしもの、謂するに多しと云つ可し。時世の彈劾者として生れたる彼れ飽くまで、すねたるを顯はすと面白し、而して天より遣られ、今猶朝に叫ぶ警言者の聲を聞け。と結ぶ處底意ありげにて、時世に響くが如し（評論）

○本書は民友社より發兌すなる「十二文豪」の先陣としてあらわれたる平田久氏が著作なり著者は嘗て「伊太利建國三傑」を物して傳記評論の技倆を示したり此の篇希世の文豪トマス、カーライルが一生の事業と其の經歷と特賞とを趣味ある筆をもて叙説評論し頗る其の要を得たり案するに我が方今の社會其の何れの方面に於てもカーライルの如き勇猛の偉人を欠けること久し此の一冊子若し能く幾多の懦夫をして起たしむるを得ば平田氏の功は尋常傳記家の功たるに止まらじ（早稲田文學）

○平田久君の著「カーライル」は「十二文豪」の第一卷として出でたり、此篇結をカーライル時代の形勢に起し、「泣虫トム」より「時世の彈劾者」に至るまでを詳細に畫き、更に筆を轉じてカーライルの評論に移り、その心意の變遷を追ふて委曲に之を論述す、合せて十一章、文勢流暢、警麗の筆を執て熱火の偉人を畫く、また是れ近來の好文字、（九州日々新聞）

竹越與三郎著

十二文豪 第二卷

マコウレー

肖像入
定價十八錢
郵税四錢

◉毎日新聞　竹越氏は平生尤もマコウレーに同情を表せる一人也而して世は著者の行文を評してマコウレーの文を讀むが如しとなす是深く感觸する所による乎。此筆を以て彼の傳記を叙す一度卷を開くや知らず〳〵マ氏の性情、思想、經歷、文躰、あきらかに現れ來るもの又取ある也。著者は今日の文學者中最多くマ氏に熟通する者にして又マ氏を以て目せらるゝ者也其行文一瀉千里順風に帆を上て行くが如きもの無理ならざるべし

◉國會　著者は我國のマコウレーを以て自ら擬する者也宜乎十二文豪中マコウレーを撰びしや、觀察精細、文章流麗マコウレーの精細氣象紙上に活動するを覺ゆ

◉朝野新聞　批評精彩、能く大勢に通ず、文、酷はだマコウレーに似たり

◉讀賣新聞　批評家、政治家、歴史家としてマコウレーの人物、性行、紙上に活動す。叙説の躰裁、煩簡其宜しきを得たりと云ふべし

◉都新聞　温籍にして典雅、引證は豐富にして趣味に富み其襯接の點に於て最も輕妙を極む

◉六合雜誌　批評家として歴史家としてマコウレーを論じて精通微達殆ど遺憾なし、其評説亦尤も明快切實なるを覺ゆ蓋し平生蓄積する所深きにあらずんば決して此の如くなる能はざるなり、拾二文豪の傑作雄篇是より續々として出づべしと雖も此書が必ず其雄篇中の一ならんは余輩の疑はざる所なり

山路彌吉著

十二文豪 第三卷 荻生徂徠

肖像入
定價十八錢
郵税四錢

此書出てより批評甚だ多し、區々たる小冊子世上の一顧を價せしは幸甚なり、其賞讃せらるゝものは曰く豪放濶大なる一奇儒は灑々流れて盡きざる文字の間に傲然箕踞せるの想あり(自由)曰く英靈快活津々たる滋味卷を舍く能はず(都)曰く先生一代の性行を描き出し殆んど餘蘊なく、照合點綴甚だ妙を盡くせり、(日々)曰く著者の温かなる同情と鋭き眼光と快利なる文章とは能く徂徠を寫し得て略其面目を活現せり、(國會)曰く從來の編年的習慣を脱して四方八面より徂徠を見るの活論法なり、古來の漢學者か一髪一爪をのみ細微に研究したるとは大に其趣を異にせり、(日々)其非難せらるゝや曰く異語の文法を用ひたり、曰く新しき事實なし、曰く偏斷に過ぐ曰何曰く何、著者唯慙悸恐縮するのみ、

世評斯の如し、文學上法庭の審判は未だ濟まず、更に世上君子の一讀を得んとを欲す、輿論は即ち最高審庭なれば也

宮崎八百吉著

十二文豪 第四卷 ヲルヅヲルス

肖像入
定價十八錢
郵税四錢

是れ三伏の日火爐の如き炎熱の中流汗を拭きつゝ書きたる、井リヤム、ヲルヅヲルスの傳なり

渠は詩人として革新の新人、人物として平和の偉人なり、偉人として渠は朽敗したる古文派傳奇派の詩界を一新したる斬新なる現實派の詩論を有し、凡詩人の夢想し得ざる罕なる信仰と苦節を有せり、詩人として渠は詩人の如き妹姐の伴侶を得、武陵桃源の如き湖國村落の閑居を有し陶淵明の如き平和なる田園生涯を有し身邊の人と自然を讀者の眼前に畫き出して躍如たらしめたる詩集を有せり、

今著者は大膽にも此ミルトン以後の詩人を傳せり、敢て江湖に質さんが爲に

毎月一回發兌 平民叢書

一冊 定價十二錢 郵税貳錢
十冊 前金壹圓 税廿錢

一冊讀切、十卷完結、毎卷紙數百五十頁位
平民叢書は既に其半を成就したり、社會の評判は如何新聞の上、會話の序、人口に噴々たるものを聞くに堪し本

書の如く社會に讃迎せらるゝは少なし、我社が爲に勵言して平民社會の急需に應じ平易適實の文字を以て世界の新思想新智識新現象を紹介すと云ひしもの果して驗あり、

平民叢書 第一卷

十九世紀之大勢

定價 十二錢
郵稅 二錢

●十九世紀前記○十八世紀の地位○革命の時代○殖產界の革命○思想界の革命○道德的革命○佛國革命の大危機●第十九世紀○十九世紀の物質的進步○物質的進步と文明○英國の物質的進步○物質的進步と思想界○物質的進步の功德果して如何○物質的進步と貧富の懸隔○平民的大勢○政治上に於ける平民主義○佛國革命の反動○希望の時代

◎早稻田文學の評　「平民叢書」の第一卷なり德富猪一郎氏其の卷頭に題して曰はく明治二十六年の今日尙內地雜居に向つて鬼胎を懷くものあり切支丹、邪宗門の禁を唱ふるものあり唯命是順主義を說き國家專制を唯一の治道と說く者あり物質的には二十世紀に片脚を踏入れんとしながら精神的には中世の封建時代に却奔せんとする者あり彼等は與ふるを欲せずまた求むるを欲せず彼等は精神的斷食者なり云々と、民友社の「平民叢書」は實に此の精神的斷食者、むしろ一種の精神病者を療治せん本願によりて調合せられたる簡便藥劑なり本書の如きは眇然たる小册子なれどもまた以て彼等に十九世紀の精神の何物なるかを知らしむるに足る、叙說評論する所廣く政治、社交、經濟、文學等に涉る其の關係頗る普通なれば何人も一讀して多少の益を與へを得べし

◎經濟雜誌の評　トマス、カーライルの十九世紀論に反對し十九世紀に於て文學科學工藝發明及び一般の文明の進步せるとを證明論議し結局十八世紀は十九世紀の段階たり十九世紀は二十世紀の相續者たる以上は來世紀は最も好望ある世紀たりと論斷し文章流暢の小册なりと雖も論は乃ち大なり、

◎郵便報知新聞の評　是平民叢書の先鋒として現はれたる者可憐可愛の釉珍書なり重に彼のハリソン氏の十八世紀論及び十九世紀論を參酌したる者、男子世に在るや先づ大勢を知らざる可らず十八世紀は如何、十九世紀は如何何抑も亦た將に來らんとする二十世紀は加何此の書皆な之を解釋ぜり

平民叢書 第二卷

世界經濟上之變動

定價 十二錢
郵稅 二錢

第一章輓近經濟界の動亂○第二章生產、分配の新機關及其影響○第三章物價下落及其原因○第四章金銀比價の變動○第五章干涉保護政策と經濟的動亂○第六章現時歐羅巴諸國の商業政畧○第七章經濟的變動の社會上に於ける影響○第八章勞働者の不平○第九章結論

◎評論の評　「世界經濟上之大勢」は、ウエルス氏が「近時の經濟的變動」に據りたり。文章着實にして、極めて有益の書を成せり。銀貨下落、保護政策と經濟的動亂、勞働者の不平、等を初めとし、近世の經濟上の大問題を大抵簡易に解き明かしたり。其結言に至り、輓近の經濟的變動は、文明の進步にして、退步にあらず、人間社會の改善にして、墮落にあらずと言ふも、亦頗ぶる可なり。……

平民叢書第三卷

國家と政府

定價 十二錢
郵稅 二錢

緒論●第一編國家○第一章國家の概念○第二章國家の權力○第三章國躰の目的○第四章國家の起原○第五章國躰の種類●第二編國家の發達○第一章英國憲法制定史○第二章平民的國家●第三編政府○第一章政躰の種類○第二章英米獨佛の政躰●結論

平民叢書第四卷

教育と遺傳

定價 十二錢
郵稅 二錢

目次○緒論●第一章、道德本能と教育、(一)生理的誘告、(二)心理的誘告、(三)德育と誘告●第二章、道德本能の發起、(一)道德力——意志、(二)道德の目的——義務、(三)道德的疾病、(四)道德本能の發達に於ける教育と遺傳●第三章、躰育、(一)躰育の必要、(二)腦の逼壓、(三)手藝の練習●第四章、智育、(一)智育の地位及目的、(二)智育の方法●第五章、學校教育、(一)專一的智育の危險、(二)倫理學の教授、(三)道德的

訓練、(四)市民教育、(五)審美的教育、(六)科學的教育、(七)競爭試驗の利害●第六章、女子教育と遺傳●第七章、作物轉換と教育●第八章、教育の極致、無限の進化●教育沿革史

◎『國家と政府』これもまた重寶なる小册子なり國家の起原種類、國家の發達即ち諸大國の憲法制定史、政躰の種類さへも簡便に說明したり(早稻田文學)

◎『教育と遺傳』第一篇に次ぎて興味の普通なるものなり就中守舊になづめる人々の忍びても一讀すべきものなり、教育法の要旨いみじく說明せられたり、德育、智育、躰育の相互への關係を說けるにあたり子弟ある人々に取りては目前の用あり卷末に教育沿革史を添へたる用意よろこぶべし(仝上)

◎『國家と政府』『教育と遺傳』平民叢書の第三卷及び第四卷として發刊せり、何れも例の流暢明晰なる文を以て說きたり、此等の政治問題の簡明なる解釋として、書生社會の座右に欠くべからざる袖珍本なり、此書讀み去れば、即ち此の問題に就ては、政治家然として朋友間に大言議論するを得べき、重寶なる書物なり(經濟雜誌)

◎國家と政府 ◎教育と遺傳 平民叢書として梓せられたるもの英米佛獨の憲法制定史及其政躰の比較の如きは頗る參考に資すべし教育と遺傳は專ら躰育を揚げて而して遺傳と云ふことを發揮するに努めたり其の論該博にして縱橫の概あり(東京日々)

◎『教育と遺傳』近世の教育論者中、一方にはヘルバルトの心理說を應用し、一方には進化說に訴へて、廣く人類の運命の上より教育を論ずるものは、佛國の學士ギュヨウ氏を以て巨擘とす。ギュヨウ氏の論說を更に擴充して國家の命運と教育との關係を論ずるものは、是亦佛國の學士フォイレー氏を推さゞるを得ず。此の二氏は實に近時に於ける一種の意見を出したる者にして、滔々たる一世の思想家皆戴て近時理學に重きを置くに當り、精神遺傳の

元則に基き、毅然として古典學の必要を主張せり。殊にフォイレー氏の如き は、熱心に之を唱へたり。ギュヨウ氏は此點に於ては、彼に及ばずと雖、其德育を論ずる處の如きは、其明暢なること、決して之に劣るを見ず。今民友社が主として之を譯して世に示したるは、瞿眼と云ふべし、殊に其譯文の如きも、通暢明快、寸毫の遺憾なし。之を教育の學として講究する程の者にはあらざるも、教育上の論文としては、大に價値ある者なり（教育時論）

平民叢書 第五卷

文明之弊及其救治

定價 十二錢
郵稅 二錢

文明の起原及歸趣◎野蠻と文明○健全なる生活○人間の墮落○第二の樂園●文明と科學◎現時の科學○將來の科學○文明と道德等

○東京日々新聞の評に曰く、文明之弊及其救治は英人エドワードカーペンター氏の著を譯したるものにて冒頭突如として文明誇るべきか野蠻羨むべき乎と叫び先づ讀者を疑濤に投じ更に一轉語を下し文明は一種の病也と喝破して滔々と文明の弊を論ず國家及警察なるものは終に强者の權を保證して正義の覆を裝はしめんが爲に發明されぬ警察制度は社會が强制的制度を要する程に墮落せることを現はすと云ひ野蠻人の生活は文明人の生活よりも健全なり而して此文明の病を拯ふは只天然に歸るにありと斷ず次に文明之科學を論ず鐵槌を天上より落し來りて現時科學の法則は總て假定に過ぎずと云ひ放ぜり……此渺々たる小冊子光焰萬丈の概あり間々時弊に適切なる警句あり

（國民新聞）

平民叢書 第六卷

現時之社會主義

定價 十二錢
郵稅 二錢

目次●第一章、社會の種類●第二章、十九世紀以前の社會主義○(一)猶太及基督教の社會主義○(二)トマス、モールよりルーソーまで○(三)新時代の號鐘●第三章、十三世紀前半の社會主義○(一)サン、シモン及シモン派○(二)カーライルの社會主義○(三)新時代の共同組合制○(四)ルイ、ブランの勞働組織○(五)ミルの社會主義●第四章、新社會主義の勃興○(一)獨逸社會黨の始祖フエルヂナンド、ラサーレ○(二)新社會主義の經典マルクスの資本論○(三)社會黨最近の運動○(四)碧士亞虛無黨●第五章、新ユートピヤ○(一)公有制度○(二)富の分配○(三)物價及貨幣●第六章、實行的社會主義○(一)非ユートピヤ○(二)社會主義的立法○三勞働者保護○(四)官設事業●第七章、社會主義の前途

○每日新聞の評に曰く近時社會問題の著書漸く我邦に出づるに當りて先づ現時社會主義の有樣を公平に叙出したるは是著なり蓋し文明の波及する所早晩社會問題の起るは是れ爭ひ難き命運なりされば我邦に於ても此問題の沸騰する亦遠きにあらず本書は其際に於ての用意の爲め社會主義の過去を尋ね又現時の有樣を考究したるもの平民叢書の第六卷として民友社より發行したるものなり

平民叢書號外

銀貨之過去現在未來

定價 十錢
郵稅 二錢

目次●第一章、單襲本位貨幣制度○本位貨幣の便益。本位貨幣制度の現況。單襲本位論の激爭。兩論旨將來の趨

勢●第二章銀價問題○其一、銀價下落の原因。銀價の大變動。下落に關する人爲の原因。自然の原因。下落の運命は永久の結果なり。○其二、救銀政策＝北米合衆國の銀問題。米國に於ける銀黨の躍起。救銀政策第一＝プラント案。救銀政策第二＝シャーマン法。救銀政策第三＝一八九二年の萬國貨幣會議●第三章印度貨幣制度の改革及其影響。銀貨國としての印度。財政の紊亂。商業上の困難。改革論の發生、論旨、及運動。改革の斷行。其影響。日印兩國間銀の輸出入●第四章、シャーマン法の廢止。米國上院と廢止案。廢止後の結果。折衷論の妄辯。日米間貿易上の反響●第五章、我國經濟社會の反響。外國貿易の盛況。物價騰貴。正貨增加の影響。生產振起。財政上の關係●第六章、我國現行の貨幣制度。新貨鑄造の議。伊藤博文氏の金單本位論。新貨鑄造令。法律上の兩本位國實際上の銀單本位國となりし由來。再金單本位を採用するの可否。第五議會と貨幣問題。

○自由新聞の評に曰く　現下の問題なるを以て平民叢書の號外として世に先づ著者の伊藤鏢三郎氏にして簡淨の筆能く銀貨問題の終始を叙す今日の銀貨問題を喃々する者少くとも此書に記するだけの事を知らば又當さに迷岐茫洋の嘆なきを得べきなり

○每日新聞の評に曰く　銀貨の過去現在未來平民叢書の號外として發行したるものなり目下世界に於て大問題特に東洋唯一の銀貨自由鑄造國たる我國人の須知を要する銀貨問題に就て過去現在を觀察し將來を洞見したる著書にして議論確然叙事整然苟も此問題に志を傾くるものは速に一讀せざる可からず

平民叢書
第七卷
經濟と道德

定價　十二錢
郵稅　二錢

日次●經濟學の範圍○第一經濟學の目的○第二經濟と道德○第三經濟と宗教○第四經濟と政治○第五經濟と法律●經濟上、道德上より奢侈を論ず○第一奢侈の定義○第二奢侈心の解剖○第三奢侈は恕す可きか○第四奢侈と精神的發達○第五奢侈と機械の使用○第六奢侈と個人の幸福○第六奢侈と富國○第七奢侈と公正○第九公共的奢侈○第十奢侈と政躰○第十一經濟と歷史

人見一太郎著

國民的大問題

定價　二十錢
郵稅　四錢

●經濟雜誌の評に曰く　著者は民友社の年少卓見家人見一太郎君なり、君の識見を以て目下の急務たる條約改正問題を論ずる文辭通俗なりと雖も、讀んで憤慨の氣自から其中に籠れるを知るべし、況んや我國の外國條約の淵源する所を調べ、文書事實に就いて考證したる有益の書なるをや、但君の論を實地に行はんとは、政府否一般日本人民の手腕と度胸にあるのみ、●自由新聞の評に曰く　條約改正は我が政界に於ける重大問題の第一なり國民の之

な研究する宜しく其首より尾に透徹するを要す何となれば苟も透徹ならずんば偏見固執に陷りて悟らざるの恐あればなり此篇は曾て國民之友に連載したる條約改正論を敷衍し增補し追加したる者にして該問題の歷史及び改正の準備機會を論じ治外法權撤去關稅改正內地雜居土地所有權等を論じ終に臨で改正の方策を論ぜり此問題を研究するに於て好參考書と云ふべし而して卷末に付したる土耳古のカピチュラシヨンに就て所懷を記すの一篇の如き著者の所謂血性を攄へたるもの讀去て感慨止む能はざらしむるものあり◉東京日々新聞の評に曰く　全篇我が現行條約の利害得失を詳叙す、就中治外法權の撤去、關稅の改正、內地雜居、土地所有權等の事を論する明晰にして又た痛快、心を外政に用ゆるものは一讀以て自己の意見と對照せば蓋し稗益する所尠なからざるべし、

排僞哲學論

高橋五郎　著

定價　十二錢
郵稅　二錢

◎日本評論の評　氏が論文の續々國民之友に揭げらるゝや、苟も耳目を近時の問題に注げる者は皆な之を讀みたり。其議論の精緻に至りては、井上哲次郎氏の誤謬を破碎して猶ほ餘りありたるは公平なる評者の皆な詛す所の者なり」然り、井上氏が聖書の曲解も、思孝の僻論も、氏の論鋒によりて、十分に破碎し盡されたり。吾人は此書を以て江湖に薦む。◎每日新聞の評　「筆斧解剖死豚跳梁」とは此書を評する爲めに咏せられたる一句なり流石の豚も舶來パンにや食傷しけん五體の內より半消化のレナンの骨もベーコンの皮もべらべら然として出でにけり人若し宗教衝突論の辨駁中最も精確に最も痛快なるものを問はゞ排僞哲學論を以て答へん。◎郵便報知新聞の評　井上博士の「教育と宗教の衝突」出づるや人皆其荒唐無稽なるに驚けり而して辨駁するもの雲の如し中に就きて高橋五郎氏の民友誌上に於て駁擊したるもの尤も痛烈峻刻なりとす。

國民叢書　靜思餘錄

德富猪一郎　著

定價　十五錢
郵稅　二錢

◎インスピレーションの如き希望の如き餘裕の如き平民の道德の如き雅量の如き快樂の如き觀察の如き其他の雄篇と共に光彩爛たり山あり河あり時に千里の茫洋あり時に漠々の曠野あり或は花笑ひ鳥歌ふの處或は雲飛び水流るゝの邊時に詩の如く時に哲理の如く時に豫言の如く時に平民の談話の如きものこれ先生が所謂詩人にあらざる詩哲學者にあらざる哲學豫言者にあらざる讒言なるものか讀誦の間沈思默想すれば中々に味あるが如し覺者も以て深く悟るべし迷者は以て覺に入らん苟しくも着實なる精神的修養を希望するものは須らく此種の書を讀まざるべからず（青山詩論）

◎『靜思餘錄』…げに此の眇たる小冊子は德富氏が人生諸般の現象に對する意見の精英を網羅し得たり其の「希望」を說き「非厭世」を說き「インスピレーション」を論じ「天地悠々」を唱ひ「快樂」「觀察」を語るや時に哲理の幽玄に接し時に宗教の神聖に觸る或は古茶廬の哲理を談ずるものゝ如く或は希望の務教を宣ぶるものゝ如し而して其の所謂詩人にあらざる詩人の詩は「故鄕」「故鄕春色今奈何」「老人と小兒」等の諸篇をもて最とすべきか著者が文章の特質は明晰透徹を旨とするが爲にや往々講話の體に流れ餘韻に乏しきこと每にありと雖も而も其の引喩譬諭の

豊富なる、其の理想のエマルソンに似て清く高き優に此等諸種の文章をして散文の詩中に位せしむるに足る……著者は其の理想動もすればコンコオドの君子の幽遠に出入しときに豪邁として詩人の境界に遊ぶものから其の最も明著なる傾向は殆ど純乎たるアンゲロ、サキソンにして酷だ其の最初の師マコレーに似たり即ち現實を重ん實踐を尚びあくまでもPositiveあくまでもPracticalなり此の故に世間を離れたる空理を惡み當世に實効ある常識なよろこぶ之れが要するに庶民的(平民的)といふ系脈は著者が理想にも文辭にも通徹せり其の改致の講話的なるも其の旨の庶民的なればなるべく其の當世を主とするもまた庶民の暢達を其の理想の根底としたればならん著者已に庶民の利福を主とす其の論ずる所未だ悉く新奇高遠なりといふ能はざれどおしなべて公平健正なり吾人は著者が此の書の卷頭に「不健全なる思想は決して之れ無きを期す」といへるを寛に人を欺かざるべきを保す(早稲田文學)

近世歐米 **歴史之片影**

德富健次郎著

定價 二十錢
郵税 四錢

◎現今有名なる政治家文學家軍人富豪其他の傑人の喜ぶべく愕くべき逸事逸話を最も正確なる出處によりて極めて風趣ある筆致を以て撰擇蒐輯したるもの以て永書長夜の好伴侶伴たるべし(國會新聞)◎小德富翁する處の歴史之片影なるもの將軍、文學者、教育家、大政治家羅如として紙上に現出す零々一冊子と雖も其趣味は頗る富贍なり殊に『世界の末日』の如きは最も面白く讀まれたり(自由新聞)◎歴史の片影(民友社發兌)相變らず面白く作られたり何遍讀んでも面白く書かれたり玉の如き文字もて面白く譯されたり(都新聞)◎直に文學に關したるはアルフォンス、ドオデーの略傳逸事并びに富豪派の文學家ゾラの傳などなれどベスタロッヂの夢を記したる并びに世界の末日といふ題にて或科學者が論じたる想像的世界最終日の記事の如き多少文學に密接なる關係もありて興あり其の他尚入際の記事ありこれまた消夏旅中の好伴侶(早稲田文學)◎此世紀に名を轟かしたる政治家商業家文學者抔の傳あり面白さうなるものを集めて冊子となしたるものなり(時事新報)◎歴雲講都を蔽ふて炎熱やくが如きの時友なし千鳥の形却てゆかしく片破れ月の影却て幽なるを覺ては一碗の澁茶に清意の風を包みて靜かに歴史の片影を眺むる時には避暑三昧の樂にまさるものある可し(青山評論)

德富猪一郎著

近刊

○**吉田松陰**

停春樓主人著

近刊

○**德川家康**

德富健次郎纂譯

(肖像入)
定價 二十錢
郵税 四錢

○**グラッドストン**

德富健次郎纂譯

(肖像入)
定價 十五錢
郵税 四錢

○**武土雷**

徳富健次郎纂譯
○格武電（肖像入）　郵定價二十四錢

竹越與三郎纂譯
○格朗窒（肖像入）　郵定價二十四錢

平田久著
○伊太利建國三傑（肖像入）　郵定價二十四錢

櫻痴居士福地源一郎著
○幕府衰亡論　郵定價三十五錢

竹越與三郎著
○新日本史（上）　郵定價四拾錢

竹越與三郎著
○新日本史（中）　郵定價三拾錢

徳富猪一郎著
○新日本之青年　郵定價四拾錢

徳富猪一郎著
○國民叢書人物管見　郵定價二十五錢

徳富猪一郎著
○國民叢書青年と教育　郵定價四十五錢

徳富猪一郎編纂、久保田米僊畫
○誕生日　郵定價二拾五錢

人心の明鏡處世の秘寶
○一語千金　郵定價五拾錢

徳富猪一郎著
○日本國防論　郵定價五拾錢

梶原保人著
○政黨論　郵定價貳拾五錢

ゼームスブライス著、人見一太郎譯
○平民政治　郵定價四拾五錢

當分の中は特別運賃社費減價を以て二圓五十錢に減價
全貳冊二千九百三十頁
餘正價四圓運賃貳拾錢

湖處子宮崎八百吉著
○歸省　定價四拾五錢　郵稅二

ヴ井クトル、ユーゴー著森田思軒譯
○懷舊　定價四貳拾錢　郵稅四

○第一國民小說　定價四拾五錢　郵稅五

○第二國民小說　定價六拾五錢　郵稅五

○第三國民小說　定價四拾五錢　郵稅五

文學博士元良勇次郎著
○佛國不換紙幣發行始末并信用論　定價貳拾錢　郵稅拾

佛國ブーミー原著　深井英五譯
○佛英米比較憲法論　定價四貳拾錢　郵稅四

人見一太郎著
○第二之維新　定價貳拾錢　郵稅貳拾

國民之友自第一號至第八號社說及特別寄書
○國民之友第一集　定價四貳拾錢　郵稅

國民之友自第十五號至第廿四號社說
○國民之友第三集　定價四拾五錢　郵稅

國民之友自第廿五號至第卅六號社說
○國民之友第四集　定價四拾八錢　郵稅

自第十四號至第廿四號十二冊合本
○國民之友第二卷　定價四拾錢

自第卅七號至第五十四號十八冊合本
○國民之友第四卷　同五拾五錢

自第五十五號至第六十八號十三冊合本
○國民之友第五卷　同五拾錢

自第六十九號至第八十六號十八冊合本
○國民之友第六卷　定價六拾錢

自第八十七號至第百四號十八冊合本

○國民之友第七卷　同六拾錢

自第百五號至第百二十二號十八冊合本

○國民之友第八卷　同七拾錢

自第百二十三號至第百四十號十八冊合本

○國民之友第九卷　同七拾錢

自第百四十一號至第百五十八號十八冊合本

○國民之友第十卷　同七拾錢

自第百五十九號至第百七十六號十八冊合本

○國民之友第十一卷　同七拾錢

自第百七十七號至第百九十四號十八冊合本

○國民之友第十二卷　同七十錢

右は明治二十一年より同二十六年六月に至る活歴史、郵税を要せず

國民新聞

健全なる思想を有するものは健全なる生長をなし、進歩の主義を執るものはまた自ら進歩す、國民新聞は傲然たる獨立大新聞也、彼は金の爲めに動かず、人の爲めに動かず、只た其の抱持せる健全なる平民主義の爲めに動き不平あるものを避け、弱きものを扶け、正を蹈んで恐るゝなきを期す。國民新聞は進歩の友なり、革新の急先鋒なり、進歩する眼孔を以て活動する社會を看、進歩する手腕を以て進歩する大勢を描き出す。日の出來事を知らんと欲する者、一ヶ月の傾向を知らんと欲するもの、年月の大勢を知らんと欲するものは皆な國民新聞を讀め。

定價一枚　金二錢五厘
一ヶ月　金三拾錢
市外郵税　金拾三錢

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　國民新聞社

國民之友

國民之友は既に雜誌界の巨人として認識せられたり、彼の『社説』は眼と手と共に到つて大勢を揣摩し、事に先つて事を論し、靜かにしては人生の問題より、激しては時勢

毎月三回の發兌　定價一冊　金六錢
半ヶ年　前金一圓二錢
市外郵税　五厘

問題、社會問題の骨髓に衝き入る、彼の『寄書』は天下の名士か特に考へ特に草したる卓論を集めたるもの、名家慘憺の經營に成りたる名篇を集めたる『藻鹽草』と双璧の觀をなす『史論』の痛快明透なる見識は以て『雜錄』の艶麗瀟洒なる題目筆力と對すべく、『批評』の精嚴は『時事』の深酷に對すべく『當今之問題』あり『海外思潮』あり『經濟時事』あり、時に『大勢一斑』を揚けて大勢の推移を論す。

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

家庭雜誌

家庭雜誌は社會の地盤を改革し、和樂光明なる新家庭を作らしめんと欲するものなり、其論評は平直、其觀察は警拔、史談あり今古東西烈女偉人を清秀なる筆もて寫し、科學あり最も愉快なる方法を以て物質的文明を說き、文藝には高妙なる小說詩歌音樂繪畫批評詩話文話あり、家政には家事經濟育兒法衛生談看病術調理法社交一斑日用品物價裁縫編物婦人の職業案內家內の取締奴婢の使ひ方及ひ衣食住に關する諸事あり、雜錄あり、時事一斑あり、寄書投書あり、普通雜誌外別に一種の生面を開けり。

毎月二回十日廿五日發兌　定價　金五錢　半ヶ年（十二冊）前金五十錢　一ヶ年（廿四冊）全一圓　郵稅五厘宛

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社